

(題字松陰先生筆蹟擴大撮影)

昭和七年十二月發行

校友會雜誌

第參拾壹號

山口縣立萩中學校々友會

志士の歌

吉田松陰

かくすれば斯くなるものと知りながら止むにやまれぬ大和魂

七たびも生きかへりつゝえみしらを攘はむこゝろわれ忘れめや

身はたとへ武藏の野邊に朽つるとも留めおかましやまと魂

親おもふ心にまさるおやごゝろ今日のおとづれ何と聞くらむ

志士の歌

平野國臣

我が胸のもゆる思ひにくらぶれば煙はうすしさくらじまやま
青雲の向伏すきはみすめろぎの御旗かゞやく御代となしてむ
數ならぬ身にはあれどもねがはくは錦の旗のもとに死にてむ
斯かる世にうまれ逢はずば益良雄の心を盡す甲斐なからまし

記

拜啓 我が帝國の生命線たる滿蒙に於ける我が同胞の生命財産を擁護し我が權益を確保すべき重任を負はれ五寒膚を裂く北滿の曠野に於て凡ゆる困苦と缺乏とに耐へられ暴戾なる支那兵を膺懲し或は不逞極なき匪賊を掃蕩せられ君國の爲め一意奉公の至誠を捧げられ候閣下の御賢勞并に御部下將卒各位の御盡瘁は我等一同の感激措く能はざる處に有之候弊校生徒等は感激の餘各學年總代より別紙慰問文を草し之を御座右に捧呈致度希望申出候

素より文拙にして其意を盡さざるも幸に電覽を賜り彼等が愛國の志に燃ゆる熱誠の微衷を御賢察被下候はば望外の仕合せに存じ奉り候

折角邦家の爲御自愛御健闘益々皇威を中外に宣揚せられん事を祈居候

敬具

昭和六年十二月一日

山口縣立秋中學校長 河内才三

關東軍司令官陸軍中將

本庄 繁閣下

拜啓 益々御健勝之段奉賀候借這般多門中將ハルピン入城之際反吉林軍に對し空軍を以て猛撃を試みられ候結果多大なる損害を匪賊に與へ遂に之をして潰滅に歸せしめられし貴下の忠烈勇敢なる御行動は實に感激措く能はざる所に御座候其の異數なる御動功は貴下并に御家門の御名譽たるは申すに及ばず延いては郷黨の名譽と申すべく謹んで茲に奉慶賀候殊に貴下の如き忠勇の士を我が卒業生中より出したる事は本校の大に誇とする所にして早速此の勇敢なる御活動を全生徒に披露し將來孰れの方面に向ふも貴下の精神を精神として君國の爲盡すべき様訓諭致し候處皆々多大の感激を以て之を迎へ候貴下這回の御行動の我々現在六百の健兒に及ぼさるゝ感化は洵に甚深にして其の訓育上好箇の活資料を取得致し候事を厚く感謝する所に候右御祝詞申上度如此に御座候尙時下不順邦家の爲御自愛御健闘の程切に祈上候

敬具

昭和七年二月十六日

山口縣立萩中學校長 河 内 才 三

陸軍少尉 廣田 一 雄 殿

長門國面影山城址について



特別會員 山 本 博

一、序 言

くらげなす漂へる神代より今日に及ぶ我國の文化史的発展に於いて種々の時代相を見ることを得たが、公家と武家の間に於ける政治上の榮枯盛衰にも亦幾たびかの變遷を眺めることが出来た。その變遷に於いて中世史以降の特に著しい歴史事實は後者即ち所謂武門武家の擡頭と其の政治史上への躍進であつた。此の躍進の可能と實現には彼等と切り離して考へ得ない城廓が見られ、その本據たる城廓が文字通り彼等と密接不離の關係を保ち、一定の地的範圍に構築された「動かざる城」でありながら、中世より近世にかけて力強く働きかけてゐたのであつた。

中世以降の歴史は大部分武門武家の興亡史でもある。武門武家の興亡は同時に彼等の城廓の興亡であり、城廓は兵制史の初頭から武門武家と運命を共にしてゐた。斯くの如く劍戟の絶え間なかつた中世以降の長門國はどうであつたか。「もりのしげり」の示す所に従へば（200頁以降）周防・長門の古城址として百餘城を掲げてゐるが吾人は次の如く纏めて見た。

長門國 阿 武 美 編

11 28

周防國 大 吉 島 敷

三 9 14

計	厚	大	豊				
	狭	津	浦				
62	7	8	8				
計	熊	佐	玖	都			
	毛	波	珂	濃			
48	4	5	7	9			

即ち防長二國通じて百十城、他國の數と比して如何に多數であるかを知ると共に、如何に又武門の活躍が熾んであつたかを物語る。就中、長門特に阿武郡の二十八城址存在は、たとひ將來他郡に於いて發見することあるべき城址數を豫期するとも、その首位たるの事實は變化しないであらう。これらの城廓は忽如として或る時期に全部構築されたものではない。従つて阿武郡に於ける武門の活躍はこれらの城廓を年代づけることから窺ふことも出来るであらう。

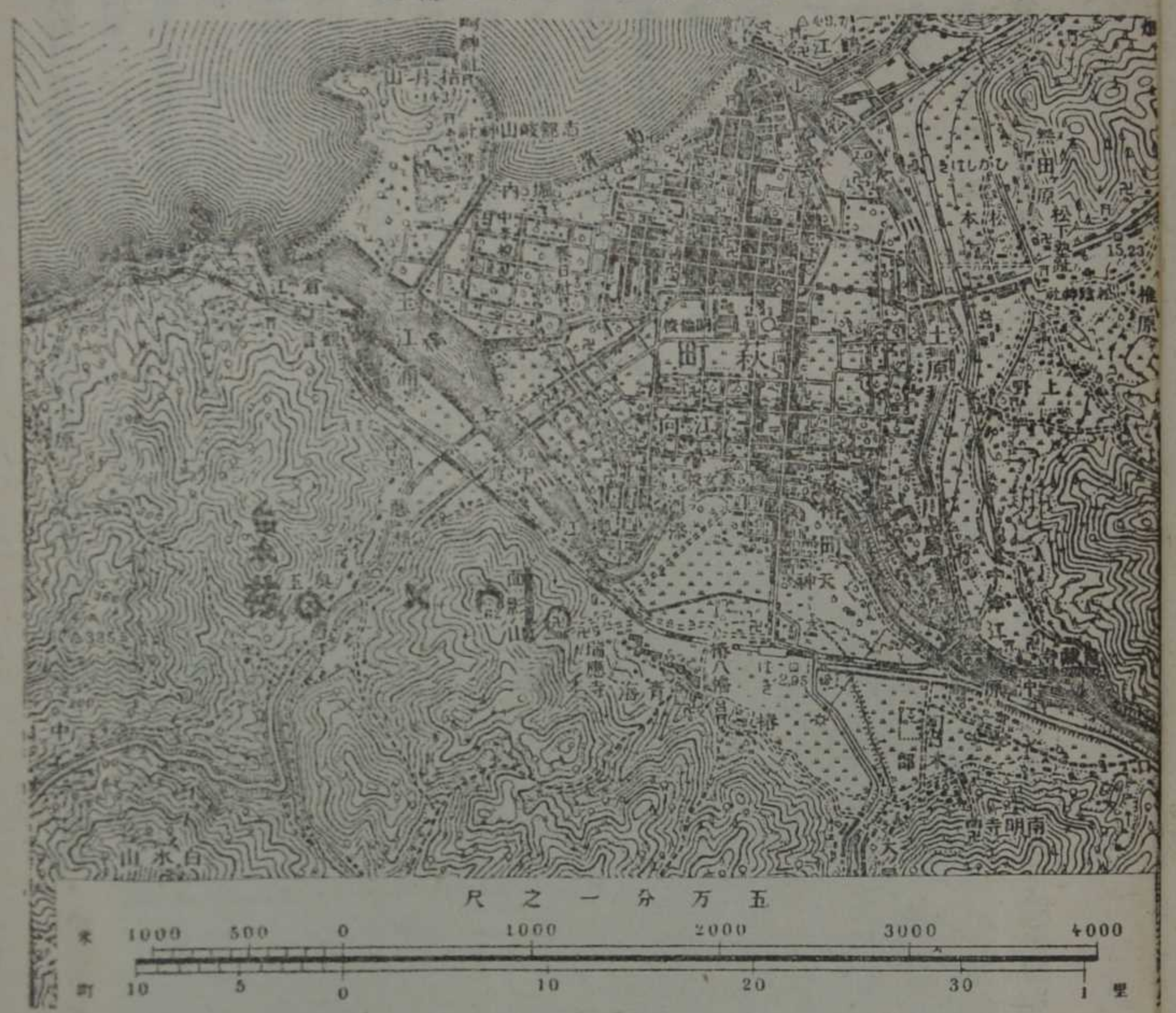
歴史の波には高低があつた。或る時は文に高く或る時は武に於いて高かつた。築城の盛行は云ふまでもなく武に於いて波の高かつた時であり、従つて該時代の發展委相を求めるとは武門武家について眺める方が遙かに忠實である筈である。史家はこれを武家時代と呼ぶ。

郷土のほまれは歴史を通じて回顧され、回顧に依つて現在を知り、將來を律することの指針を形づくる。阿武郡の生んだ歴史は尠くとも阿武民衆の士氣を鼓舞するに充分であらねばならぬ。それは必ずしも武に限るべきでもなく、文に於いてのみでもない。まことに郷土を愛するならば、歴史の研究を以て社會的には「温故知新」を、科學的には學術の發展に寄與する所有らねばならぬ。吾人は防長に牛耳る阿武郡古城址の數へ、更に一箇を加へ聊かの管見を披瀝した。幸に博雅の叱正を得ば吾人の欣喜これに過ぎるものはない。

二、面影山城址の現状

面影山、それは城址の存する山としては餘りにも優しき名稱ではあつた。萩市の西南、玉江橋を西に渡れば直ぐ左

第一面影山とその近附



手に在る標高二六二米の山、第一圖はその位置、第二圖は東北方よりこれを望める姿相であつて、前に流れるは阿武川の下流たる橋本川である。面影山の北は沖積層の萩市を俯瞰のうちらに收め、遙かに海を控へ、西と南は山に連り、東は橋本川を越えて萩市より羽賀臺方面に對してゐる。即ち北に海、西と南に山、東に平野を見、脚下に川を控へて位置し、而も面影山は丘陵の北端に在つて、第二圖の如く海に近き部が稍方形の突角を成し、後方は圓錐形と成り兩者を合すれば恰も古墳の前方後圓の形に庶幾い。川に面する地形稍急峻なる上全山殆んど叢林繁茂し、道と稱するものなく繁根錯節を越え竹木に縋りつゝ攀り得るに過ぎない。

昭和七年七月二十二日、萩中學校

敦論河野通毅氏及び同校生徒四名と共に城址を探るべくこれに登り、地形の大體を知り城廓の遺址を確かめることが出来た。第二圖に見える方面より頂上の前方部と後圓部の中央、鞍部を登り、概ね兩者の中間頂上に出て、次いで左に折れて後圓部へ登つたが、左折してから登ること十間ほどにして左右に岩石の點在するを認め得た。これらの岩石は築城の當時こゝまで運搬されたもの或は上部石壘の破壊して顛落したものであらう。後圓部頂上の石壘は小規模にして西と南の二方面はこれを缺ぐも東と北には昔影を語る程度に残存してゐた。その配置は第三圖の略圖に

第二圖 面影山を東北より望む

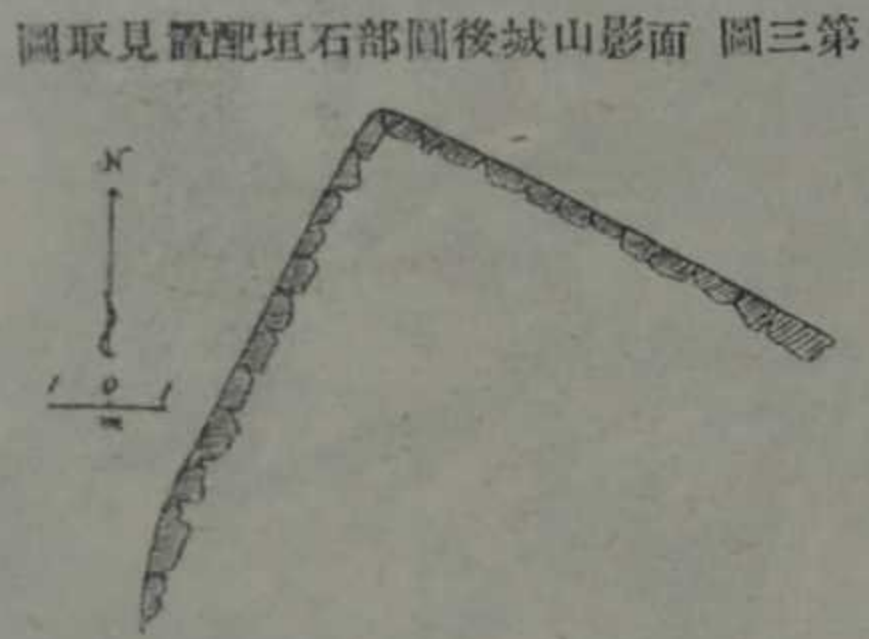


依つて知るべく、北々東と北々西の二方面に残存してゐる。しかしながら現存の石壘は第三圖の如く全部有るのではなく、一部分これを缺ぐ所も有り、大體に於いて右の如く各部の長さ約十米若しこの長さの方形が頂上に於ける石壘内の面積なりとすれば、尠くとも百平方米の面積は有つた筈であり、而も現地の状況を見るに石壘内部のみは殆んど平坦となり、明らかに人爲的に營造されたこと考へしめる。石壘は東部と南部を缺ぐも南部は峰續きを以て南方の山に連り東部は急傾斜を呈し、下方の彼處此處に大なる石材の散在が有つた。

第四圖は北々西部の一部分にして、最も原状を偲ばしむと推察した所を寫したのであるが、この部の高さ、基底

より最高部一米一〇を有し第四圖の如き形状の大小不規則な安山岩質の割石を以て積み重ねてあつた。頂上よりする展望は第二圖を以て概ね推察し得る如く、現存の樹木を適當に伐り拂ふならば玉江丘陵より北及び東の萩市全形並びに東南方を指呼の間に收めることが出来るであらう。後圓部に於いて吾人は右述の如き石壘の残存を認め、面影山の形態と橋本川を控へた要害を考慮してこの石壘を城廓址なりと判断するに何等の躊躇も感じなかつた更に前方部をも探らんとしたが、叢林雜木錯綜して到底夏季踏査の不可能なるを知り、この部は後日の調査に残さなければならなかつた。

斯くて下山路を白水小學校の方向に採つたのであるが(第一圖参照)前方部と後圓部の中間の鞍部を降ること約百八十九米の地點即ち麓より約五六十米の中腹に於て平面が第五圖の如き石壘址を見出したのであつた。第六圖はその一部にして、寫眞の如く高さ約一米一〇の玄武岩割石造りの石壘を以て



第三圖 面影山後圓部石壘配置見取圖
吾人は此の矩形石壘址を以て後述の如く織豊時代以前の城廓に於いて屢伴ふことある「居館」址なるべしと推定する。此の石壘址が頂上の石壘と築造法の類似する點、及び頂上城廓の麓に當るの點、並びに、規模稍大にして地形に則し(東部が高く西部が低し)且つ、次に述ぶる如く矩形内に二段の土壘を構築せし痕跡を認むる諸點は、此れを武家の居館址なりと推定することの妥當なるを

察せしめる。矩形石壘の主たる特徴は右の如く、第五圖のAは幅一米二〇、深さ〇米七〇、長さ二〇米の小濠とも見られ、Bはそれより數米東に在つて高さ約一米、Cは更にBより高くAより見て約二米、Bより見て一米の高さに造られた土壘の如き形態を有し、BAC共に南北に並行し、殘餘の矩形は概ね平坦ではあるが、山腹のこととて幾分の傾斜を免れない。

頂上に於いてもこの山腹に於いても石壘以外に何等の營作物を認め得なかつたが、若し山腹の矩形石壘が吾人の推

定の如く居館址なりとすれば、面影山城址は居館を伴ふ城廓として尠くとも阿武郡古城址中の古き部に數へ入れられねばならない。居館とは即ち武家の平常の住所にして有事の際は一應此處にて防禦し、最後の支點を頂上の城廓に頼らんとする二段構への營作に外ならない。

三、築城史上の面影山城址

縣立秋圖書館所藏の古寫圖に依つて面影山城の存在を求めんとしたが、「萩之圖」なる文祿三年の寫圖——安藤紀一氏の考證に依れば、この圖は寛保元年（A.D. 1741 徳川八代將軍吉宗）より遠からぬ以前のもの——に依るも面影山附近と思はる上の年代を推定することとゞまり、その成果も漠然たる「時代」を以て答へざるを得なかつた。

第四圖 面影山後圓頂石の壘



所に寺院らしき建物のみ畫かれ他に何等の記入もない。今一つ「萩最古圖」——安藤氏の考證に依れば寛文十年（A.D. 1670 四代家綱）以後延寶三年以前の寫圖——を見るも玉江附近に何等の記入もなく、萩圖書館所藏の二古圖は面影山城址解決には役立たなかつた。換言すればこれらの地圖の出來た當時既に城址の存在すら忘れられた過去に屬してゐたのであつた。茲に於いて文献方面よりこれを求めんとして稿末の諸書を一讀し幾多の論文雜誌に求めたがこれも遂に何等の手掛かりとは成らなかつた。従つて與へられた最後の解決鍵は城廓址そのものを以て我が築城史

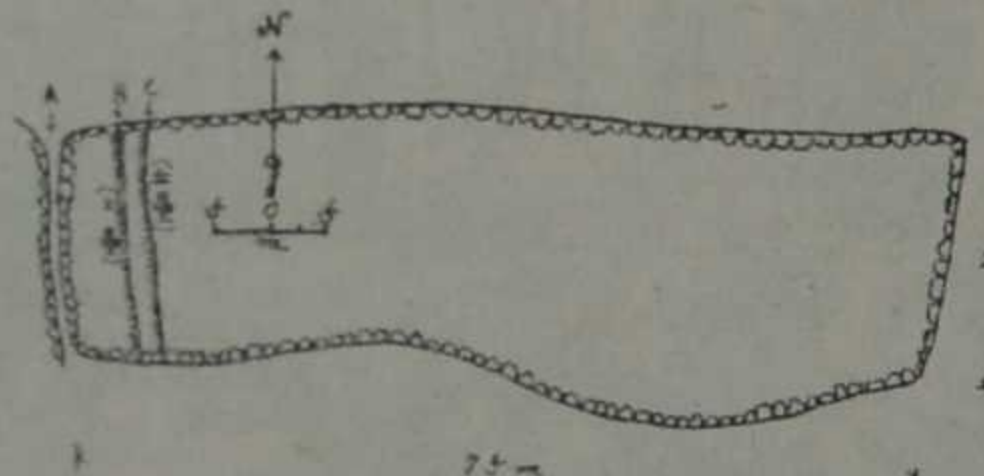
梅屋

土井千孝

八

丘陵を利用した城廓、山城と居館を有する城廓、面影山城址の如き形式は果してどの時代まで遡つて求め得るや。この問題の解決には、單に面影山城址のみに着眼すべきではなく、——爰ではたゞ暗示することとゞめ詳細は後考に俟つのであるが——面影山上より東南方五〇〇米とは離れてゐない「嶽觀音」にまで及ばなければならぬ。傳ふる所に依れば（「尊王を主とせる萩史蹟」15頁）同觀音は大照院に附屬し、同院は南明寺と共に行基菩薩の開基と云ふ更に吾人の里人より聞く所に依れば嶽觀音はもと面影山後方の頂上部に在つたのが火災の厄後現在の地に移つたと云ふ。我國史上寺院にして山上に築造され、大いに宗派を擴めたのは云ふまでもなく平安時代であり天台・眞言の二宗の出現以降に屬してゐる。今傳説の如く大照院・南明寺の二つが奈良時代にその淵源を發してゐるとしても、直ちに以て嶽觀音をも同時代に比定するは危険であらぬ。

第五圖 面影山中頂石垣平面取圖



が現存位置より更に上方の頂上に在つたと云ふ點は看過し難く、既述の如く面影山頂上の石壘のうち東と南にはこれを缺ぎ而もその方向は觀音の舊位置と傳へらるゝ所に當り、事實上峰続きでもあり、觀音と城址との間は二〇〇米とは隔つてゐない。由來城廓の守護として屢選ばるゝものに四天王有るは國史上著明の事實であり、武家と宗教、城廓と守護神の連鎖は我國の長い傳統であつた。嶽觀音が面影山城址と同じ峯続きの近距離内に在る事實は、其處に何等かの關係が有つたかもしれないがこの解決は觀音の詳査を経なければならぬ。

信長、秀吉、家康を以て代表する、織豊徳川初期の時代は從來の城廓から新しい形式の城廓に進み入つた時代であつた。信長の清洲・岐阜・安土の城、秀吉の大阪・伏見の城、家康以降の江戸・駿河・名古屋の城等、換言すれば安土城の築造から江戸城の完成までは、信長の覇權掌握から徳川の基礎確立まであり、城廓の歴史から云へば大規模

「歴史地理」

瑞城考	2の3	川住鋸三郎氏
熊本城	2の7	松崎求巳氏
ヤグラ	2の9	喜田貞吉氏
神籠石	2の9	小林庄太郎氏
羽後國雄勝城址考定之圖	3の10	上法茂雄氏
雄勝城考	3の10	上法茂雄氏
神籠石は何ぞや	4の5	喜田貞吉氏
喜田氏の神籠石論を読む	4の6	八木柴三郎氏
神籠石は全地球の問題	4の10	久米邦武氏
再び神籠石に就て	5の135	八木柴三郎氏
牧場の周垣と神籠石	5の4	喜田貞吉氏
安土城址に就て	9の1	辻善之助氏
桃山城	10の1	堀田璋左右氏
相馬小高城	10の6	吉田勿來氏
佐和山城に就いて	11の34	渡邊世祐氏
豊前京都郡の神籠石及石門に就きて	11の5	伊東尾四郎氏
北武史蹟紀行	13の1	青眼氏
京阪及び東北地方諸城郭の比較	13の12	大類伸氏
所謂神籠石は果して山城か	20の4	喜田貞吉氏
伊賀上野城考	22の1	菊川理年男氏
寺院と城郭	22の2	大類伸氏
所謂神籠石に就て	23の1	白鳥庫吉氏
白鳥博士の神籠石論に就て	23の1	大類伸氏
近時發表せられたる神籠石論を読む	23の2	喜田貞吉氏
神籠石は山城なるを主張す	23の2	谷井清一氏
朝鮮式山城址の發見	23の4	中山平次郎氏
東條城考	24の4	磯谷才次郎氏
讚岐境の浦考	26の3	喜田貞吉氏
越前一乗谷石佛と朝倉氏の崇佛	30の3	上田三平氏
會津城	31の2	岡部精一氏
怡土築城考	31の4	大類伸氏
備後福山城	34の3	花見翔巳氏
廣島城	34の6	三井大作氏
南群に於ける文祿慶長の築城	25の5637の23456	三千雄氏
越前一乗谷城調査報告	38の1	作
鶴越と一の谷	38の2	大西脚人氏
杉原盛重と尾高城	38の43	喜田貞吉氏
	39の3	衣笠健雄氏

鉢形城紀行

鉢形城	13の6	劍郎氏
名古屋の築城	14の1	渡邊世祐氏
金の東京城考	14の2	堀田璋左右氏
「神籠石號」	15の1	松井等氏
筑後平野と高良山	15の3	(諸論文を集む)
朝鮮の山城	15の4	喜田貞吉氏
神籠石探險勝栗毛	15の56	幣原坦氏
清正公と島山城	15の46	大峰外二氏
楠公と南河内	16の1	幣原坦氏
神籠石と磐境	16の2	大類伸氏
近江國醒ヶ井に發見せる神籠石様の列石	16の3	喜田貞吉氏
神籠石に就いて	16の4	中川泉三氏
對馬城山の石門に就きて	16の4	柳田國男氏
近江醒ヶ井村神籠石様の列石に就て	17の2	伊東尾四郎氏
越前金ヶ崎城守に就て	17の3	藤井甚太郎氏
鳥羽と鳥羽城址	18の1	大類伸氏
鳥羽と鳥羽城址の補遺	18の45	深澤總吉氏
安土城に就いて	18の6	深澤總吉氏
	19の1	渡邊世祐氏

膳澤城址について

膳澤城址について	40の4	大森金五郎氏
雄勝城址考	41の56	深澤多市氏

「考古學雜誌」には主として神籠石論多し。「史學雜誌」「歴史と地理」にも有れど省略す。

酔筆

特別會員 津 村 義 男

一四

序にかへて酔筆の自己辯明を、一寸ばかり披露して置き度い。一體つむらといふ男は、元來の粗忽者でその上是非々の天の邪鬼だから、何時如何なる場合に周圍から苦情を持ち込まれぬとも限らない。仍で、災難よけにすつぱりと被つたのが、酔筆といふ般若の面である。

彼は、この面を唆かしてどこまで狂ひ惚けることやら。×プラス×。それは恐らく彼自身にも解るまいと思ふ。

◇ひねくれもの

一體、ひねくれると言ふことは、ある勢を無理に堰くから生ずるもので、譬へば見事に剪り揃へられた盆栽の松が天真爛漫の心を失ひ、籠に閉ぢこめられた小鳥が朗らかな眼を忘れる様に、人も常に四角四面な規範に叩かれてゐると、却つて潜行的になり、寧ろ犯罪的に痲痺するらしい。愆んなや、こしい教戒を、こんな小賢しい道徳を、木つ葉微塵に打碎いて、もつと明るい、もつと伸び暢びした人生を掴んで欲しいものだ。

◇正氣の沙汰？

物質主義で固められた人達からは、算盤を弾いてゐる様な感じを受けるし、精神主義で淨められてゐる人達からは線香を燻してゐる様な匂ひを受ける。算盤になり度い線香になり度い——と騒いでゐる人達は一體ほん氣で喚びいてゐるのだらうか。

◇苦 笑

俺は學識があるぞ、地位が高いぞ——と鼻うごめかす人がある。こんな人々に限つて思想的、人格的に基礎の不安定なものが多い。全く茄子の木に南京が生つた様で危ぶなくて見られたものぢあない。美しい着物をつけなれと美人

になれない女。上級學校へ入學することのみが中學生の爲すべき全部だと考へる者。此等も皆んな同類項か、阿々。

◇ハンドル

ハンドルの操縦次第で飛行機も墜ちる。觀念の操縦如何によつて人生は喜怒哀樂の氣まぐれ者を生む。そこらで脱線してゐる奴は莫いか。あつたら素直に廻れ、右するがよからうぜ。

◇人 間

凡そ人間といふ厄介な尊稱を貰つたからには、時として失戀に哭くのも良い。或ひは名利に齷齪するのも面白い。然し我々は常に朗らかに泣き、恒に明るく懊惱すべきである。毆られた犬は明日の復讐を忘れ、捕はれた魚は泉水に悠然と泳ぐ。苦しみを嘆き、怒を現はす事は、杓子にもやれるが、歎息を爆笑に紛らし、憤怒を諧謔に轉することは鳥渡むづかしい藝當だ。その難しい放れ業をやりとほす處に愉快が伴ひ、自適が生れる。

だが、全く愁へ嘆くことを忘れては不可ない。統のやうに透きとほつた乙女の頬を、あの綺麗な眞珠がほろ／＼と傳ふときに、甘い抒情詩が醸され、また仄かな夢が揺れるのだ。故に楊貴妃がその蛾眉を擧めたときに、金城湯池もベンベン草を生じ、天下の形勢も逆轉する。茲に至つて、美人の泪は絶世の詩材となり、佳人の眉は運命の骸骨に變る。

だが、全く忿ることを忘れてはならない。丈夫の一喝は猛虎を聳ませ、その鐵拳は雷霆にも勝る。秀吉の眼光には六十餘州も鳴りを鎮め、ナポレオンの掌中には歐洲の地圖も丸めこまれた。それも面白いが、而しまだ尻の穴が小さい。

我々は須らく生活と思想とを別個の世界として取扱ふべきである。此の地上に於ては、人間らしい喜怒哀樂を弄びながら、かの一瞬の靜思に永久の生命を搜し求めねばならぬ。即ち、肉體を社會の羈絆に放置して六塵に塗らせながら、一方にては精神の安息を宇宙の外に需めて常に超然と、恒に粹然と、そして飄然として無の心境に遊ぶべきであらう。

る。愚人は之を指して二重生活と罵しり、賢人はこれを稱して人生逃避だと嗤ふ。これらの人間は何時までも首の鎖を外しきれずに、五尺の地上を徘徊する愚かな牛馬であるか。

生活から思想を獨立させることに依つて、純粹の客觀が生まれ、第六感と生活との間に餘猶の波が寄せ返る。即ち己れは陋巷の一小人でありながら、又かの宇宙の一朋友でもあつて、電光に隠れる千里の飛脚を務める。こゝまで徹底すると、總ての虚偽が洗濯され、あらゆる雜念が掃きされ、醜惡の假面が剥がれ、蹣跚の思想は本然に戻り、身は朗明の淵に戯むれ、心は樂天の雲に誇がる。有に四散して無に參堂するとは、蓋し、玄之又玄と言ふべきか。秃筆を弄すれば枚擧に追がない。呆けるにも程があるものを。この邊で第一卷の終と致しませう。

滿洲より

紀元節を迎へて (第一信)

歩兵大尉 西村 鴻介

私共此の滿蒙警備の第一線たる齊々哈爾に於て皇紀正に二千五百九十二年の紀元節を迎へることが出来ました事を一代の盛事とよろこんで居ります。又當日は日本陸軍としては勿論大日本帝國としても極めて有意義に且得意の絶頂に於てすべてが進行した事を持ち申述べたいのであります。

此の吉日朝来いよ／＼天空晴渡り氣温は零下二十餘度を示し風なくさすがに滿蒙の平和と吉兆とを物語る様であり

ました。我が大隊では午前九時皇居にあたります東南の方向を選んで整列し遙拜の式はあげられたのであります。此の捧げ銃の間將士一同は身異郷にありながら彼の支那兵や支那人の惨めさに比べて何の不自由なく何不足なく何の苦しみもなく安らかなうちに日々の任務を盡す事が出来るのは他なし、是れ 天皇陛下の御稜威と我が無雙無比の國體とが然らしめる所でありまして且國民の眞剣な後援の賜であることを念じつゝ感慨無量——愈々奉公の誠を誓ひたいのであります。君が代の喇叭は矢留ケ岡(我が東大營の岡をかく命名されました)を感歴して餘韻は長く西邊の興安嶺にも届くかと思はれたのであります。續いて大隊長の訓示があつて式をどちました。

午後一時から内地の建國祭に準じまして、日、鮮、支、蒙聯合の慶祝大游行が行はれました。我が居留民のためには建國祭の意味に於きまして又支那側のためには滿蒙新國家樹立が其の緒につきましたので之を促進歡迎するの趣旨に於て日支各團體(支那側は商務會、自治指導會、省城公安局、龍江縣電燈廠、電話局、電報局、交渉官醫院、齊克鐵路及五教道德院、蒙旗事務所等發起)合流しまして省城西南隅龍沙公園に集合しました。先づ我が野砲兵の祝砲に始まり次いで飛行機の慶祝飛行宣傳ビラの撒布がありました。當日の參集者は約一萬で省城に於ての支那側要人吉祥(張景惠代表)以下殆んど全部出場したのであります。

祝砲が終りますと共に游行に移つたのであります。街上市は人で以て滿たされ車馬の通行は絶對出来なかつた程でありまして、新國家謳歌の宣傳ビラを貼り乍ら群衆は動きました。そして城内副司令官公署及我が旅團司令部前で萬歳を三唱し午後三時解散したのであります。尙此の游行には露人も參加したと傳へられて居ります。

更に當日は、日鮮支蒙の齊々哈爾に於ての代表者約二百名は龍江飯店(レストラン)に會しまして祝宴を催し歡聲滿堂。相互親善の誼を厚くし午後五時終宴。其の開宴に先ち日本居留民の數名は命によりまして龍江飯店前に集りました群衆に對して金票(日本貨幣)十錢白銅貨で百圓投げて施しました。彼等支那人は競ふて之を拾ひ、喜色四邊に漂ふた情景はとても内地に於ては見られない日支親善の場面でありました。これを以て本日のすべてが終りを告げた

のであります。確かに滿蒙の一般に對して多大の衝動を興へ得ました事と思ひます。勿論以上は日本側の企圖及指導に依るものであります。が、かうして彼等の日本軍隊否我が帝國に對する信賴の度は今後益々加はるのであります。我が帝國の國威も益々發揚されて行く譯であります。従つて滿蒙隈なく日章旗の翻るのも近い將來であると思ふべきであります。

此の時にあたりまして私共は彼等と相携さへて滿蒙を樂土とする新國家の一日も早く建設される様に仕向けてやると共に其國家内容の眞に優秀ならんことを祈つて已まない次第であります。尙今後共暇を求めまして皆様に何か御知らせしたいと考へて居ります。

日本軍禮讚 (第二信)

今冬は内地も滿洲も三十年來の暖氣と稱しますが、私共滿蒙の地で警備の第一線に立つて居るものはどれだけ仕合せて居るかわかりません。これにつきまして支那の民衆は次の如くいふて居ります。

彼等は一 generally 無學でありまして動もすれば迷信家たるの資格は充分にあるかも知れませんが、けれども心から彼等は「日本の軍隊が来たから其れで今年はこの暖かであつて日本の軍隊には神様がついて居る。」と口々にいふて居るのであります。蓋し古來日本は神國であるとか弘安の役には所謂神風のために敗れ歸つたのであるとか、日本軍は日清、日露戰には強かつたとかいふ歴史的事實につきまして知つて居るものは前述の如き状態と且あれ支排日思想を煽つて教育された支那人には少なからうと思はれます。兎に角知つて居るか居ないかは別問題としまして今の處日本の軍隊に對して精神的に尊敬の念を持つて居ることは確實であります。

此の間も私共の居ります齊々哈爾東大營の近くに由緒ありさうな大きな寺院があります。中隊の下士官數名が休日に行くところもありますので其處を見せて貰ひに行つたさうであります。さうしますと其の住職は「支那の軍隊に

は絶對見せないが日本の軍隊の方であるから……」といふて寺院内を全部案内して見せてくれたさうであります。その支那の軍隊に見せないといふのは時に聖所を汚され或は破壊甚しきに至つて掠奪等をされるからであります。元來支那人は墳墓とか寺院とかいふ處は大切にしまして滅多に掘り返したり見せたりしない様であります。所謂國破れて山河がそのまゝにある如く寺院等は大概其のまゝに保存されて居る様に思はれます。併し支那普通一般の墓は至極簡單な一箇の土盛りで過ぎませんので大したものではありません。稍々話が横道に入りましたが以上の如く日本軍隊に接してはすべての人が氣心を許し寛大であります。又屢々新聞等で報導されて居ります通り滿蒙一般の民衆は其殆んど大部が日本軍の駐屯を希望して居るのであります。其の譯は既に已に御承知のことと思ひますから茲には詳しく申述べませんが要するに彼等は自國の軍隊は連戰連敗で頼むに足らないのみならず保護の任にあたるべき軍隊がなく彼等の生命を奪ひ去り又掠奪強姦等に及ぶるなくそのために終始苦しめられて居りますので信賴どころではなく蛇蝎の如く嫌つて居ります。本當に頼る所のない彼等支那民衆こそ可愛想な者であります。従つて之に反して日本禮讚の聲はかなり大きいのであります。其の最も甚だしい一例としてこんなのがあります。省城(齊々哈爾)の東方部落(省城附近の部落は特別支那軍隊や馬賊のために苦しめられて居ります)の一農民が日本軍を稱揚した處で支那軍隊に連行嚴重な取調べをうけてましてひどく打つ蹴るの體刑を加へられましたが其農民は「殺されても日本軍を稱揚します」と豪語いたしましたして取調官をして遂に其の改言強要を斷念させたといふことであります。お互にさうした文でも腦がすーつとさうするではありませんか。此の如きは彼等の日本軍隊に對する感謝の結晶であると思へられます。

次に省城には馬占山の部下大佐以下約千五百の軍隊が居りまして省城の北部に駐屯して馬賊討伐其他に従事いたして居ります。省城の北方約三里に乃門棧といふ部落があります。其處はよく馬賊に襲はれます。それで附近には近頃馬占山部下の軍隊も一部居りましたので私共も安心して居ります。其處の勇者がつい先達馬をこぼして救援を求めて來ました。そら！といふので大隊は自動車に乗りまして約百名のものが山砲、機關銃を持つて急遽討伐に行きました。

其の附近まで行きますとわれ先きにと黒く汚れた手拭や帽子を振つて出て來まして馬賊の位置、行動を知らせませす。其のよるこぶ様は大したものであんなに頼つて居るのかと感心させられました。そんなわけですぐ側に居る支那軍隊には頼らず且通り道の支那軍隊にも告げず省城の東で遠くに居ります私共日本軍隊にかけつけて來る處に或大きな何物かがあると伺はれます。これ彼等の絶對的信頼を表はすものではありませんまいか。今回はこれをきませんが平穩であること云はれて居ります當地附近も尙彼様な状態でありまして私共は何んどかして一日も早く彼の匪賊を平げて禍根を斷ち滿蒙三千万民衆を安堵させてやりたいと日夜心を碎いて奮闘して居るところであります。それが私共の彼等の信頼に對する義務であると信じて居ります。

戰跡視察に隨ひて (第三信)

關東軍司令官本庄閣下來齊中。三月十七日は軍司令官の戰跡視察の日で私は中隊主力を以てその護衛を命ぜられました。且當日は旅團の一部歩兵第三十一聯隊が奉天へ急遽出動を命ぜられて出發の朝でありました。従つて驛は時ならぬ混雜を呈して居りました。私は命に依りまして午前八時三十分迄には龍江驛(齊々哈爾停車場)に至つて列車に搭乘し、附近を警戒しつゝ、軍司令官の來着と午前九時の發車時刻を待つて居りました。然るに其の時刻までには軍司令官の自動車は見えなかつたのです。一同不審に思つて居りますと其處へ驛長が飛んで來まして曰く「今日馬占山が同行するので約三十分列車の出發が後れます」との事「そうですか……」と言ひ乍ら一同顔を見合せました。

私は今日こそおもしろいものが見られると心ひそかによろこびました。併し一般乗客こそいゝ迷惑であります。内地では列車の時間には上下共に皆が間に合せるのでありますが此の滿洲ではさうでなく省長の行動に列車の方が合せるのであります。或は今日は特別かも知れませんが支那人のやりきうな事——これではたまらないとつくづく思はせられました。午前九時三十分頃馬占山は軍司令官に後れて到着。列車は汽笛勇しく動き出しました。私共は軍司

令官室の隣に陣取りました。そこには説明役の方々と私共のグループ即ち小隊長の早川中尉、旅團のS大尉、活動寫眞班のR中尉と私の四人でありました。「本當に今日はおもしろいことになりましたね……」。「こんなことは古今東西今までにないでせう……」。「吳越同舟それ以上ですね、とにかく相方の當の責任者たる兩軍司令官が戰場で相まみえるといふのですからね。」私も仲間入をしました。「けれども歐洲戦後あたりにはあつたかも知れませんが——何んといつても歴史的シーンですね」私共四人の間にはこんな會話が交はされて居りました。更に私は「まあよく馬占山は來る氣になつたものだ。やつぱり支那式だ。日本人なら何んと言はれうが來ない。一體どんな顔してどんな風に答へるだらうか? その時の感じはどうだらう」などと一人考へて見ました。列車は際涯のない——時には所々に小丘阜のある雪の曠野を真直に南方さして走つて居ります。途中部落らしいものは見えす丘の上にも一つ二つの枯木同様の而も小さい潤葉樹が見えるばかりでこの沿線は殺風景なものです。併し私に取りましては去る十二月二日齊々哈爾に前進した時見ましたのみで二回目の事故まだ見覚えのないところもあり且好奇心も手傳つて移り行く車窓の景に靜かに見入つて居つたのであります。約五十分にして榆樹屯驛に到着。列車は全く西折して昂々溪に入り東支線と連絡し再び榆樹屯驛に引きかへして南下しはじめます。この間約二十分を要します。そして東支線を横切りまです。その時東支線を下に見つゝクロスします。餘りわるい氣持ではありません。暫くすると私共が乗つて進みつゝある洗昂線の昂々溪驛に着きます。此の邊から三間房戰團の場面に入ります。地形は今までと違ひまして山地とはいきませんが高地帯に入ります。一同中腰に成つて地圖と照合して附近を探りつゝ進みます。右方に三間房の部落ははつきり雪の上に浮き出て見えかなりの部落など言ふ感じがします。すると誰か「(某旅團副官?)」。「あそこには醫者が居るよ」との話が出ます。同じく右に湯地の部落を見て湯地の驛に停車。更に汽車は南下を續けます。地形には變化なく高地の起伏が重つて居ります。丘上には樹木依然として乏しく全くない處もあります。所謂坊主山で私共が戰闘するために必要な目標にする一本木を發見し得る程度であります。列車は漸次彼の有名な大興激戰の

戰場に近きつゝあります。湯地驛を経てその地域を去ること二十分餘高地帯も何時しか盡きて列車は下りの緩傾斜を滑り前方には平地が見え始めます。そして大興驛に到着。此處まで先刻の計時から約一時三十分かゝつて居ります。あと三十分間で江橋驛に到りますので晝食と言ふことになりました。一同食パンを食べ乍ら兩側の平地を眺めつゝ嫩江に架けられた第一から第五までの鐵橋を逆に渡つて行きます。かねて此の河には尺餘の鯉がうよ／＼してすぐ釣れる取れるときいて居りましたので氷の割れ目の少い比較的透明な部分をよく見入つたのですが遂に見付ることが出来ませんでした。又私共が北上する時には河岸に敵砲彈の跡を見たのでありますが、四ヶ月餘を経ました當日は既に春初以來起つた彼の砂風のために掻き消されてどこにもそれらしいものは見えなかつたのであります。午後零時半頃江橋驛着。下車！ 此の日の輸送指揮官たる私の號令。此矮地には我が一小隊の守備隊が居ります。此處で特別列車は仕立てられ既に蒸氣を吐いて待つて居りました。ホームで若干田上大隊長の大興戰大體の説明がありました。馬占山の口は少しも動きません。乗車！ 列車は今來ました經路を反對に北進を始めます。嫩江の第一鐵橋の手前で列車はどまり河畔の土手の上を上りまして北方はるかに大興の陣地を望みまして説明に入ります。私共の眼は列車が停車してから馬占山に注がれて居りました事は間違ありません。馬占山は車から降りますと前がかり姿勢の小足で皆と堤防に上ります。極く身體も軽く動く様に感じました。説明中彼は多くを語らず黙々として列車に引きかへしました。あの當時敵のために焼却されました第三鐵橋は木の色新しく修理された上部は中洲の上に見えて居ります。列車は大興を指して進みます。此の附近の各驛には御承知の張海鵬の軍隊が我が軍と共に守備して居ります。列車が大興驛に入りますと、その地の隊長らしいのが指揮を採りまして整列した一隊は敬禮して喇叭を吹きました。兵はこれを見ましても氣の脱けた而も何んだか變な顔して唯號令のまゝに動いて居るだけで訓練されてないことを直感しました。その上喇叭手は十六七歳位のもので眼玉をきよ／＼させながら喇叭で音を出して居りましたので一同苦笑を禁じ得ませんでした。そこへ後れて龍江驛を立ちました歩兵第三十一聯隊の列車が勇しくはしつて來ました。互に健康を祈

りつゝ暫しの間別れを告げました。その列車が動き出すと又喇叭は始まりました。喇叭の亂發だ！ さうでない飽くまで日本軍には敬意を表して居るのであることを申添へます下車！ 直に軍司令官の前後を守りながら私の中隊は進みました。目標は大興驛の東南方約三千里の大興陣地の最高所。驛前の東側にある戦没者のさゝやかな木標を立てた墓に拜をあげて前進。既に張海鵬の小隊は廣間隔に散開して我中隊の前方側方を遠く警戒しつゝ前進して居りました。高地に登り着いて見ますと遙かに認めて居りました一本の木標には次の如く誌されてありました「昭和六年十一月六日鈴木中隊之ヲ占領ス依ツテ鈴木堡壘ト命名ス」即ち歩兵第二十九聯隊第二中隊が下士以下二名の犠牲を拂つて占領したところでありました。暫し此の木標に向つて黙禱を捧げました。此の附近一帯の高地は二百米内外の高さを持つて居ります。何しろ雪上三千里餘の道なき原を行くのでありますからなか／＼容易ではありません。馬占山は軍司令官や旅團長に後れまして到着。田上大隊長の説明が始まります。馬占山は暫くするとボーイから煙草を買つてのみました。終始うつむきがちに立つて居りました。附近には馬占山軍の作りました散兵壕や掩蔽部や機關銃、歩兵砲、野砲の陣地等が其のまゝに苦戦のあとを語つて居ります。説明は先づ南向きして江橋附近から始まりました。次に東方から北方に互りました。その間馬占山は説明毎に軍司令官の韓雲陳を介しての間ひに對して異存なければ頷いて居りましたが我が右翼を遠く包圍した馬軍の騎兵の處に行きますと説明者は約六百、馬占山は約一千を以つて包圍したメ力強いひ放ちました。それで軍司令官も「約一千……」と合點されました。更にその時奮戦して死んだ張連（中隊）長のことを稱揚して居りました。彼の感や一層無量の様でありました。けれども其の顔には大きな變化なく兩頬のかすかに血色を増したのみでありました。それ等前後の情景は所謂劇的シーンでありまして私共も感を深うしたのであります。此の高地で馬占山に向けられたレンズの数は可なりありました。因に韓雲階は大坂の高等工業學校を出て居りまして日本語が巧みで今回の政變で黒龍江省政府の實業廳長を馬占山から任命されて居りまして彼の腹心の部下であります。大興戦跡もかくして視察を終りました。列車は午後の日をうけて長い黒影を雲上に引きつゝ湯

地驛に向つて前進します。車中は今見た鈴木堡壘上の話で持ち切つて居りました。やかて海地驛につきまます。同驛から北進すること二千米餘の地點に停車。時間も豫定より多くかゝりましたので急ぎ足で列車を捨て湯地東北方約三千米の高地にのぼります。此の處では第二師團から來られました旅團副官と野砲兵隊長とが説明の役でありました。此の時には韓雲階は疲れたと見えて列車に残りましたがさすがに馬占山は過去のリコードを語るその者の如く元氣で附いて來て居りました。通譯の韓雲階が居りませんので軍司令官自ら支那語で馬占山と交話されましたが此處では大興の如き劇的シーンは見られませんでした。敵陣地前五、六百米内外の線に我が長谷部旅團が攻撃のため夜明け迄に作りました各個の掩體は雪を冠りまして白い飛石の如く各所に残つて居りました。時間を急ぎまして一同山を降り車中の人となりしました。列車は一路齊々哈爾に向つて前進いたしました。車中隣室に於ては兩軍指揮官相當述懐談に花が咲いたとの事でありましたが私共も由もありません。唯馬占山は當時戰場に居りませんので直接指揮をなし得ずそれが因をなしてあの敗戦を招いたと残念がつて居つたさうであります。これに引きかへて軍司令官は此の歴史的會見を非常に満足に思つて居るといはれたさうであります。列車は夕日の影淡い午後五時半無事龍江驛に歸着いたしました。下車！ 中隊一同任を終へまして安堵いたしました。

(附記) 要圖をさ考へましたがすでにあの當時内地各新聞に掲げられましたので省略いたしました。あしからず。



銃音

昭和七年二月上旬、朔風荒く雪深き滿蒙の野に奮戦中の我校卒業生將士に、慰問狀と校友會雜誌第三十號を贈呈せるに折返し感謝狀來る。言々句々に愛國の熱血進る。庶くは諸子よ。餘瀝を汲みて期する所あれ。

在錦州獨立飛行第八中隊

航空兵少尉 廣田 一 雄

拜啓 只今は同窓會より御鄭重なる芳墨賜り小生感佩不能措次第に御座候何等戦功御座なきものに過ぎず御言葉恐縮に奉存候御鞭撻の御言辭に對し精一杯働く所存に御座候へば何卒御安意賜り度御願申上候
事件は益々擴大展開し上海事件も我國に好轉せんとする情勢に有之候も嵐の前の静さを思はしむるもの有之候
愈々重大決意を以て臨むべき秋かと愚考仕りをり候
滿蒙の地には愈々滿蒙聯邦共和國の宣言を見るに至り

たるは我々一同慶賀祝福する次第に御座候

先は御禮申上度如斯御座候 頓首 (二月十九日)

滿洲關東軍司令部氣付歩兵第七十七聯隊

歩兵大尉 藤井 勇

先般は御丁寧なる慰問狀並に校友會雜誌御送附に預り御厚志深く感謝仕居候同窓會より通信に接する節思ひは遠く且つ古く母校生活の過去に走せ感慨深きもの有之候目下新民府にあり藤原大尉も同地に第十一回卒業佐伯總四郎大尉殿は歩兵第三十九旅團兵器部長として打虎山にて勤務中に候先づは右御禮迄 (三月五日)

哈爾濱新市街セルセル兵營内歩兵第十六聯隊

兵步中佐 南方 秋 亮

拜復 本日は御鄭重なる御慰問の書狀を戴き御厚情の

段深く御禮申上候

昨夏滿洲事變突發以來國民の後援と在留同胞の援助により昨今漸く滿洲の治安も維持せられ聊か期待に副ふ事を得申候段小生等の努力の酬いられしものと心竝に喜び居候次第に御座候然れども尙當滿蒙の建設には幾多の困難努力を要し小生等の努力を要する事も大なるもの有之可申と被存候不相變奮勵以て國民の期待に副はんと心掛居候次第に御座候間不相變御後援の程願上候

去る二月五日當地に入城約十日間孤立無援然も敵中に於て常に不安の中に終始せし在留居留民の心からなる歡迎を受け申候て今日迄警備致居候次第寒氣も目下の處平均十度位に御座候間割合に凌ぎ易く御座候先は不取敢右御禮申述度如斯に御座候尙御序の際は同窓會各位によりしく御傳言願上候 (二月二十日)

滿洲派遣混成第四旅團步兵第五聯隊第一大隊第八中隊

歩兵中尉 進 藤 研 治

謹啓仕り候

本日は御鄭重なる御慰問賜り誠に有り難く深謝罷り

有り候今度の事變仰せの如く 皇國の危機に關する重大事にして我々國民の奮然立つべき時に御座候此時に當り不肖の身を以て國防の第一線に立ち滿蒙の地に活躍するを得候は小官無上の光榮にして之一つに往年母校に於て訓育せられしによるものと深謝致し居り候御手紙頂く迄もなく小官方より御禮申上ぐべきに候ひしが渡滿以來東奔西走奉天に新民に四平街に再び西南下し錦州に山海關にと各地に轉戦仕り候間つひつゝ失禮仕り候 目下は當齊々哈爾にて鈴木旅團長の下に有之候當地一帶遂次秩序を回復し來たり申候内地出發の際は一死君國に報ぜん決心に候ひしが未だ花々しき勳功をも建て得ず唯機の到來を待ち居り候

先は亂筆にて御禮かたぐゝ近況御報知まで御在校の先生各位(安藤、山本、相島、金子諸先生)並びに同窓各位に宜敷御傳言被下度候 (二月十九日)

天津第五師團臨時派遣隊第十中隊

上等兵 河 村 一 雄

拜啓 先日は御懇情溢るゝ御慰問の辭と校友會報を御

頂戴仕り誠に有難く厚く御禮申上候

陳者小生御蔭を以て出征以來元氣に御奉公致し居候間乍他事何卒御安心被下度候學校の近況も會報にて覗ひ申し感慨無量星空を望みひたすら校運の益々隆盛ならんことを御祈り申候

銃後の皆様の御懇情と御聲援は實に皇軍の意氣をして益々強からしめし所有之候

今後は益々感奮致し一死報國の誠を以て皇國の生命線の確保に邁進致す覺悟に御座候

尙末筆ながら職員各位生徒諸君の御健康を御祈り申上候先は亂筆拙文ながら御禮申上候 匆々 (三月五日)

於新民支那家屋温突上歩七七歩兵砲隊長

歩兵大尉 藤 原 忠 治

拜復 御芳墨難有多謝、九月出動以來奉天洮南鄭家屯天津山海關錦州義州熱河南境を巡りて目下新民府附近の治安維持に任じ居候寒氣漸く烈しく討伐の爲夜間の行動は相當に苦心も多く有之候へども燃ゆるが如き内地の御後援は私共の心に鞭ちて勇躍せしむるもの多く有之候

我聯隊は將校に防長の健兒多く決して名を辱かしめざる様御互に努力致居候間御安心被下度候

凡生皇國爲人云々の松陰先生の句も思ひ出され懐かしく存候校友會雜誌面白く耽讀感謝仕り候
時候柄切に御自愛祈上候 (二月二十一日)

南滿洲打虎山歩三九旅團司令部附

砲兵大尉 佐 伯 繩 四 郎

謹啓 先般は御丁寧なる御慰問狀を賜はり厚く御禮申上候かくも母校の先輩並各位の御熱誠なる御後援に依り私共母校の名譽の爲め日夜奮闘仕居候近日無事任務完了歸隊の豫定にて候又先輩並各位と拜領の榮を得る機會もあらんと樂しみ居り候

先は右御禮申上度如斯に御座候 敬具 (四月十三日)



慰問状

北滿の風雲急を告げ我が將士日夜嚴寒を凌ぎ銃火を交ふるの時、その勞苦を偲ぶに堪へざるものあり、こは些か司令官以下將卒の勞を慰めんとし、愛國赤誠の血潮の自ら凝りしもの日附は昭和六年十一月廿八日、關東軍司令官陸軍中將本庄繁閣下宛

一年 河村 定一

きつい木枯が朝夕吹き初めまして、日本内地はもう大分寒くなりましたが、まして皆々様のおいでになる滿洲はなほく、冷たい事と御察し致します。

あの寒い滿洲で皆々様が國家の爲に御働き下さいます事は、私共の大變有難く思ふ所であります。滿洲にある日本帝國の地位を保ち、又私達日本の同胞を御守り下されあくまでも正義の爲に戦つて下さつて、日本帝國の安全を御計り下さる事を思ひますと、唯々感謝の外はありません。又號外で見ますと何時も日本軍の勝利ばかりで

あります。之で皆々様がごんなに一致協同して又生命を捨て、お働き下さいますかが良くく分ります。

私達は皆日本軍の勝利を祈つてゐます。誰も滿洲で支那軍と戦ひたいと勇んでゐます。私達も亦將來一旦緩急ある場合は必ず君の爲國の爲に戦はうと心に覺悟してゐます。

どうか不正な支那軍を御伐ちになつて御凱旋下さつて日本全國民の心を安らかにさせて下さい。

御體を大切になさつて内地の事に御懸念なく戦つて下さい。

どうか皆々様の御健闘をお祈り申します。

二年 能美 忠廣

チリン／＼！ 鈴の音と共に投げ込んで行く號外に

私達若者の血は躍ります。我が生命線たる滿洲の野で零下何度といふ寒さと戦ひ頑強な敵を打掃ひ邦人を保護して下さる忠勇義烈な軍人の方々の事を思つて私達の心は感謝の文字で一杯です。條約を無視して併行線を敷設したり、其他數々の目もあてられぬ暴虐な手段を以て我が同胞を苦しめる支那兵を滿洲の天地から追ひ拂ひ滿蒙をして住みよい土地にして下さいませ。あの張學良の様に良民に重税を課し邦人を虐げる者は飽くまで排斥して戴きたいのであります。

國際聯盟はともすれば饒舌な支那人の口に動かされ支那に好意を持ちます。支那はこれに乗じて、悪事を我に塗りつけ滿蒙に於ける我が權益を奪取して了はうと盛に運動を續けて居ます。數多の我が同胞が血を流して始めて得た滿蒙をどうして手離されませう。私達は陛下を中心に死ぬまで滿蒙を守りませう。南嶺寛城子の戦を見ても盡忠報國の念に燃える日本男兒の赤き心が窺はれます。よし支那兵が何十萬居るにしろ微動だにすることではありません。

萬物凍る北滿の野で既得權益擁護と在滿邦人保護の重

任を帯びて寧日なき活動を續けられる閣下に對して深く感謝の意を表します。私達は大日本帝國の爲世界平和の爲に心から閣下の御奮闘を祈ります。

三年 柳井 清

總てを凍らす北滿の風の便りの様に、ちりん／＼と響く號外の鈴。私はその號外を手にした時、起るは唯々感謝と敬虔の情のみであります。

茫茫として千里、懐しき母國を後に、あの殺人的な大アジア大陸の寒氣を吹きつける朔風、狂ふ北滿の曠野に於て、十萬の我が同胞が鮮血を流して勝ち得た滿蒙の權益を、そして我が日本帝國の生命線を固守される皇軍は暴戻飽く無き兵隊をおさへられる一方では、夜の陳營に襲ひ来る酷寒と闘つてゐられます。それを思ふ時、我等母國の學徒は、ぬく／＼と炬燵にあたつて居る事がどうして出来ませうか。

零下三十餘度、それは普通寒暖計の目盛の最低氣温です。その寒さは、我等内地で、覺の上で、如何に想像しようとしても、到底想像の範圍を越えた酷烈さでせう。

大自然の研ぎ澄ました双の様な、鋭い寒さを持つ北満洲の冬に、我が將士諸君の耐え忍ばれる苦難は……。あゝ、何時も我等の兩眼には唯まごろに、あつい感謝の念の沸くのを感じます。

私達は毎日、掲示場に、或は電柱に、祖國の爲に、我等日本人の爲に、一命を賭して戦つて居られる將士諸君の有様を、感ひの情報を、眺めやうと群集せる人々を見受けます。

私はよく、空の澄んだ夜に、皎々として無心に輝く月を仰ぐ時、今我が忠勇なる將士諸君は、如何であらうかと遙かに滿洲の事を思ひます。死の沈黙の如き静寂な戦ひの後に、酷寒の大氣の中に、皚々たる雪野原のテントそして、幕内で僅かな暖をとつてまごろまれる諸將士の姿。

空の風が砂を交へて、飄々と吹きまくるテントの外で風の音にも神経を働かされる歩哨兵の姿。

私は雪の曠野を夢見て、何時しか涙ぐまれます。

せめて我等母國の學徒は、精神的に出征軍人を後援せんとする責務がある事を痛感して、今此處に慰問の文を

五年 吉田榮一

謹啓 今回の滿蒙に於ける支那の態度は實に暴慢無禮であります。滿蒙には我が十數萬の同胞が血を流して得たる幾多の權益が儼乎として存在してゐます。然るに支那は此權益を無視し我が同胞の生命財産までも危険に陥らしめ排日侮日に汲汲とし加之一面には國際聯盟にてあらゆる虚言を陳ねて正義を破壊し東洋の平和を擾亂するが如き行爲を敢て爲しつゝあります。誠に重大な危機に於りました。これ昭和聖代の一大國難即ち國民全體の問題擧國一致して當るべき國難にして一步退くことは應てそれが我が國の存立を危くするものと解します。この重大な時機に當つて既得權益の確保と在滿同胞の生命財産を保護する目的を以て日夜滿蒙の曠野に奮闘されつゝある閣下並に在滿將卒各位の御辛苦さこそと推察致します。特に御地方は已に零下三十幾度の酷寒の季節折角御自愛遊ばされて向後益々國家の爲め御奮勵あらんことを切望します。

尙我等中五年生一同は滿洲事變勃發以來特にこれが成行に注目し軍事教練に勵み近くは兵營に宿泊して實際

差上げます。

どうか御健康にして、且つ武運の御長久を祈ります。

四年 田坂興道

謹啓 極東滿蒙の地風雲突如急を告げ彼頻りに侮蔑的挑戰的行爲を敢てし遂に駐在帝國魏狄の自衛行動の已むなきに至り候。閣下親しく三軍の精銳を御統率相成り善隣の誠意を披瀝し防衛の適機を斟酌し時に臨み變に應じ善く彼の暴を徴し虐を膺ち在留百餘萬の帝國同胞を塗炭の苦中より御救護相成り我が權益擁護の爲御盡瘁致され候段閣下の御賢謀御大慮並に御部下將卒諸氏の御奮勵御努力誠に以て感激深謝に堪へず候。

將來國際聯盟の狀勢と露支兩國の行動とにより如何なる大事の惹起致し候かも圖られずその趨勢に依りては閣下の御統制に依頼する所多々これあるべく候間酷寒殊域の風土硝煙彈雨の幕營裡に此の上とも御自愛遊ばされ候様邦家の爲切に祈り奉り候

茲に寸楮を呈し謹んで御見舞申上げ候 誠惶頓首

を體驗致し以て自衛の道を立て滿蒙に奮闘される出征軍人の後顧の憂を斷たんものと努めて居ります。更に先日長春本願寺主任にして本校の出身たる南部法電師の滿洲に於ける現狀の講演を聴き益々發奮興起致しました。茲に謹んで五年生一同を代表して深く深謝の意を表します。

秋 吉 臺 特別會員 津村幽笑

せんぶりを摘む子等もなし行きゆけぞ
高原の秋はつゞけるものを
辯當發すてたる傍に龍膽は
秋の力を持ちて咲きたり
山腹をや、降りくれば遠ざかに
見ゆる家らは秋吉ならむ
漸くに下りとなれば龍胆の
一二本欲しく遅れつゝゆく



飛行機上の兄

私の兄

四年 武田正典

私の兄は飛行少尉で滿洲の野に於て、御國の爲に盡くしてゐられます。彼の父即ち我共の父は背高く負けぬ氣の人でありました。母もやはり氣性の強い方でありました。こんな両親に育てられました兄は、氣も強く、物に臆せず、自然のまゝにすく／＼と育つた人であります。兄は私とは精神氣風に於て、甚しき相違があります。父は兄の中學時代に、あの世へ旅立ちました。兄は其の時に一大決心をなして、父の務められた會社に就職して、夜十二時頃迄も働いて學資金を作りながら中學校に通ひ、一家四人を扶養せられました。

此の間に兄は何を志したのでありませうか。兄は英語數學が得意でありました。故に英語を以て身を立てんと

す元氣で身を以て國に盡して居る。安心せよ。母上を頼む。」

と私は之を讀んで常に兄上が、母上の事を思ひながら御國の爲に盡くしてゐられる事を思ふと、自分の孝行の足らない事を恥じます。

兄は、度々手紙を送られて戦況を報じ、且感想を漏らされますが、その手紙の最後には必ず母上を頼むといふ意味が書かれてあります。

又「兄が上空より落す爆彈の爲に、多數の人々が死ぬるが、彼等のあはれな人々の爲め冥福を祈つてやつて下さい。」等と書いてあつた事もあります。又

兵匪の爲に住民が苦しんでゐるのか、一方に於ては、兵匪の掃蕩の光景が詳しく書いてあつた事もあります。

「正典君よ、常に勉強せよ」「母上を……」の語が私の脳裏にしみこんで、その望にそふべく私は今努力しつゝあります。

兄に送る

兄上よ、現在奉天にゐまして、護國の任に當らるゝ兄

志された事もありました。

然し遂に身を軍籍に投ずる事になりまして、御國の爲に盡して居られます。兄の手紙には常に唯死を以て國に報ずる一念しか表はれて居りませぬ。而して最後には必ず母上の事を頼むといふ數語が記載されてゐます。

然るに私は母上に盡す事なく我が儘ばかりして、兄の願を無視してゐるやうであります。

嗚呼、兄は今年二十六歳の青年士官で元氣旺盛に、身を以て、君國の爲に盡くしてゐられます。私も兄の志を成就させたいと祈つてゐます。

兄の手紙

滿洲より來た、兄の手紙には次の如きものがあります。「正典君、試験もすんだね、どうだったか。兄も相變ら

上よ、父の死後能く私共一家を扶養し、母をして安堵せしめられたのは、ひとへに兄上の御恩と深く感謝致します。

然るに私は碌々として兄上の恩も報いないで、却て心配をかけますのみで實に忍び難い事であります。兄上は滿洲に於て御國の爲に盡されてゐられる事を、私共一家の名譽としてゐます。父上もさぞ地下に於て、喜んでおいでにならませう。兄上よ、御父様は常にあの世から兄上の身邊を御守りになつて居られるでせう。どうか、一家の事はお氣にかけられずその任務を完うせられん事を祈つて居ります。左様なら。

附記 武田君の兄上は反吉林軍空撃に偉勳を建て

し廣田一雄少尉

英文欄

“The Utopia of Vigorous Youths”

by K. Tasaka

The four seasons have repeated their own course as often as the water-mills turning ceaselessly over the shoals, since our middle school was for the first time styled after the name of “Hagi”, or Lespedeza, celebrated for its tasteful colour. The world changes daily, and it is not what it used to be; we can now hardly find any vestige of old Hagi, which has ever since been drawn into the whirlpool of new tendency.

Few spots there exist, if any, however, where Nature has been more generous in her gifts than here in the city of Hagi. In the north of the city, under a verdant pyramid called Shizuki-yama, our school-building stands. There we find, as it

卅四

were, an actual paradise, where boys here study assiduously, and there play vigorously every day, enjoying the melodious notes of the undulating waves lapping the beach of Kiku-ga-hama near by.

“Not useless will we study;
Not fruitless will we read.

Flowers, though beautiful on trees,
If void of fruits, will wither vain.....”

This is the first stanza of our school-song; through which we are all taught and shown the highroads to our aims; observing the teachings of which we shall each have a perfect fruit of life. If education is to be much influenced by environment, it would not be too much to say that no school is more favoured by natural surroundings than ours.

I hear often some people say the golden age of Hagi has passed. Has the age really passed?

The answer to the question is by no means affirmative. We vigorous youths here never stray from the path of prosperity and welfare, and moreover, incredible is it that the environment should leave us to do so, for the spirits of the veterans of the Restoration are still in our minds to make us always perceive a ray of hope beyond.

Quite natural it is that the intense feelings at the bottom of our hearts are to be excited to take advantage of good opportunities like a dormant volcano ready to become active. It will not be a long time before we simple, vigorous youths in Hagi shall actualize our long cherished desire, with which we are ever anxious to make of our school—the Utopia realized—the only cradle noted for its producing many an eminent personage in rapid succession. (The End.)

“Star”

by J. Kaneko

“Twinkle, twinkle, little star.

How I wonder what you are,
Up above the world so high,
Like a diamond in the sky!”

Hushed silence reigns over the night fair and star-spangled. I raise my eyes slowly towards the deep sky with its star-peopled space. How luminous and brilliant those stars are! How radiant and prominent those heavenly bodies twinkle! “Araruni ya Sado ni yokotô Ama no-gawa.”

How magnificent this piece of verse resounds! The very Milky Way runs now about the middle of the jet black space called sky, casting and scattering bewitching rays and silvery powders down us below.

I see now spotted here and there on a gloom profound a number of diamonds, rubies and sapphires——ornaments on Lady Universe’s nightly costume. Behold how they toss themselves like so many lilies blooming white on the sur-

卅五

face of a clear, calm lake; how they are moving
or gliding westward by a hair's breadth, without
forgetting to advance with crawl steps. Oh, the
gems of heaven, the flowers of sky! I feel I roam
in the boundless field of heaven star-paved.
Hush, on heavenly winds float the sweet tones
of melody.

How happy we are! How blessed a man is!
Man only can look up the star-wheels illumined
bright. Numberless groups of stars look
down upon the realms below from a mysterious
world far away. Who can overlook the living
spirits between heaven and earth—the great
powers of the universe?

In the four seasons, all the year round, the
stars, changing severally, inform us splendid
celestial prospects. They bewray all the sam-
ples of paradise conceivable. Imagine how com-
fortable I felt when I saw overhead the ever-

changing planets or constellations rich in mytho-
logy wink and fade, showing a number of ani-
mals living in society.

The stars are indeed the symbols of truth,
good and beauty themselves. Their constant
blinking or twinkling represents refreshing
innocence together with fervent passion; does it
not reveal the heart of inexhaustible Life? Yea,
the star symbolizes permanence or infinitude.
Even in a wink of the star, moment by moment,
does the universe undergo a ceaseless change,
containing in itself all kinds of stars wrapped
in the dress of perpetuity. Watching the brilliant
lights of stars, we cannot but feel how short
and limited this life is. The stars suggest us
something. Show us, stars, serenity and placidity;
divulge purity and loftiness; and display for
men below models of beauty for good and all.
(The End.)



生徒作品

眞 晝

一年 栢山成美

焼きつける様な夏の眞晝中、空は青く道はまるで灰の
様だ。道邊の草はほこりをあび眞白い。太陽はますく
強い光で大地を照りつける。只蟻は冬の食物を貯へる爲
であらう、一心に働いてゐる。蟬はいつも耳やかましく
じい／＼と鳴いてゐる。

何を見ても強い光線で見える。特にトタン屋根
や瓦屋根の上には水飴色の熱氣が立上つてゐる。物音は
一つせず、白日の直下にさらすをおそれた、生物は皆日
蔭にかくれてゐる。唯海水浴に行く人だけは暑さもこら
へ急ぎ行く。時々アイスクリーム賣のだるさうな聲が聞

える。いまままで水に浸しておいた西瓜を一同切つて食べ
た。

紅の實はさく／＼と白い齒でまられる。一時は暑さ
を忘れた様だ。

海 邊 で

一年 田村正好

濱の家から水泳着で草を踏んで松林に出た。眞白い雲
が快晴の青空にくつきりと浮かんで軽く／＼飛んで来る
向ふに微かに見えるのは何といふ島だらう。昨日は見
えなかつたが。笠山も實に見事だ。海は穏かで波もない
水と空と接する所は、はつきりと一直線を畫いてゐる。

飛込臺には眞黒な人々が寝轉んで居る。さながら龜が甲羅を乾して居るやうだ。浅い所では浮袋を持つた子供等が「ばちや／＼」やつてゐる。赤黄黒色様々の海水着が入り交つて美しい。「どぼーん」と飛込臺の方で音がした。誰かが飛び込んだのだ。眞晝の日に焼きつくやうになつた。

砂の上では腹這ひになつたり、相撲を取つたり、愉快に遊んで居る。僕も手足の關節を延ばして海に躍り込んだ。飛沫がばつと四方に散つてよい心持だ。

雨の停車場

一年 水津 要人

雨が土砂降に降つてゐる。停車場を目がけて自動車が出して奥へ行つてしまふ。自動車は止まつても汗をだら／＼ながしてゐる。濡れた人が頭をちぢめて、軒下にかげこんで来る。停車場の中には人氣がない。蒸氣の湯氣と煙が風にもや／＼とさらはれてゐる。無数のレールが

濡れて鈍い色に光り此處彼處に機關車が牛のやうに臥はつてゐる。赤いランプをさげて潜水夫のやうな黒い合羽の頭巾をかむつた驛夫が行つたり來たりしてゐる。ブリキの屋根を打つ雨音が一しきりする。

眞晝

一年 芳野 正

青い空の一方には綿を重ねた様な雲が現れてつんだりくづれたりして居る。

今は午後〇時。金も石もどかさばかりの暑さ、鳥も鳴かず、人も通らず、木の葉も動かす、風鈴の短冊も死んでしまつて居る。長い舌を出してくるしさうな息をつめて居る犬は火をはいて居るのではあるまいか。道ばたの草は大抵枯れてしまつて、庭の朝顔の葉もくたりとしほれて、あはれ大病人となつてゐる。

家の内で一番風通しのよい所へ座をしめてうちはを手のやすみなしに使つて居るがそれでも汗がびつしよりだ。「あゝやはり冬の方がよいかしらん」と考へた。

海邊で

一年 大藤 威

すが／＼しい朝だ。足にまかせて海邊へ出た。静かな海面をゆら／＼と煙をはいて通る發動船が、いかにものどかな感じを僕に與へてくれる。

あ！魚が飛んだ。鈍い光線があたつてゐる海の上に二匹、魚がピチャリと音をたて、飛び上つた。其のあとに丸い輪が四ツ五ツ描かれた。

足を海水浴場の方に運んだ。人々がいかにも面白さうに泳いでゐる。

涼しい濱風にふかれながらぶらんこに乗つた。だんだん勢がつくと何とも言へない。すーつと魂が天に登る様な氣持がした。

今までゆら／＼と進んでゐた發動船が急に速力を出して大きな丸い煙をのこして指月山の後にかくれた。折から太陽が一だんと強く下界を照らした。

眞晝

一年 石川 俊夫

日本晴のよい天氣。今日も亦朝からやきつくやうな熱さだ。自動車の通つた後のほこりまじりのむし熱い空氣がたゞようて居る。裏山のせみが熱さを訴へるやうに啼いて居る。荷車もあえぎながら通つて行く。晝食後兄さんと水泳に行く。ふと東の空を仰ぐと一點の夕立雲がきみ悪く出た。と、見る／＼と大空を埋めた。冷い濕氣づいた風が夕立の前ぶれのやうに云つた。僕等は大意ぎで歸つた。「ザー」と物すごい夕立。「ゴロ／＼」雷の響。道。屋根。さうして裏山の木も。熱さは洗はれた。遅れた雲が上空を行く。うれしさうな蟬の聲も聞える。近頃になすすしい晝だ。

西瓜

一年 大和 信夫

「やあー大きい西瓜がなつたぞ、おや／＼二つなつてる

二つ。「僕は西瓜をつくつたのは今年が初めてである。二つの大きい西瓜は眞夏の強い光に照らされてびか／＼光つて居る。それを見ると何だかうれしくてたまらない。僕は西瓜の側につか／＼とよつてか／＼へて見たがなかなか重い。二つの西瓜をかわる／＼か／＼へて、どちらが重いか較べて見た。其の次にはた／＼いて見た。どちらがボンボンと音がして何しろうれしい。僕は其の西瓜をそつと葉の下に入れてやつた。

西瓜

一年 吉村 重和

弟が鼻の頭に汗をかいて晝寝をしてゐる。その傍に蠅が三匹頭をつめよせて、相談してゐる。何の相談か知らないが、多分弟の顔をなめに行くのだらう。窓を開けても風はちつとも入らない。梨の木も桃の木も皆ぐつたりして動かない。橋の下の小川の水音が、かすかに聞えて、小石が白く光つてゐる。そのそばの細い道を、雨をかついだ、男が通る。きつと汗ぐつしよりに

今朝僕が顔を洗つて居たら、成田の三ちゃん、風呂敷に何か丸いものを包んで、重さうにさげて、僕の家に入つた。耳を澄ませて聞いて居ると、お母さんの、お禮を言はれる聲が、かすかに聞える。僕は其瞬間何んだらう？……多分西瓜だらうと思つた。思つて居た通りそれは西瓜だつた。その時の僕の喜びは一通りでなかつたが、僕よりも、もつと／＼喜んで居たのは弟である。弟は外にも出す、西瓜の側にばかり居る様子であつた。晝前僕が英語の復習をして居たら、西瓜だ、西瓜だ、と、弟の聲がする。もう勉強なんかして居る氣持にはなれない。いちもくさんに臺所へ走つた。丁度其時お母さんが西瓜に庖丁をあてゝ居られた。やはり、弟は西瓜の側を

眞晝

一年 中邑 直彦

離れないと見えて其處に居た。

夏休第一日

一年 熊谷 正雄

燕

一年 小林 康雄

燕がどうも長屋に居ると思つて、行つて見ると、半分位巢を作つて居る。数日して、又行つて見ると、今度は巢を作り上げて居る。あの小さい嘴に、少しの土を運んで作り上げたのだ。燕でも、塵も積もれば山となる、といふ諺を、知つて居るのであらうか。此の頃は小さい、ひなをかへして、一生懸命育て居る。

蟲を取つて来た燕は、長屋に入る前に、一二度廻りつゝ、合圖であらうか、きゆ／＼と泣く。すると子燕は、半身を乗り出して、答へるのか、きゆ／＼と泣く。すると安心したかの如く、親燕はすゝと入つて来て、餌を子燕に與へて、飛び去る。

此の様子を見て、僕は燕でも、餌を與へに入るのに、警戒するのを感じた。

いよ／＼今日より學校へ行かなくても良いのだと思ふて起きると何だか氣がぬけた様だ。緑葉の蜜柑畑で切干を拾ひながら一學期を顧りみると病氣で勉強を妨げられたこと等随分残念だ。けれど僕が體を壊したのだ。

よし……夏休中攝制を守り水泳の運動で體をねらう。もう日科も作製した。午前は一心不亂に勉強し一學期の取り戻した。したら二學期は面白いだらう。製作したモーターが動く様など考へると胸はわき腕は鳴る。とにかく夏休を健康と勉強で通さう。これ程幸福なことは無い。一學期の頭へ入れたおみやげは少いがもう仕方がない。それよりは仕事を進めよう。實行だと重い籠を持ち帰り、豫定通り夕食まで仕事を進め満足して明日小野田で両親に會ふこと等考へながら寝た。

西瓜

一年 日溪 鞠負

「ザクリ」。とかぶりついた、此の西瓜の味。ほんとうに咽喉がグビツと鳴つて、小踊りしさうだ。甘くてたつぷりした水氣。軟い齒ざわり、………夏と言へば直ぐ西瓜を聯想する程、西瓜好きの僕には、冷い西瓜を食べる時には、黒い種までが眞珠の様に思はれる。また「ザクリ」。………甘い汁があごを傳つて、浴衣の上に「ボタリ」と一滴落ちた。傍で食べてゐた妹は、残り惜しさうに白い皮を手から離した。

働くもの

一年 山根 忠雄

労働。労働の尊さよ。

僕等がたんぼ道を歩く時、健康な農夫が太陽の光に照らされ働き続ける様を見た時何ともいへない愉快と労働

くと忽ちのうちにアルプスの山々が競ひ立つた様になつた。「はい、これを佛様に」とお母さんがおつしやつた兄さんの西瓜を佛壇に供へにもつてたつた後は皆喜びのうち大きな西瓜の山をばくり／＼と食ひはじめた。「おい、もう食ふのかい」と跳んで来た兄さんがくやしさにいつた。皆ごつと笑ふ。

果實店

一年 森重 美槌

吉田町に或一軒の果實店があります。黒紫がかつたぶだうが、箱の中より圓い腫をのぞかして街上の人を見ている。又、バナ、が半圓形の細長い顔を出してならんで居ます。それらの間に「百目十せん」と言ふやうな札が無難作に立つて居ます。紙の中から梨が斑點のついたなめらかな皮を出して居ます。水蜜桃の黄色い皮膚、トマトの眞赤なほつべた、それらが彼の鏡に映つて、一そふ多く見えるのも面白い。秋の果實店で王位にあるのはぶどうであらう。あの水々しい圓き黒紫の腫は、實に實

四二

の美しさを感じる。

眞夏の暑さと戦ひ冬の準備に急ぐ蟻、軒に巢を作るつばめ、會社及び銀行で働く人、學校へ行く人、何れにせよ働くものだ。それ／＼自分の目的に向つて行くものだ。働く時は氣持よい、働いた後も氣持よい。實に働くものは美しいものだ。

西瓜

一年 小橋 安次郎

「冷えた／＼」と兄さんが丸く風呂敷につゝんだ西瓜を重さうにかゝへこんで来た。包をほごいて見ると丸々とふとつて居て實にうまさうな西瓜だ。のせてあるまな板の上をちやうど豚の運動會のやうにころ／＼と轉げ廻る。お母さんの持出してこられた庖丁の先が西瓜にさはつた。皆息を凝し眸を集つめて動く庖丁の先をじ／＼と見つめて居る。

「すぶり／＼」とさしも大きな西瓜も眞二つに割れて赤い實は味覺をそゝる。「三度づゝすぶり／＼」と切つて行

石かと思はれる。トマトの眞赤なほつべたは人を引きつける。

野の風景

二年 淺野 力

學校から歸り途僕はいつもの田の中の道へ出た。兩側の田にはれんげ草が、もうせんを敷きつめた様に咲いて居り、麥がもう皆穂を出して、そよ／＼と春風にゆられて居る。

向うの田の中へ雲雀が啼きながら落ち込んだ。目を人の方へやつて見ると、夏蜜柑島の向うに鯉上りが五つ六つ春の天空にくつきりと、うかんで空氣を體一ぱいすつて空を泳いで居る。すゝと僕の側を燕が通り過ぎて行った。

目を新道に向けると自動車が一臺、砂煙を上げて走り去つた。向うの途に自轉車と犬が並んで行く。汽車が萩驛を出て玉江に行くのらしい、白い煙が向うの山の麓に上つた。

四三

運動場の朝

二年 三隅田稔介

雨あがりの運動場に出て見ると、急に心が大きくなるやうだ。太陽ははるばる東の空に雲につままれ、ほんのり輝く所にあるのだらう。燕が運動場のそばをかすめてひらりと白い腹を出して見せ、又地上を縫ふやうに飛ぶ。地上には櫻のさき残つた萼がまばらに落ちて居る。これを見て櫻の咲き亂れたのを聯想して居ると、急に頭上で「チュウ／＼」とつづけさまに雀が啼いた。遠くで「コケコーコー」と學校の雞が元氣な聲でさも得意さうに歌つた。一風ざーッと吹くと松葉について居たしづくが頭にぼた／＼と落ちた。それがなんとなく冷かつた。又燕がチ、と啼いて土地をかすめて僕のへりまで來たと思ふとばつと空中で返つて反對の方へすうと行つた。上級生がラッパをふきたした。唸唸たるラッパの音ははるか運動場を渡つて、この朝の空氣に波をふるはせながら四方にちつて行つた。

井戸端

二年 田村克介

「水を少し汲んでくれ。」とお母さんに言はれたので、井戸のふたをとつて見ると水が少し許りふえてゐる。雨が降つたせいだらう。古い井戸の竹のふたの上には、かたつむりとなめくじがはつてゐる。そのまはりには、蟹が泡をぶつ／＼と吐きながら、どこかへはつて行く。二三杯汲んでふたをしようとする、いつの間に来たのか大きなまがのそり／＼とはつて行く。突然そのまがが止つて何か見つめてゐる。よく見ると、そこを小さなみ／＼すがはつてゐる。と、がまは俄かに舌を出して、べろ／＼とそのみ／＼すを食べた。がまは朝飯を終へて又きよろりとして、しかもいう然とはつて行つた。又お母さんがよばれる、何か用があるのだらう。

夕月に乗る

二年 秋山 實

勇壯な軍艦マーチが海上にひびきわたつてゐる。今各

艦は秋港を出港するところだ。威風堂々と白波をけたてゝ進行する、その勇ましい軍艦の姿はとても筆では書きあらはせない。やがて煙幕を張る作業の時になつた。各艦の艦尾と煙突から白と黒との煙が開始めたと見るや忽ち濛々とあたりを包んで日の光も見えなくなつてしまつた。たゞ周囲は白黒の煙幕と青い波とでおほはれてしまつた。なんとも言へない壯觀である。

それからコーヒーやかたばんを御馳走になつた。水兵さんたちはとても優しく親切であるのでおのづから親しい氣持になる。それでもいざとなると強いのだからたのもしい。三時頃に油谷灣に入港したとき伊勢、日向の巨大な雄姿が見られた。すこしたつてから歸ることになつた。何んだか名残り惜しいやうな氣がした。水兵さん達を見ても大砲を見ても軍艦旗を見ても。舳舟に乗つてからも見えなくなるまで夕月を見てゐた。

「初めて競技の試合に出るのだ。」と思ふと練習が充分でないので心配でならない。「最後まで力一ぱい走つてやらう。」と覺悟して家を出發した。今日は非常に好天氣。

選手が明倫の萩中選手室に集つたのは、豫定の十二時半が過ぎてもう一時であつた。室は天井が低くて苦しいやうな氣もするが選手やマネジャーのはげましや笑聲で何時の間にか元氣が満ちる。足や肩にぬる藥の香が鼻をつく。

やがて勇ましい選手の姿が運動場を軽く走つたり、準備運動をしたりし始めた。萩商、萩中の應援團が一せいに拍手をなげかける。呼出の聲がかかる頃になると萩中の應援歌が聞えて來た。續いて萩商から。

観客も次第にふえる。應援もはげしくなる。

選手室では絶えず點の話が出てゐる。出場する選手に「がんばれ」の聲。

三時半、いよいよ僕は一萬米の決勝へ出る事になつた。「死ぬ迄やれ」と勵まされて波佐間君とスタートに行く。

青年團から三人、商業から四人、中學からは五年の中

對抗競技會

二年 河村 定一

模型製作

二年 貞本 尙

某日から新聞に出てゐる飛行用の模型飛行機の製作に
とりかゝつて仲々忙しい。第一に胴體の製作だ。それに
は先づ材料の選擇だ。軽いものが肝心です。そこで僕は
物置小屋に行つて、樺太松の額縁を持つてきて、鋸でそ
れを縦横に一定の太さに引いた。さうして支柱もニカワ
でひつつけて組立は終つた。緊張線も取付けた。第二は
降着装置である。竹ヒゴを六本造り先に車輪を取付けた。
此れで快走も出来るのです。次は尾翼、方向舵で、これ
も竹ヒゴでそれに紙を張つてすました。次はプロペラで
早速自轉車で走つて行つて飛行機道具屋で買つて來てつ
けた。まあ、これで一先づ飛行機らしくなつた。非常な
嬉しさで幾回ともなくプロペラを廻して見た。その時の
心持は飛行機製作所の技師にでもなつた様だ。それまで
の苦心は大へんなものだ。二回までも改製した所は胴體
の組立だつた。父も時々はきて、室の亂雑な様を見て「飛
行機製作で忙しいな。完成したらアメリカまで飛行し

村さん、三年の中川君、それに波佐間君と僕の四人。

明倫の裏門を抜けて八丁筋に出て更に右にまげて橋本
から御許町へ走つた。六本松のまはりではもういよ／＼
えらくなつた。之まで一緒だつた商業の岩崎君が僕を抜
いてぐん／＼速力を増して百米も前の中村さんに追ひつ
いてしまつた。いくら走つても目あての一本松はなかつ
た。此の頃やうやく商業の中原君が速度をゆるめたので
抜く事が出來た。

一本松で札をもらつて歸りに向つた頃はもう夢中で走
つた。中村さんが「がんばれよ」と走りながら行きちが
ひの所で僕に叫ばれた。「やる」と軽く答へて又力のある
かぎり走つた。

こんなにはえらかつた事は未だない。やつとつらいのを
おしこらへて運動場に走りついて六番目。

「やつとやる事が出來た。」と思ふとつらかつたのにお
しこらへた事がうれしくなつた。

ふと運動場の方をふりむくと一せいに拍手がおこつ
た。多分波佐間君が最後のスピードを出したのだらう。

よう。」といつもの苦みばしつた顔を愛想よく、まるで
佛様のやうだ。これでも未だだめだ。次は胴體に紙を張
り、次に主翼を造り初めた。飛行機製作で一番むづかし

いのは、この主翼だ。飛ぶか否かは主翼が左右するさう
だ。そこで僕は厚翼を作つた。それも組立は終へて紙を
張つた。主翼にはそりがなければならぬ。そのそりをつ
ける爲に非常に組立に困難を生じた。これを胴體の重心
を取つて取付けた。これで自作飛行機も完成した。そこ
へ父が又來て「試運轉だ。」と言はれた。試運轉もうま
く飛んだ。父も僕も手を打つて「これだ!!」と喜んだ。
又スピードアップを出して壁の上を走る事も出來た。あ
ゝ三日間の苦心も漸くかなひ、満足な飛行機も完成し
た。これではアメリカまでも飛び得さうだ。

呑氣な人

二年 見明 元夫

内の隣家のおぢさんは實に呑氣である。
僕が遊びに行つてゐるといつもぶかり／＼と煙草をす

ひながら將棋をさしたり、碁をうつたりしてゐる。

どう云ふ理由か知らぬが、いつも呑氣に仕事をしない
で暮らして居られる。

非常に性質のおとなしい面白い人である。一人の子供
があつてそれと遊んでゐる。又魚釣にでも活動にでも何
でも興味を持つ人で、それかと云つて暮しに困る様な家
ではない。

其のおぢさんに一つ悪い事には、二軒隣に射的屋があ
る。それに行つて負けるのを知りながら毎日々々やつて
ゐる。負けかゝつて青くなりふる／＼ふるへながらやつ
てゐるのを傍から見るとおかしくなる。

歸省の夜

二年 小原 和男

僕が夏休みに郷里に歸つた時は、午後六時頃であつた。
歸途に小學校時代の友人にあふと昔昔を忘れずにものを
いふ。僕もほんごになつかしく思つた。もう太陽はかた
むいてゐるので、長話は出來ないで家に歸つた。家の

者は一日早く歸つたので、家はきれいにしまつてあつた。家にあがると御飯のしたくがしてあつた。よその人がたぐさんいゝるな物を持つて來てゐた。さうしてゐる中日がくれた。僕は縁側に出てすはつた。庭はぼう／＼と草が生え、手のつけやうもないやうになつてゐる。山の方はしづかである。提灯の火が見えた。それは皆僕の家に来るのであつた。僕はそれ等の人がなつかしかつた。十一時頃には狐が啼いてゐるとてもさびしかつた。

朝の散歩

二年 山中健一

ふと夢から目覺めて床を出た。庭に出て見ると昨日までまだ咲いて居なかつた朝顔が赤青紫といろ／＼垣根一ぱいに美しくまじり合つて咲いてゐた。庭の片隅にはダリヤが朝露をかぶつてじつとりと咲いてゐた。それから僕は顔を洗ひ食事をすまして、妹と二人で菊ヶ濱の方へ散歩がてらに寫生に行つた。空は晴れて一點の雲もなく微風がそよ／＼僕のは、を撫でる爽やかな朝であつた。

窓の風景

二年 石村豊徳

二階の西側の窓の下は花園である。日光は輝いて籬の朝顔に軟い陰をつくつて居る。其の葉が時々そよ／＼と揺れる。又遠方の小鳥の鳴き聲や蟬の聲等の自然の音楽

蚊が多いのだらう。

中村のおちさんも話に來られて驚かれたぐらゐだ。蚊取線香に火がついて居るのに中々蚊は落ちないので、小舎から除蟲菊を持つて來て蚊遣火をたき始めた。プス／＼と音を立て、火がついて來た。團扇で少しづつあふぐと赤くなつて後から／＼白い煙がもく／＼と出て來る。室一面で窒息しさうだ。あつ!! ふる／＼蚊の雨だ。白いテーブルかけの上は幾百となくの蚊で丁度模様のやうだ。剛情なのはまだ壁にしがみついて落ちないがもう飛べさうにはない。もうちきに落ちるだらう。

思ひ出す事ども

二年 山井英次

僕の家からは海に二里位離れてゐるので海水浴に行くに大變都合が悪い。川は小さくてくさくていけない。誠に都合が悪い。今年是不景氣の世だから自轉車で行くにきめた。或日友達四五人と自轉車に乗つて午後より海に行く事にきめた。海に行くには大きな坂を越えねばなら

蚊遣火

二年 池田脩亮

が窓に流れこんで來る。蟬の聲は、夏の代表ともなる音楽であらう。空では淡い半月が其等の音楽を聞いて居るかの様である。その下で蜘蛛は精出して巣をかけて居る。どうして五六米もある間をかけたのだらうと思つた。とんぼが飛ぶ。時々は蝶が美しい種々の花を見物する爲に此の花園に舞つて來る。黒いのが、黄の斑点のあるのが、ぜんまいの様な管を持つてひら／＼と、さも愉快さうに舞ふ。日光が其等の羽に輝り反つて美しい。籬の蜘蛛の巢は風が吹く度毎に其の小さな線上に光る一本の針の様な位置が動いては、又元の位置に戻る。日影はだん／＼と縮つて來た。今迄西側の籬のみにさして居た日光は何時の間にか花園を一面に輝して居た。窓内より花園を見下すのも一種の趣がある。

やうやく夕食をすました。別荘もなか／＼蚊が多い。其の上別荘のまわりには水溜めが二ヶ所もあるので特別

面白かつた事

二年 淺原昌佑

ない。大變之で苦勞する。僕等も自轉車をどばしてもう此の坂に來た。始めは下りだから大變樂だ。四五人一緒になつて下りはじめた。中頃迄來ると急に曲らねばならない。一番目は僕で先頭であつたが無事に曲られた。二番目も三番目も、すると四番目が急に曲るとどうしたはづみか自轉車が急に倒れてそばの田の中へ眞逆に落ちてしまつた。さあ！大變だ。僕等は直ぐブレーキをかけ飛び下りて友達を救ひに行つた。するともう顔を泥まぶれにして田の中へ立つてゐるので「來い／＼」と云ふと泥まぶれのまゝ來る。その姿がとてもをかしいお化の様なので、皆助ける事も忘れて笑ひ出した。すると友達も氣付いたらしく目をばち／＼させて苦笑しながら來た。其の格好が一段とをかしい。笑ひ笑ひ手を取つて近所の家の井戸端で洗つてやつた。其の家の人も笑ひながら出て來て手傳つて呉れた。シャツを洗ひその乾くのを待つた爲一時間以上經つた。せつかくの海水浴に行くのもめちやくちやになつた。僕等は苦笑しながら家に向つて歸つた。

今思ひ出せば口惜しいやらをかしいやらである。

八月二日、兄さんが歸られて今までだらしない生活をして居た僕等は急に活氣づいたやうな氣がした。歸られてから僕は兄さんと毎日水泳に行つた。兄さんは水泳は二級ださうだ。僕は二分兄さんに型を教へて戴いた。長い間泳いで居ると僕はいつの間にか水の王者のやうな氣がした。しばらくして兄さんは陸へ上られたので僕も尋いで上つた。弟はまた淺い所ではちやく／＼やつて居る。又暑くなつて來たので僕は水中に入つた。あちらの方では西瓜取りをやつて居る。弟が泳ぐのがいやになつたと思えて、兄さんも歸らうと言ひ出したので僕等は仕方なく家に歸つた。あまり僕は腹を冷した爲であらうか、歸つてから腹がいたくなつて來た。丁度そこへ西瓜を切られたので食べようと思つたが腹がひどく痛み出すといけないので、よだれをこぼしながら食べるのをやめた。實に其の場面は悲喜劇であつた。

窓の風景

二年 杉原大泰

外を見ると蓮芋の葉が互にだらりと葉を垂らして朝の挨拶をかはして居る。そして眞珠の様な銀の玉が葉の上で風が吹く度にころ／＼と微かにゆれる。其の向うに夏蜜柑の木が繁つて飴玉ほどの實を葉の外に出して居る。幹をすかして見れば桶を荷つた人が通りがかりの人と立話をして居る。夏蜜柑の向うに高く神社の森が、ほこを保持した様に松をつき立て、天を戒しめるやうである。此の様であるから何處の人が來ても彼處は神様があると思ふであらう。其の森から、誰かしら毎朝おいのりを上げてる聲がかすかに神々しく耳に入つて來る。我々が毎日幸福に無事に生活して行けるのは神様のお蔭だと思ふと、あの松の木も自然に有難く神の家來の様に見える。

井戸端

二年 香川朝政

或る日曜日の朝、うす暗い中に僕は床を出てポンプの所へ顔を洗ひに行つた。汲みたての冷い水で顔を洗つて初秋の澄みきつた空氣を思ふ存分呼吸しながら、裏の島の方へ行かうと思つて、重い庭下駄をからころと引きづつて、車井戸の側を通りかゝつた。此の井戸はあまり深すぎて、その上大分古くからあるので、危いからと言つて上に蓋をして、誰も此の頃は使ひ手のない井戸であつた。それで井戸の側には緑色の苔が澤山生えてゐて、何時もじめ／＼してゐた。僕は何の氣、無く其の側を通りかけたが、ふと永い間のぞいて見なかつた井戸の底が見たくなつた。そこで蓋を持ち上げて井戸の中に首をつゝ込んで見た。上の方は少し明るかつたが、下の方は眞暗で其の底に圓い鏡の様に水がきら／＼と光つてゐた。「相變らず深いな」とつぶやいて、再び元のやうに蓋をして、ひよいと顔を上げた時に井戸の横側で、きり／＼と、かすかに鳴く聲がした。するとその反對の方で

又きり／＼と前の聲に應ずるやうに小さく鳴くのが聞えた。「はゝあ、こほろぎだな。」と思つて聲のした方に手をやると、びたりと聲が止つた。此の時僕はふと小さい時に、よく此の井戸端で小蟹をさがして、竹ぎれで井戸のまはりの穴をつゝいた事を思ひ出した。今頃でもやはり蟹があるだらうかと思つて、側の穴を木ぎれでつゝいて見た。すると一匹の小さなこほろぎがびよんと目の前に飛び出して、しばらく長いひげを動かして、あちらこちらをさぐつてゐたが、やがて横の方へびよ／＼と飛んで行つた。

故山の夏

三年 本石獨芳

夏が胡蝶の脊から蟬の脊に乗換へてやつて來た。朗に鳴く蟬の旋律に合せて、若人が胸の銀線を震はせて歌ふ夏だ夏だ。青葉の若人の夏だ。

十數日、休なしに照りつけた太陽は、今日もじり／＼石をも融しそうな光を投げつけてゐる。裏の土藏は強い光を

らは枯葉が一つ／＼落ちて來る。一つ散れば夏は去つた二つ散れば秋が來たと知らせる様に自分の心に感じられる。此の風に揺られて一つ落ち二つ散る葉を持つポプラの木から初秋は始まる。校庭では生徒達が秋の涼しい風に當りながら右往左往して居る。僕も其の一人かと思へば自分ながら初秋の淋しさが身に沁々と感じられる。嗚呼、秋が來た。

故山の夏

三年 田中達樹

緑したゝる様な松の木の根もとに坐して、夏のシンボルたる一大聲樂家蟬の焼けつく様な鳴聲を聞きつゝ海を眺める。閃爍たる白熱の太陽の下に於ける眞夏の海は、藍を融いた様に碧い。遙か向ふにくつきりと盛り上つた殆んど黒い様な緑色の鳥々の間を滿帆の涼風を孕んだ白帆が、入道雲をたゞへコバルト色に晴れた空と、紺碧の海との會ひ合ふ水平線の彼方へ進んで行く。まるで一枚の名畫の様な風景だ。一度目を轉すれば、其處には怒濤

受けてうなだれた芭蕉の姿の輪廓をくつきり映して、眞白に光つてゐる。耳に焼けつく様な蟬のジャズに合せて寒暖計の水銀が九十度の線で踊つてゐる。暑い／＼。汗が絶間なくにじみ出る。おまけにあの漕々と降る蟬時雨に耳はガン／＼鳴る。眞白に乾いた砂地を蚯蚓が全身砂まみれになつて、のたうちながら一線のラインを引いて行くのも暑苦しい。梧葉に危げに掴まつてゐた蟬の脱殻がカラ／＼と聲に落ちて來た、墓場の奥で夏の讃美者、ソプラノ歌姫、鯛がロマンチックな聲で鳴いてゐる。然し彼女の聲は震へてゐる。もうちき孟蘭盆だ。佛様が赤蜻蛉の背に乗つておいでだらう。

校庭の秋

三年 尾崎一壽

「もう初秋が來た。」人々の目にも心にも此の語が浮いて來る。我々は學生だけに一番先に校庭の初秋を思ひ出す。夏休が終つてもまだ夏の暑さが残つて居るかと思つたら、すぐ初秋の天地と變つた。運動場のポプラの木が

が豪壯そのものゝ様な巨巖に挑戦するかの如く、激しては碎け、碎けては激して、白き飛沫を上げてゐる。此の永劫に續く兩者の争鬪を灼熱の空の英雄は何時までも見下してゐた。

自己を語る

三年 能美忠廣

小學校時代には字書きを希望した。それは字が少々上手で父母も笑談まじりに字書きになれと言はれたからだ。然し父が死んで田舎の學校へ轉校し生活が一變した時希望も變つて先生にならうと思つた、がそれは早く成人して弟妹を一人前に仕上げるには教育家が好いと思つたからで、別に浮世の就職難を知り教育事業の尊さを知つてからの事ではない。唯幼い時の思想の動搖の爲である。中學に這入つてからも此の動搖は消えなかつた。先生にならう、劍道家として立たう、軍人になりたい、運動家になり度い等、希望がバノラマの様で頭の中で興亡した。二年生になると科學方面に希望が傾いて行つた。そし

て混亂の中に三年の一學期が過ぎた。今や先生と機械の葛藤である。まるで一寸先は暗闇である。

五四

旅行記の一節

三年 吉津孝甫

汽車は猛然と場内に這入つて来て其の運轉を停めた。「新義洲！」「新義洲!!」と叫ぶ聲に、乗客の大半は眞白な塊となつてドツ／＼と各昇降口からブラット・フォームに吐出され、口々に何だか喚き、ごた／＼入り亂れ乍ら東西へ散り／＼になる。瞬時、名状すべからざる雑沓である。乗客といつても大半は鮮人の白衣ばかり。聴て發車を告げる汽笛がけたましく鳴る。煤煙を吐く凄じい音、軋り出す車輪の響、列車は漸く滑るよう進行を開始した。車中より新義洲の町を望めば、白楊の間に、長い煙管でスバ／＼とやりながら往來する白衣、チラホラする灯が見える。

既にして鴨綠江に差掛れば、國境風景あはれ深き雄大な夕景色が展開される。碧潮満々たる大河、上流を望め

ば、水は長白山影碧深く落ちる邊から涼風と共に流れて来る。眼下の水面は、汪洋として藍碧の色を湛へて居る。河蒸汽船が、ボーツと悲しそうな淡白い煙を吐く邊、少し離れて没せんとする赤陽の爲黄金色に彩られた支那船が二ツ三ツ靜に動いてゐた。

青海島に遊ぶ

三年 佐久間 鑛太郎

心配してゐた天氣は氣持よくカラリと晴れて青空に浮雲がゆら／＼と動いてゐる。太陽は暖か過ぎる位で鏡の如く澄みきつた海に美しく反射する中を、我々の乗つてゐる長周丸は、勇しく波をざあ／＼と掻き分けながら進んで行つた。

彼方の島々はぼんやり霞がかゝつて畫のように見える青海島は緑の若葉を柔く廣げて居る。小石の多い汀で誰か手振つてゐる。鷗が眞白な羽を聞いて鳴きながら通つた。何を見、何を聞いても、楽しい遠足日だ。皆の顔も晴れ／＼とこやかで、いつもはこわい先生の顔も

何となく楽しそうだ。船の上甲板から誰か「オーイ」と呼んだ。見上げると皆がどつと笑ひ出す。所々では辨當を食べてゐる。ピウーと凄じい音をたて、他の船が横を通り過ぎた。向ふの船の窓から、ぬつと笑ひ顔が覗く。すべてが歡喜を喚び起させる楽しい風景だ。カラ／＼と鈴を鳴らしながら船は依然として進んで行つた。

自己を語る

三年 田邊實彦

自己を語る事は、延いては自己反省とも成る。自己を反省する事の無い者は、向上發達を望み得ない。自己の本領を没却する結果、其物の奴隷と成らざるを得ない。今日の目ま苦しい文明の世に於ては、我々は絶えず新しき境遇に順應し、調和せねばならぬ。調和は自己の本領の上に立脚する。故に奴隷たる事は調和の破壊である。調和の反面には反抗力を要し、此の反抗力によつて自己の本領を發揮する所の同化作用を認め得るのである。然

るに此の反抗力に乏しくして、自己の本領を發揮し得ざる者は、最後のゴールに達し得ずして社會の落伍者と成るであらう。翻つて私自身に及び、餘りの缺點多きに慄然とした。長所は數ふるに少ないけれど、自己の美點として何處までも生かし、短所は修練により美化すべく努力し、自己を生かし自己を造つて、社會の荒波を乗り切る自信を得たいと思つてゐる。

故山の夏

三年 鹽山寛美

機械の響と煤煙より外特筆すべき何物も無い様な我が故山の夏、それは餘りに無趣味だ。自然それ自身が吾等の安息所の様な秋の土地を見つけ居る自分には、故山の夏が餘りにも冷淡すぎるのに驚く。吾が安息所は懐しき吾が家だけなのか。

晝の雑音も流石に夜になると靜まる。たゞあちこちの工場の騒音、キラ／＼光る電燈、それ等が物凄く夜の空に反映して居るだけである。眼を射る光を見つめながら

リズムミカルな金属性の音を聞く時、云ひ知れぬ興奮を感じる。其れはすべての實在の世界を超越した力強い絶對の神聖なる力の様な気がする。それは「生」への汗と力ではないだらうか。社會の人はかくまで眞劍だ。人生も又眞劍なのではあるまいか。無趣味な故山の夏に生きた良き教訓を見出した私の唇邊には満足の微笑が浮んだ。

青海島遊記

三年 津野 一二

船は快いエンジンの響を立て、日本海のうねりを越え一路青海島へ、青清島へ。先生達の白鳥の様なモーターボートが飛沫を浴びて疾走する。僕は一本のラムネを貰つて上機嫌だ。船が島の端を廻ると忽ち渺茫千里の日本海の荒海だ。怒濤に削られた茶色の山膚を露はに出してゐる。ほつかりと大口を開けてゐる洞窟、波に間斷なく洗はれる暗礁、紺碧に澄んだ海、劍を立てた様な岩、等々……。あつ、鷗が二羽物慕はしげに飛んでゐる。突如岩陰から白色のモーターボートが現れた。瞬間にして

消えた。曇つてゐた空も名残なく霽れたが沖の島々は、ほかし繪の様に霞んでゐる。誰か海へ靴を落した。船尾でわあつと歡聲が擧つた。青海島は洞窟の多い事、正に穴見島だ。残念なことには船が大きいので近寄れなかつた。モーターボートが景氣よく穴に這入るのを見ると羨望に絶えない。僕は青海島を見て岩の塊だと思つた。發動機がすれ違つた。皆で手を振つた。船が大分速力を緩めた。多分大日比に着くのだらう。

秋

三年 藤本 盛人

秋！ 何といふ懐しい語であらう。そして又何といふ淋しい響を持つ言葉であらう。花の下に踊る春も、水に親しむ夏も去り、やがて天下を紅葉の中に包む秋、そして月に趣を添へる秋は、今そろ／＼と近づきつゝある。薄紫色に暮れかゝつた空、もう月は松の樹の上に現はれて居る。暮れるにつれて、空には群星が寶石をぶちまけた様に輝き、月は益々利鎌の様に沓え渡る。無心の川も

山口の友に

三年 辻田 稔次

拜啓茶色がかつた葉の間から眞赤な柿がにっこりと顔を出して秋だと告げます。君も鴻城の地に於て毎日テニスで君の怪腕を奮つてゐられる事だらう。僕も別天地のよ様な刺戟の無い萩で毎日勉強に追はれながら、獨り君から戴いた詩集の文字に感激の思ひを寄せてゐます。

嗚呼、先月末、君は東に僕は西に惜しき袂を分ちました。郷里に居れば團子位は供へるのにと思ひながら寄宿舎の窓に凭れて同じ此の月を見てゐる君を思ひ出しました。

先年まで一緒に参つた鎮守の例祭も近づきました。君の得意な運動會ももう手の届きそうな所にあります。元氣に勉強し給へ。いやに感傷的になつて失敬。
さようなら。

青海島遊記

三年 柳井 正一

青葉を揺がして吹く風爽な五月の朝。ポー、焼けつく

小さなせゝらぎの音を響かしながら銀波を立たせ、遠く近く七草の間で鳴く多くの秋の蟲の音も何となく淋しく無限のあはれを思はせる。ふと立ち止つて空を仰ぐと北極星も淋しく瞬いて居る。

風鈴

三年 中野 博造

雀が二三羽飛んで行つたら軒の風鈴が、チリン、シャランと鳴つた。庭の八手の葉が暑い夏の光線の中に、カラカラの土へ黒い影を投げつけてゐる。「ブーン」蠅が遠くを鳴いて行く。

風が竊竊をさら／＼と動かす。今度は八手が大きな手で招くと軒の風鈴がチリン／＼、短冊がびら／＼と目にもちらつく。オ、風鈴よ、静かな中に美を、やさしさを含む風鈴よ!! あの一日中鳴き続ける蟬と較べてみたい。

机のインキ迄が涼しそうだ。
天井に池の波が、ゆら／＼と動いてゐる。
夏の午後!! 風鈴の午後!!

日記の一節

三年 辻田稔次

様な初夏の瑠璃色をした大海の荒波を蹴つて、長周丸は出發した。ウエルカム!! ウエルカム!! と青い空、遠くく果ては空と合してゐる日本海が我等一行を盛に歓迎してゐる様だ。まるで凱歌をあげてゐる様だ。

待憧れてゐた旅行だ。その旅行が今長周丸の疾走によつて實現されつゝあるのだ。波に浮ぶ青海島のボイジ、夢の様な海上旅行、それが如何に我等を有頂天にしたことだらうか。

仙崎を後に、今我等の船、長周丸は青海島探検の途に着くべく海上を疾走しつゝある。そして先生方のモーターボートも盛に煙を吐いてゐる。小型ながらもなかく迅速だ。我等の長周丸に匹敵する位、否それ以上の快速力だ。小さくて速いモーターボートは神秘を包む洞穴の中や奇岩の間を勇しく縫つて行く。實に羨しい。

おゝ愉快だ。遠く遠く向ふの島を眺むれば、我等の血は躍り、肉は浮きたつ。舷側に凭れてコバルト色の海と空とを望む時、我等の口からは楽しきメロジが流れる。あゝ愉快だ。今我等の長周丸は大日比指して疾駆しつゝあるのだ。

旅行記の一節

— テント旅行にて海岸を行く —

三年 山本正次

炎熱焼くが如き夏の日、灰色に染められた夕雲が黒みを帯びた青い地平線と接した所に、白い小蒸汽の姿が見える。

やがて其の左手に寄つた蘆の陰に久賀の町が少しづつ見えて來た。近づくに従つて松の疏に生え続いた丘陵を脊にして地面に押し伏せられたやうな雜然たる家々の屋根がだんくはつきりして來る。殊にその中でも白壁が際だつて薄紅く輝いて、黄昏は夢見るやうにほのかに町の上に淀んでゐる。思ひがけぬ蘆の間から笠を被つて白い手甲を箝めた女達が小舟を巧に操つて、ついづつ漕ぎ出して來る。そして鄙びた調子で互に言葉を掛け合つて油を流したやうな静な水の上を小松の方へと消えて行つた。白い月が出てテントの上に清い冷しい光を投げかける。テントの中で故郷の事を談つて居た友は何時の間にか夢路についた。多分彼の夢は故山の家のあたりを繞

「飛び込むぞ!」、B君は鮮やかに飛び込む。眞夏の強烈な日光は濡れたB君の水泳服に反射してピカリとガラスの様に輝く。空中を見事なフォーム。ザブン!! 海面はラムネの栓を抜いた瞬間のやうな泡。僕はこの痛快な光景にすっかり魅せられてしまつた。たまらなくなつて早速着物を脱いでボートから飛び降りた。四十度の日光に熱せられた身體—足、腹、手、肩—を海水は心ゆくばかり癒して呉れる。

見渡すかぎり若人ばかりだ。眞夏の海水浴場は若人の獨占場だ。どちらを見てもエネルギーの塊みたいな若人ばかりだ。僕は赤、青、緑、黒等の水泳服が白銀を躍らしてゐる海面を縫ふやうにして泳ぎながら飛込臺の下に行つた。今日は今日最初の海水浴の日でもあり、夏休中忘れる事の出来ぬ愉快な日であつた。

つて居る事であらう。

憂患に生きて安樂に死ぬ

四年 小倉吉高

人間が此の世に生を稟けるに方つては、必ず艱難辛苦に堪へて努力せなければならぬと言ふ運命を天より與へられてゐる。人は樂を得ることはなかく困難である。人間は生きる爲に先づ働かなければならぬ。人生にはあらゆる困難がある。貧富貴賤の別なくそれ相當の苦しみがある。苦は樂の種と言ふ諺の如く、人は苦を経て初めて樂を得る事が出来る。人は何等かの刺激を受けてこそ生き甲斐ある生活をなすことが出来る。

孟子曰く「憂患に生きて安樂に死す」と。憂患あつてこそ勇氣が出て生きることが出来る、安樂になれば勇氣は消磨して後は死あるばかりだ。人生に於ける困難も無意味なものではない。天の人間を長く生かさんとする慈悲の現はれであるかも知れない。人は苦の有ることを感謝して決して安樂を期待してはならない。人は困難に際し

て勇氣を出し、そうして是の世の中を有意義に過すことを以て、無上の楽しみとすることを期せねばならぬ。

犠牲的精神

四年 柳井 清

「肉弾三勇士とは誰々かね」と尋常二年に成つたばかりの従弟に尋ねた。直ぐに顔を口にして「作江、北川、江下等……」と歌調子で言つた。従弟は未だ常識も學識も浅い者だ、否、如何な田舎の田吾作も、通信機關の網内に在る者は、皆、三勇士と言へば直ちに「うゝん、あの勇ましい兵隊さんか」と、その寫眞畫を連想し、無限の尊敬を現し、自己の心に御奉公の念を新に固く決する事であらう。何が我々の心を捕へるのであらうか。

犠牲的精神それである。身を粉にしても他人の爲にすると云ふ、その神の心こそ、我等が慕ふ美しき精神である。この精神は我が國の誇である。大和魂である。

我等が人物傳を繙く時、多くの犠牲的人物を見る。武士道に副つた偉大なる誇である。現今の事變に於ける、

忠勇義烈なる皇軍の動作は、この精神の發露で無い物は無い。あの鐵兜の下に、軍服の裏に、犠牲的精神が溢れてゐるからだ。陸の大平洋滿蒙も、日本の犠牲的精神に依り、安々と生長して行くては無いか。
如何なる文明武器も、犠牲的精神の凝固した人の爆彈に對抗する事は不可能では無いか。犠牲的精神に圍まれながらすく／＼と生長する我等の體内には、美はしい血が流れて居る。傳統せるその血は、今、時の來るのをちつと待つて來る。

僕の銷夏法

四年 菊屋嘉十郎

夏休は無論休息の時だ。併し休息ばかりではない、勉強もしなければならぬ時だ。僕は夏の暑さを凌ぐには早起、早寝に勝るものはないと思ふ。朝五時頃起きて日の出を拜むのは實にいゝ氣持だ。山と山との際より眞紅な太陽がだん／＼登つて來て、薄闇の下界を照らす中で、ラヂオ體操をするのだ。自分で掛ける號令が朝の爽やか

犠牲的精神

四年 大島康正

吾人は兎角犠牲といふことを嫌ふ。何か自分の損になるやうな氣がするものである。

な空氣を震はす。かうして僕の夏の日の緒は切られるのである。僕は勉強する時には、きちんと一生懸命に勉強し、終れば又一生懸命運動するのが一番賢い銷夏法であると思ふ。それで僕は、朝體操を終へると直ぐ勉強に取り掛る。それも餘り永くはせぬ。短時間中全精神を傾注して爲る。さうすれば自然に能率が擧る。だん／＼勉強してゐる中に蟬がチャ／＼鳴き出すと、新聞を讀むのに取り掛る。晝食が済むと、彌々僕達の最も好む水泳である。弟と一緒に走る様にして菊ヶ濱に行く。そして心行くばかり泳ぎ廻る。帰宅後、潮身體のまゝで草取りか水撒きをする。炎熱の下で汗まみれになつて、こんな労働をする事は、實に好い銷夏法である。汗まみれの身體を水で流し、浴衣を着て午後の勉強に取り掛る。一時間半位、故意に西向の夕日のかん／＼照り着ける室に入つてするのだ。その暑さに負けず一生懸命勉強すれば、必ず頭に入ると思ふ。日陰の涼しい室で勉強したのでは頭に入らぬ。又夜は夜で蚊と暑さの中で暫く勉強する。斯くして、わざと夏の暑熱に對抗して暮すのである。

併しながら「我身を犠牲にして人の爲に盡す」といふ此の心こそ、我等が心中に奥深く藏されてゐる筈の最も清く美しいものである。人類愛の最高理想は、結局犠牲的精神にあるのではないか。一旦官公職に就いた時我等に最も必要とするものは獻身的努力である。政治家にしろ、實業家にしろ、若し彼等が單に私腹を肥やすといふ點に留つてゐるとしたなら、社會の安寧秩序は到底保たるべきではない。我等が武勇のシムボルたる兵隊は、あの零下幾十度の滿州に、又無秩序極まる上海に、眞に我等國民の爲に貴き犠牲となつて戦つた。嗚呼！ 同文の誼の爲に、東亞久遠の平和のために、又八千萬同胞の生死の爲に斃れた彼等。犠牲。犠牲。總てが此の二字有つて始めて爲し得らるのである。

殊に我等は廟行鎮の鬼と化したあの肉弾三勇士に於て

最もこの精神を見る。

「三勇士爆薬筒を抱いて鐵條網に死す」の報一度傳はるや、日本國中津々浦々迄、双手を舉げてこの壯烈なる行爲を絶讃した。三勇士は死すともその名は誦はれ、その靈は祀られ、同情の餼金は忽ちにして數萬額に達した。これ何に依つて然るか。皆犠牲的精神の發露が此くさせたのである。

嗚呼！偉大なるかな。犠牲的精神。

競技所感

四年 中原芳美

新緑の初夏の一日。

太陽は午後のグラウンドをだるく照らして居た。眞夏の様な日だ。コンジションは悪い。

然し見よ。あの筋肉の隆々たる體軀の持主よ。

土地をかむスパイクの跡の力強さよ。メガホンは飛ぶ。應援團は亂舞する。本當にあの太陽の下さながらのグラウンドで走る様は如何にも原始人の様だ。否。スポーツ

マンこそ體育を理解したる現代の英雄だ。

選手の一日は涙に明けて汗に暮れて行く。本當に汗と涙だ。眞夏の一日運動場には誰も居ない。

人々は菊ヶ濱に、指月山に、彼等の涼を取る頃だ。只其處には選手達が黒く日に焼けた顔を張りて練習に餘念が無い。蟬がだるそうに鳴いて居る。

其の様な苦しい練習を終つて、競技大會に臨む。其して、最後に彼等の頭上に輝くものは果して月桂冠だらうか。又しても終に榮ある優勝旗は………。嗚呼選手の心誰が知る。知る人ぞ知る選手の心。然し彼等は反省する共して此の反省が、やがて彼等が近き將來に於て、月桂冠を得る第一の要素となるのである。

夕立

四年 瀧 仁

眞夏の空は薄紺色に澄みきつて、山の端に、唯々淡い雲の塊が二つ三つ懸つて居る。強い日の光に照り附けられて恰も釜中にあるやうだ。暑いこと／＼息が詰りさう

雲仙登山

四年 田坂 茂

我々修學旅行團は、自動車の雲仙温泉に着くと、すぐ絹笠旅館に旅装を解いて、雲仙嶽中でも高峰である普賢岳へと目ざした。山頂迄には二里以上あると云ふことだ。

普賢岳に登るには、途中で此も相當高い山を越して行くのだ。この相當高い山の麓に、東洋第一のゴルフ場がある。山麓とて多少傾斜したゴルフ場には、一面に青々とした芝生が敷かれてあつた。

このゴルフ場を過ぎる邊から、漸次山は急な傾斜を見せ、足が棒のやうになつてとても歩けそうではない。そして顔前に雄大に聳え立つてゐる山を越えて、又登るのだと云はれると／＼ざりしてしまふ。

山道は石や土で段のやうにして作られ、道の兩側には躑躅が山腹一面に生え茂つて、春になればこれ等が皆色とりどりの花を開くことだから、その美しさは目覺るばかりだらうと想像しながら、一歩々々の足に力を入れ、踏みしめ踏みしめ山路を辿る。

だ。人々は皆日蔭に隠れて居る。

ふと何處から來たともなく、何時湧いたともなく、澄みきつた空の彼方に白いふわりとした一塊の雲が現れた。その雲が見る／＼擴つて、色は次第に黒味を帯びて來る。夕立だ。近所の人々が忙しそうに右往左往して居る。灰色の雲は見る間にはや頭上にまで延びて來た。

冷や冷やとした風がさつと吹いて來る。大粒の雨がほつり／＼と白く乾いた地上に飴色の紋を打つ。風は次第に強くザーとあたりの木々を震はす。見る／＼雲は満天に漲つて、ザー／＼と降る雨に地上は水煙をあげる。

電光閃々、雷鳴殷々、風吹き荒び、雨降り頻る、天地晦冥恰も修羅の巻と化した。忽にして雨止み、風なき唯々遠雷微に聞えて其名残を留むるのみとなつた。木々はその葉の雫に日光を受けて銀色に輝いて居る。

や、西に傾いた太陽が、雲の切目からぞ知らぬ顔をしてけろりと姿を現した。ぬれた土地からは蒸氣が立ち昇る、地上のありとあらゆる物は一時に甦つた。

もうその頃は皆離れぬ／＼になつて、余は數人の者と幾廻りせる九折を廻る。午後三時の太陽は容赦もなく背後から照らしつけて汗だく／＼だ。休むにも木蔭はさつぱりない。山頂の方からもう歸るのであらう。三々伍々皆洋装の軽い身なりをした男女が山を降つて行く。小學生らしい小さい少年や少女達の多いのが目を引く。可愛らしく度々踊つてチリン／＼と音を出す。皆愉快そうだが、足どりも軽く下つて行く。

我々はそれとは丁度正反對だ。幾ら拭いても拭いても汗は止めどなく流れ出て来る。

そうした時余は頭の中に齋藤拙堂の下岐蘇川記の一節を思ひ浮べた、曰く「天下至奇至美者、每在於艱難危險之地。不獨山水之勝也。求之者、比於入虎穴探龍領。危而後有所獲矣。」と。普賢岳からのながめは非常によいと云ふことを聞いた。その美しい景色は、流汗辛苦して後始めて得られるのではあるまいか。あゝして教室内で教はつた事が事實となつて表はれたのだ。今の辛苦、今の艱難が多いければ多いだけ、ひどければひどいだけ、

ない。

「もう頂上迄これ位ありますか」

我々は思ひ切つて下山者を捉へて聞いた。

「約十町です」

もう後十町か、よし頑張らう。

我々は亦元氣を出して登り出した。けれど氣ばかりあせつても足が思ふ様に云ふことを聞かなかつた。

頂上近くの茶店で、高い水に咽喉を潤して亦我々は登り初めた。その四邊は全く仙境としか考へられない處だつた。

黙々として道を廻る内に、急に足下が明るくなつて来たのを感じてはつと思つて頭を上げた。そこには青色の空が開けて、一段と高い處に十數人の友人があるのが見えた。

あゝ！ たう／＼来たのだ。嬉しさが一杯に胸に込み上げて来た。我々は飛ぶやうにして上つた。

なんと云ふ絶景だ。

その絶景は形容する語を探すのに困る位だ。折悪くも雲の爲に阿蘇霧島を見ることは出来なかつたが、鳥原の

それ程山頂に達した時の愉快と云ふものは大きいのだ、苦は樂の種なのだ。そうだ。余は我と我が心の中で諾いた。

悟つた様な氣持になつた余は、それからの道は別に辛いとも苦しいとも思はなかつた。唯早く善い景色を見ようと思ふ考へに引かれて、づん／＼登つた。

やがてその山の頂上に達した。これからしばらくの間下り道となつていよ／＼目ざす普賢岳へ取りつくのだ。

これからの道の兩側は密樹鬱々として生茂り、地は名もなき雜草で覆れ、木も岩も皆蘇がついて森々として静まりかへり、晝猶うす暗く、さながら深海の底もかくやあらんと想像させる。嵐氣は冷く身を包み人をして仙境にあるかの感を抱かせる。

珍らしい木が多くあるらしく、所々の木の枝には説明書のした札が下げてある。

そうして四邊の光景に氣を奪れて進む内に、道は亦上りとなる。日光の直射を受けないだけが助りだつたが、足は愈疲れしびれて自分の足とは思はれない程だ。

咽喉も渴き切つて水流を探し求めても一滴の天然水も

町を眞下に見下し、有明海、天草諸島、對岸の熊本地方を指顧の中に收め、雲を下に見、天に沖して立ち造化と冥想するの感に打たれた。

此の雄壯無比なる大展望美は、辛い苦しい目を見て、海拔四千四百尺の普賢岳の絶頂を極めた者にものみ、天が與へる景色ではあるまいか。

高杉晋作

四年 玉木和彦

天下鼎の沸くが如く、尊王攘夷の聲轟々として漲れる幕末に當りて、能く天稟の奇才を縦横に發揮し、神出鬼没、難を排し、紛を解き、以て能く王政復古の大勳業に貢献せるものは、實に高杉晋作なり。

高杉晋作名は春風、字は暢夫、東行と號す。萩市菊屋横町に生る。彼は少時より、英邁にして、頭腦明晰、智勇が如く、氣象虹を吐き、威風衆を壓す。夙に彼の松陰門下に於て、久坂と共に雙璧と稱せらるゝに至れり。而して終始、彼が精神に一貫せしは、實に長州の傳統的

精神たる勤王愛國の精神たりしなり。されば朝には、静窓に靖獻遺言を誦し、夕には明月に正氣歌を唱ふ。講書演武の暇あれば、櫻花の春風に翻り、紅葉の夕陽に映する處、彼が逍遙吟詠するもの、彼が憂國の熱情の發露ならざるはなし。

見よ！ 長州魂の權化たる彼が行迹を。或は上海に航して知見を廣め、或は奇兵隊を組織して馬關攘夷の爲に盡し、或は俗論黨を討ちて藩論を一定し、長州征伐の際又よく防ぎて、幕軍に勝ちたるが如く、天真爛漫にして悉くこれ活動的なり。單身孤馬に鞭つて彈丸雨注の間に在るかと思れば、忽ち花に歌ひ、月に吟す。髪を剃り僧衣を着して、潜行するかと思へば、俄に盛服し、秋水を挾みて國士と對論す。光風霽月、洒々落落の間、常に寸時も邦家を忘れず、病を忍び、四方に周旋して自ら社會の興奮劑となり、青年鍛鍊の大鐵槌たりしは最も吾人の感嘆する所なり。

されど忠誠身を以て君國に捧げしこの俊傑も、遂に病魔は如何ともする事能はず、兵馬の間、梅風沐雨の過勞遂に重患を醸せり。之れ彼が、祖國の危急を憂ふる事熱

烈にして、病のその身に至らんとするを知らざりしなり。人力を盡し、神佛に祈願して、専ら彼が回春を期待せしに、天道之に年を貸さず、遂に櫻山の花と散れり。夕陽没して乾坤暗く、山嶽崩れて谷澤震ふ。天下の人士一人として哀悼の涙を注がざる者なかりき。

噫！ 幕末の風雲兒高杉晋作！ 齡僅に二十九を以て安らげく靜けく永き眠に入りぬ。千古の豪懷を秘して幽冥界に隠れたり。然れども彼が精神は死せずして、今猶はこの新天地に逍遙するならん。彼は明治維新の成就を見ずして、事半ばに死せしと雖も、その基礎は、彼が活躍に負ふ所實に多大なり。彼が一代の勲業と、その眞價とは、後世にその光輝を放つべきを信ず。彼は幕末の青史に煌々たる不滅の靈火を點せしものといふべし。

スポーツに就て

四年 辻野三郎

スポーツといふその聲は全世界を風靡してゐる。世はまさにスポーツ全盛時代である。陸上競技、野球、蹴球

庭球、水泳、拳闘等各種の競技會が催され、全國到る處各地方で争覇の火花を散らしてゐる。各新聞社はスポーツ欄を設けスポーツ記者の鋭き批評を加へて其の結果を報道してゐる。處々のラヂオ屋の前には聴衆が黒山を築き、熱心に耳を傾けてゐる。斯の如き時代の潮流に身を乗せ、そのスポーツの尖端を行くスポーツマンを人々は如何に見る。一競技大會に活躍する選手を觀て如何に思ふ。世の幸運兒、勝利者と思ふか。一方より觀ればさうかも知れない。然しその人は眞のスポーツの理解者ではない。スポーツの興行化、選手の職業化、品行問題、争奪戦等の醜聞を耳にするが故に人々はさう思ふのである。然し斯くスポーツを興業化せしめ、亦選手争奪戦を演ぜしめるのも、社會全般の罪あることは免れ難い。スポーツマンは現代の英雄であると誰か言つた。此の英雄なる言葉にも色々の考察があり、意味が含まれてゐることは誰もがそれを認めることである。蓋しその英雄なる言葉はスポーツ精神の養はれたアスリートに對してだけの呼び聲でなければならぬ。母校の爲に郷土の爲に、國家の爲に、血と涙との不斷の努力を續けてゐる人への賞歎

の言葉であり、且つ尊敬の意味でありたい。徒らに社會がアスリートをしてヒーロツク的ならしめるのは一考を要することである。

自分は聞いた。一野球選手が死球に當つて右眼を失した事を、一拳闘選手が肋骨を打ち突かれて再び立つ能はざるに至りし事を、タツクルの瞬間キックされて即死せし蹴球選手の事を、過激な練習の爲に遂に肺を侵されし一ランニング選手の事等を。

斯く聞く時選手を必ずしも華やかな生活の所有者とは思はれまい。暑き日も、寒き日も、雨の日も、雪の日も一路目的に刻苦努力し、忍耐、剛毅、謙遜、犠牲、所謂高潔なスポーツマンシップを養成しつゝある選手の日常の一半面を考察する時は尙更のことである。

人々よ。今少し眞のスポーツを理解し、眞のアスリートに對しては、之をヒーロツクにし、亦賞揚を惜しまないと共に、非アスリートは斷乎として非難し、排斥すべきである。

光と闇

五年 木本 静广

光の射す處は明るく、さうで無い處は暗い。故に光と闇とは即ち明闇を意味するものと思はれる。光と闇とは同價值なものである。何故ならば光より出た闇であり、闇より出た光であるから、光無くして闇無く闇無くして光は存在しない。夏目漱石氏もその著、草枕に明暗は表裏の如く月のある處には必ず影がさすと悟つた云々と云ふ様な事を書いて居られるが、この事を云はれたのであらう。この故に明闇は一つに歸納されるべきものと感ぜられ、又一つから出た二つだとも考へられる。人間の心に於ても明も闇も二つながら一つの心の中に存在し、その二つより成立した我が心であると考へられる。

光は公明正大、潑刺たる元氣及び向上を表示し、闇は邪惡、靜止、及び退歩を表示するかの如く僕の心に印象付けられて居る。光を思ふ時あの莊重極まり無い太陽を代表に想像する。闇を思ふ時邪惡なる處があつて、光のある處に出で得ない多くの惡魔が、機を得たりと跳梁す

るだらうところの、何となく無氣味な眞の闇を想像する。自然現象に於ける明闇は誰でも分別出来る様に、眞理に關する明闇も容易に分別が出来るか云ふに、必ずしもさうではない。眞理に於ける明闇は、その見る人が自己の心に正確なる心眼をたない以上、その分別は間違つて居り、又は不可能である。誰でも太陽を心に畫いて、正善なる道を踏み、強く明るく生き、向上發展せんと希はない者はあるまい。それには大いに正確鋭利なる心の觀察力、辨識力を以て正しく明を見、闇を闇と見得る様になる事が必要である。

人生を明るく生活するも、暗く生活するも、自分の心の明闇何れかを選び、それを育くむ事により、岐路はそこにある事を考へる時に、僕は毎朝いさぎよく登天する太陽の如く、強く、明るく、男らしく生きる事に努力したい。

人生と趣味

五年 矢次 三重

人間として此の世の中に生存する以上職業を有しない

者は無い。其の職業に於ても種々様々あつて一概に言ひ盡せないが、人は誰しも一定の時間働けば其の疲勞を恢復する爲又次の仕事に取りかゝる爲に休養を必要とするのである。それ故一定の休養時間を設けて、適當な趣味を養成しておく必要がある。それに依つて疲勞が除かれ意氣元氣も恢復されて、新鮮な氣分で、又満足と喜悅とを以て職務に取りかゝれば能率は大いに向上し増進するのである。人生に於て品性を向上し立派な人格を作り上げるには、どうしても趣味を養はねばならぬ。趣味は自分の利害得失を忘れ、物質以外の生活の方向に心を向けしめる。従つて己が品性は高雅になり、此の煩雜な社會の事柄も吾々から離れて、神仙の境に遊びて悠々自適の状態になるものである。それ故荒涼の境に在るも亦以て樂しむことが出来る。彼の昔の詩人は自然に親みて非人情の世界に逍遙することに依つて、己が生を完からしめたのである。

人の趣味る人の面の形が異なり、聲の色の異なるが如く千差であり、萬別である。自を以て他を律することは出来なし。然しながら一般人に取りて適當なる趣味は何

であるかを考へて見るに、先づ精神的なものには讀書、詩歌等あり、肉體的なものには遠足、旅行、釣魚、その他花木の栽培等がある。趣味の無下に低く賤しきは品性を卑劣にし、身體を壞す原因ともなる。例へば飲酒喫煙や、贅澤な生活に趣味を持つ者はそれである。是れに依りて之れを見れば、吾等は人格を高尙にする上に、又身體を健康にする上に、己が好む高尙な趣味に親しむことは處世上缺ぐべからざるものと思ふ。

ちからのあこがれ

五年 佐伯 一男

ベルトのはためき、齒車のうなり、此處工場の地下室では、暗い電燈の下に大機械が今盛に活動を續けてゐる。いかめしく組立てられた機械の底に職工がまるでうごめいてゐる様に働らいてゐる。組織された一つ一つの部分は、周囲の同じ唸りの中で全く別々の運動をやつてゐる。

噛み合ふ齒車は油を逆らせ、小輪は眩しい回轉を續け圓盤は緩い速度で時々その磨かれた面から青白い反射を

射つける。行き先も知れない多くのパイプが天井を這つて、タンクの緑の油が振動に踊る。直線—彎線—孤線が雑音の中に入れ亂れて躍動してゐる。總てが整頓された週期的な活動だ。美しい綜合藝術だ。

是等の部分を爲す一つ一つの美的な小運動が、それ自身には微力であるが總て社會の原動力となるのだ。それは華やかではないけれども貴い美なのだ。

私はこの機械を見ると偽瞞の社會に存在するたつた一つの純真な動きを見出す、そして敬慕の念を制し得ない。私は機械を見てゐると、生きた友に逢つてゐる氣分に容易になれる。生物でなかつたら生命を持たないだらうか。私は人形に屢々この生命を見附ける。そして親しむ。却つて之等の生命の方に平和があるのだ。

この機械こそ何の虚偽も争鬭も氾濫もない平和な生命なのだ。唯與へられた務を與へられただけの力で何等の躊躇もなく率直に行ふ。そしてその中に人間を超越した遠永性と藝術美をもつてゐる。人間の力を超越した物體から人間は、異様な一種の醒覺の發射作用を受け、力の憧れを感じるのである。

私はこんな所から、人間は人間の力が弱いものである間、弱いものと感ずる以上、誰もが感ずる様に機械に或種の力の憧れを感じるのだつた。

七〇

自力更生

五年 横山 雅輔

不景氣風の猛威を逞しうする現代日本に於いて、總理大臣先づ第一に街頭に自力更生を絶叫する所以のものは、そも何が故であるか。歐洲大戰と共に好景氣風塵し、奢侈に耽つた我が國民は、間もなく襲來した不景氣に目を覺まされた時には、もう遅い、安逸を貪る習慣に染んでしまつた。徒に政府當局に頼り、その援助を拱手して待つに至つた。政府も所有救濟策を試みた、然し總ては失敗ではないかと思はれる。抑々窮する所以が自己にある以上、自己が自己を更生させて自力奮闘して、この不況を打開せねばならぬのは當然である。諺も古いが「天は自ら助くるものを助く」と言つてゐる。實にこの不朽の名言は現代吾人の第一に念頭に置かねばならぬ箴言で

理論と實際

五年 蓮池平四郎

ある。總てが運命と思つて自己の不運を諦めるやうな弱蟲はいざ知らず、少くとも自己の運命を開拓せんと欲する者は、自力で自助して始めて達せねばならぬ。だから一度は窮して手も足も出せない境遇に陥るのもよいかも知れぬ。そして奮闘努力して達する様に運命を開拓して行けばよい。徒に窮したからと悲觀落膽したり、又は人に援助を求めなくともよい。自力だ、自力で更生するのだ。斯くして更生した際には奮闘の跡を顧みて、何とも云はれぬ人生の面白さを感じるであらう。努力してこそ始めて生の充實を覺ゆるものである。故にこの不況時代こそ努力するに最も適當で而かも努力する價值ある時機であるとも言へる。且つ亦此の不況を打開するに他力に頼つたのと、自力に頼つたのと、將來回顧する時何れが愉快に感ぜられるであらうか。況んや他力の頼むに足らざる現今に於いては、眞に自力更生あるのみだ。思ふに自力更生は不況計りではない、人生の全般にわたつて必要な事である。自己が零落した時、自己が失望した時、將不運の時、強く雄々しく人生の荒波を乗り切るのが大切な。

世が進歩するに従つて、幾何級數的に進歩するのは理論であつて、算術級數的に進歩するのは實際である。即ち十の理論の實際に行はれるものは唯一二に過ぎぬのである。此等の事實は學問ある人程に多い。これは何を意味するのであらうか。元來日本は理論よりも、むしろ實際を重する國であつた。と云ふのは昔から幾多の事實が近代になつて理論で説明されて居るではないか。それが近頃になつて全く反對になつて、有り餘る程の理論が實際に當てはめ様として居るが、誠に結構な事であるが又よく考へて見るとこれらが今の思想國難の一大原因となつて居るではないか。理論には實現出来るものと、唯だ理論のみに止まるものがある。それを學問が進歩するにつれて混合して來て、今では實現出来ない理論はない様に考へる人々もある様になつた。しかも高級の學校を出た者ほど、かう云ふ者が多いから實に驚くではないか。學問のない經驗は、經驗のない學問に勝ると云ふ事もあ

る様に、事實、理論ばかりあつても實際に行はれなければ何の役にも立たぬ。かへつて害になると云ふ事を知らぬ者が大分居るのではあるまいか。大學を優等で卒業しても就職口がない。就職難など云ふ事もきつこかう云ふ事が原因なのである。理論と實際とは一致しなければ役に立たぬが、又必ず一致するのは決して定まつて居ないのではない、が實現出来ない理論がある事を忘れると、必ず一致しないのである。かかる理論は空想に過ぎないのである。空想に耽ける者は、やがて社會の落伍者となるのである。理論のみを研究する者は落伍者である。實際を研究する者は半ば成功せる人であり、理論と實際とを合せ研究する者は理想的なる文明人である。

光と暗

五年 金子治平

光は光明の總てであり、慈愛の全人格である。生物の命を込めて愛慕し憧憬する、而も祝福され謳歌すべき存在は光である。光は勇躍又勇躍、眞直ぐに躍進して行

く魂の雄叫びである。物理学は私等に光は發光體內に於ける電子の振動、即ちエーテルの横波であることを教へてゐる。然もエーテルの横波以上に光は神秘的な存在である。光の無い所に罪惡と不幸とが生れる。それは暗の世界に於いてのみ明るい幸福な生活が求められる。炊事場の葱は何時の間にか光を求めて體を曲げる。私等は決して光の神秘力を否定してはならない。光は神の生物に與へる恩恵であり、慈光であり更に醜惡な陰慘な闇を突破つて行く光の存在である。私等は此の事を信じて疑はぬ。私等は他日大事業を爲すべき任務を持つてゐる。だが常に順調に事が運ぶとは限らない。不幸時を豫期せねばならぬ。私等が最善を盡してさへ功成り名遂ぐる能はざる時、その時は清淨極りなき満月が浮雲に掩はれた時である。其の時こそ百尺竿頭更に一步を進めて成功と言ふゴールへ向つて突撃すべきである。だが徒に前途に空想を描いてはならない。ゲーテ曰く「空想を睡いて絶望を刈る」と。げにその通りである。人は皆夢の如き將來を描きつゝ今日を送つてゐる。その夢の覺めた時……

己に逼し、それは絶望の時である。實に我等は確乎たる能力を基礎とした希望であらねばならぬ。あゝ歡喜と躍進の世界には常に光が存在してゐる。光は地の表面に出て自分を求めてゐるものゝ總ての上にならぬ慈光を投げかける。それは善と惡との如何に拘らず衆生を手の下に集めて慈恵を注ぐみ佛の慈悲の御心にも等しい。此の光に浴し得るものは何と幸福だらう。此の光に双葉を出した許りの草木は伸び、花は微笑む、小鳥は歡喜として歌ふ、人は温き光に浴してしみじみと生き甲斐を知る。だから私は光の中で何よりも太陽の光を祝福したい。だが月の光には限り無き懐しみを持ち、北極星の嚴かな光にはたまらなく若人の日が嬉しい。夜を照す電燈の光は火を知つた人間が蠟燭を知り、洋燈を知り、遂に電燈を知つた人類の文化の様々な姿が窺はれて面白い。然し人間の「光」よりも自然の光が美しい。自然の光の中でも太陽が美しい。悠遠な春の光は幸多い人の世の教を興へる。夏の眞赤な太陽は意氣と感激との光を浴せかける。それから秋の光、冬の光にも夫々たまらぬ懐しみを嬉しさがあ

る。此の時「努力」「努力」と心は叫ぶ。そして私達は

大歡喜、大満足を以て上へ上へと向上し、躡進して行く此の時私は感ずる。恵まれた環境にある人はよくそれを善用し、己が品性の修養に務め、恵まれざる場合には不撓不屈、よく環境の齷す極格や絆羈を打破つて人生の悠々たる行路を辿らんことを。地の底に蠢く坑夫、陰慘な牢獄に泣く囚人達はどんなに光の世界を渴望してゐるだらう。試みに吾等が風光明媚な溪流を望みつゝ走る汽車に乗つて、ほんの數分間トンネルに入つてさへ陰影を現實に體驗する。蓋し長い間光の一條さへ浴し得ぬ生活を續けることの慘さは實に想像以上で彼等の爲め、一掬の涙を禁じ得ない。長い冬が去つて雪空の晴間から美しい太陽の光の溢れるとき、北國の人は暗の世界から解放されたことをどんなにか歡喜するだらう。黎明の野に立つて眞赤な太陽を見、霜夜に玲瓏たる秋月を仰ぐとき、北國の人ならずとも、喜悅感激希望の冥想は深く、高鳴る血潮は迸り、眼り知らぬ讚美の心に滿されて行くであらう。暗!! 悪い環境に置かれた人も決して不幸ではない。然もそれは却つて感謝すべき幸福であるかも知れぬ。即ち心の持ち様一つである。逆境の洗禮を受けてこそほん

うに強く、深く、そして美しい魂を育てることが出来るのだ。長い眠から目覚めた蛙は光を求めて、地上に飛躍する。草も、木も、人も、生物も、悉くは光を求めて光を愛慕し、之を憧憬しどよめき動く。
あゝ光こそは理想への導きである。勇躍又勇躍の神の雄叫びである。

日本文化の變遷を論ず

五年 田坂興道

文化は人類の出現とともに生る。然れども、一貫せる體制の下に文化の見るべきものあるは、人類進化して、單なる個人生活より脱却し、社會生活、集團生活を営む時代に始まる。

我が日本文化も神代既に歌あり、詩あり、美術あれども、それは未だ史的地位を有するものにはあらず。降つて應神朝の世、漢學の渡來せるあり。しかも此の學は僅かに上流社會にのみ行はれ、民衆は依然として繩木を用ひ符となし、言語に代ふべき意志の發表機關となせり。

和漢混淆體の戰記的のもの興れり。建武の中興より足利時代に汎りては、禪家の風を受けて、淡泊なる趣味藝術盛なりしも、應仁の大亂以降、下剋上の風徒らに盛にして殺伐の氣全國に満ちて、百鬼夜行の有様となり、宮室頽廢し、人民流浪す。かゝる暗黒時代にありて、いかで文化の向上發展を見るを得べき。文學は萎微し、藝術は退歩し、國民文化は一大停頓を來せり。然りと雖も、家康三百年太平の礎を築くや、元祿以來、又儒學起り、國學復興し、特に平民文學の新興はよく當時の民心に適應して忽ち一大勢力となり、大衆をして藝術的理解を深うせしめ、文化の一般普及に資する所多かりき。

世は一新して明治の世となれり。浦賀灣頭一發の砲聲は殼を鎖して安眠せし日本が世界と交渉して以て現代に至るの一階段なりき。文化又外來の思想藝術を融和渾合して新形態をなさんとする。今正にその過渡期にあり。文化は凝滞せしむべからず。常に激瀾たる進展を致さしめざるべからず。我が日本國民はこゝに重責あり。即ち國民古來の文化、即ち日本に依りて大成せられたる東洋文明、特に精神的に勝れたるこの文明をして、西洋文明、

欽明天皇の十三年、佛教の傳來ありてより、漢韓の地と交渉次第に繁を加へ、聖德太子の遣隋使派遣國分寺建立によりて、外は大陸と公的交通の緒を開き、内は建築彫刻の術勃興の氣運漲り、國民文化の黎明の警鐘は高らかに響き渡れり。所謂飛鳥朝美術はこれにして、ヘレネス文化の影響、即ち犍陀羅美術の流を汲めるものにしてその作品の質朴純真なる、優に當時の我が民族精神を窺ふに足るものあり。爾後、國民の藝術的頭腦は頗に進境を示し、奈良七朝七十餘年、天平時代の諸美術は丹碧絢爛として、彫刻術の進歩と共に名作接踵せり。平安時代は所謂國民文化の爛熟期なり。我は彼の唐土の制度文物を輸入して能くこれを同化し、此に純然たる國民文化は建設せられ、國文學の進運は、假名文字の發明と、藤平二氏の奢侈風流と相俟つてこれを助長し、勃然たる一大飛躍を遂げたり。然かもその末期に於ては、漸くにして華美淫逸に流れ、字句に拘泥して、剛健雄大なる古代思想は地を拂ひ影を潜むるに至りぬ。この反動として起りし武士の鎌倉幕府の創設は、國史未曾有の剛健率直なる國民固有の武士道の發展を促し、文學も亦雄渾莊重なる

特に物質的に勝れたる彼の文明と同化せしめて、固有の長所を失はず、彼の長を取つて以て我が短を補ひ、日本文化をして、世界各國文化の粹たらしめざるべからず。文化に對する國民の重責はこゝにあり。特に文筆を以て一代に臨むもの、よくその態度を慎重にして進止せざるべからざる所以なり。

水郷としての萩

五年 居田 勇

中國の山岳を割つた河水が山野のあらゆる水滴を吸収し、一河水をなして海に滑り込んで居る。此の河水は水郷に向つてゆるやかに、或は急速に、幾百年の昔から行進を續けて來たのであらう。此の河水の造つたデルタこそ水郷としての萩だ。水郷を抱いて海に出でんとする尖端には、つかりと浮び上つた曲線は誰の目をも引きつけずには置かないであらう。丁度緑の精に抱かれた様な此の丘陵指月山は、幾百年前より水郷の人々に敬愛され、且つ又不朽の歴史を包含し、左右に白沙青松の海濱を従へ

此の水郷を睥睨して居る。恰も關門の海峡に浮べる干珠満珠の島の如く。一度目を裏に轉ると、其處には最も男性を象徴した巨巖が屹立して、此の水郷の空気を心ゆく迄呼吸して居る。此の巨巖と永劫の戦を挑む紺碧の怒濤が激して白き飛沫をあげて居る。此處に水郷としての萩の男性的な豪快な一面が躍動して居る。此の水郷の衛島六島に碎けたる日本海の黒潮も、左右の白沙に鳴を静めて、静かに静かに阿武の向水と合一してしまふ。其の静寂の中に深緑の衣を着た常盤島がある。玉江橋が向ふの連山と水に合して水郷の名に違はぬ趣をそへて居る。其の静寂の中に水の精が舞つて居る様な氣がする。

指月の秋

特別會員 津村 幽笑

十月の芝生を踏むは嬉しけれご一まめぐりすればやゝ疲れたり
社いでゝ右の芝生に降りたてば櫻の落葉はまだ新らしき
午後二時の陽射しを背に覺はつゝ公園の芝にわれ久しくありぬ
葉濡れ陽の芝生に落ちしぬくまよに心ゆたけく去りたくもなし
内濠の水やゝ濁り見せて揺れもせず城址の秋は深みゆくらし

暴風雨を詠む

特別會員 津村 幽笑

あらし來さ表戸を舞ま圍ふらし軒の暗きに父の聲してゐる
籠りつゝ夜となるまゝにすべもなし暴風雨はいよよ吹きまきり來む
籠りつゝ語らふ話もつき果てぬ竈火はたゞ燃ゆに燃ゆつゝ
風は風げごなほ降りまさるか母上は雨漏りすこて桶もちまごはす
門先に物の倒るゝ氣配して牛なが鳴けば心もさなし

秋の心

同人

たそがれの汀を遠くたどり來れど舞るにおしき此の心はも
またも／＼吾が思ふ事のかきなりぬ木犀は庭に薫りゐたるに
朝通れど夕べ通れど此の宮の松は梢まで力もてるよ
此處に來て五ヶ月は経れど快よき人間にも選ばずなほ獨りなり
思ふこゝ京洛に残しいさまなく働くまゝに疲れゆく覺ゆ



卒業生通信

東京高等工藝より

同校 大塚 均

大東京は生れる。帝都の人口は武蔵野原へ無限に延びて行く。人々は都市へ都市へと集中して來る。其の持つ魅力は何であらうか。此處三四年間東京を離れてゐた者が再び帝都に歸つて來たら驚くだらう。それはネオンサインの出現だ。銀座新宿の夜の街を彩色したのもツイ三年前からだ。空氣中に微重に存在してゐながら二十年前までは其の存在も知られなかつたネオン、アルゴン（ギリシャ語で怠惰者の意）等の不活潑にして大怠惰者の大將も今や昭明界に無くてはならぬものとなつた。

今に人間の怠惰者には聞かせない耳寄りな話も出て來るかも知れぬ。

「三日見ぬ間の銀座かな」とか、流行も日々變つて行く。我々圖案の道は各方面に展開される。最早店頭の廣告や饅頭のレッテルを書いたのが圖案家だつたのは昔の事だ。各原料の方面に於ても用途の方面に於ても物理、化學、建築方面と重大な關係を持つ事になる。あらゆる方面に立脚し現代人の精神の動きを洞察しなければならぬ。用途に於ても多種多様で到底數へつくす事は出來ない。如何に良きアイデアもそれを商品化し多量に生産し得て有利なるものでなくてはならない。

最も良きアイデアのもとに最も安價に且つ多量に製造

し得るものを案出する事が我々圖案家の使命である。國家的立場から考へても輸出品に及ぼす影響は大である。

今後の東京高藝の使命は重大である。

本年度の入學率に於ても全國高等工業方面の學校では第二位に位する難校となつた。如何に世の中がかくの如き學校を要求してゐるかが解るだらう。

制服は香廣服だ。その通り學校としても紳士的に取扱つてくれる。街頭では早速安物サラリーマンと間違へられる。しかし學校内では中學時代を思はせるナツバ服に運動帽だ。家族的で和氣霽々たることそれは吾々高藝の持つ美しい處だ。

此の方面の神經を一本でも有する者は來れ!! 我高藝へ!!

鯉城だより

廣高師理三 井町秀介

青空高く聳える鯉城下に、教育の大本山と自他共に許してゐる廣島高師に、幸ひにも學ぶことになつた私は、

甚だ僭越乍ら、この學校を志される諸君のために、二三學校の様子などお知らせする事になりました。元來これは中野君に御願ひすべきであつたのを、同君が多忙のため固辭せられたので、不充分であるとは知りつゝ、思ひ切つて筆を取りました。

さて、この學校は比較的固い所ですから、先づそのつもりでおいで下さい。勿論學校の目的が目的ですからこゝへ來るほどのものは、それくらの覺悟はしてゐられるとは信じます。尤もこれも見方一つで、一方には随分ルーズな點もあります。學科の方も相當忙しいから、これも覺悟を定めて下さい。文一、文二、理一などは比較的的時間数は少いやうですが、文三理二理三はなかく多いです。理二と理三は實驗が多くてとても忙しく、高等程度の學校は樂だらうなんて考へて來ると一寸驚きます。併し如何に忙しくても興味がありさへすれば少しも辛いとは感じないものですから、この點先づ科の選擇が何より大切になるわけです。この學校は、設備など田舎の學校としては比較的整つて居り、個人的にでも深く研究しようと思へば、その便宜も多いし、又今では大學も

出來てゐるので、相當學究心を満足させますから資力の點などで、高等學校から大學へ進むことの出來ない人にも好都合でせう。次は卒業生就職状況ですが、これは昨今の不景氣のため、以前ほどではありませんが、それでも他の學校にくらべたら雲泥の差でせう。今年なども卒業式までに決つたのは約半數でしたらうか、併し今では殆ど全部就職してゐる様子です。何にしても、就職戦線に於ては、同列を遙かに抜いてゐます。この點御安心下さい。さて愈々試験について氣附を云ひますならば、一體この學校の試験は、どちらかといへばやすい方です。だから結局、正確な知識を確實に頭に入れこれに

明瞭に答案紙に書くものが勝つことになるのだと思ひます。従つて飽くまでも、「其本的な事項を確實に」又、「量より質」を、モットーとすべきでせう。それは博物の教授の話ですが、問題を出すに當つては、現行はれてゐる教科書を五十以上も集めて、そのいづれにもある事を出す事にしてゐることです。これはどの科でも同じ事です。ですから教科書さへ徹底的にやれば何も恐れる事はありません。安つばい参考書など極力排斥すべき

です。最後にこの學校は入學に際し、中學校の成績を大いに考慮するらしいですから、受験準備に夢中になつて學校の方をすつばかすのは賢明でないでせう。

最後に今一つ、學友會の事を話しておきませう。これはそちらの校友會と同じやうな機構のもので、總務部、講演部、學藝部、劍道部、柔道部、競技部、野球部、籠球部、排球部、蹴球部、庭球部、卓球部、漕艇部、水泳部、山岳部、乗馬部に分れて居り、各自その技倆を自由に伸ばす事が出來ます。スポーツは仲々盛んで、殊にその廣大なグラウンドは我校の誇りの一です。

要するに、長いばかりで要領を得ないでまことに濟みませんでした。なほ各科の内容について、又試験についてくわしく知りたい方はごん／＼質問して下さい。出來るかぎりお答へします。

この學校には秋中から來た人は、中野君と僕と二人切です。どうか奮つてお出下さい。その時には能ふ限りの聲援を惜しみません。諸君の御健在を祈つて擱筆します。

駒場農學部實科より

同校 井上國雄

都の西南、六十年の歴史を誇る駒場の森に、集ふ我等農學徒、途は農林獸醫の三科に分れても、目指すは農本立國その大業の完成、そは我等が重き使命である。花咲く朝野の露に、落葉の夕月陰に、大自然の母に教へられたる至誠至純こそ駒場學徒の精神だ。大空の光、地に聽く囁き、萌え出づる若草、緑濃き木立、散り敷く銀香葉嗚呼！我等若き日を此處に集ひて、豊かなる恵を拓き新しき希望を抱き、健かに力培ひ、萬象の則を求む。いざや讀えん 仰がん 謳はん駒場の自然を、理想を、使命を。

我等のモットーとする所は、悲慘と困窮と無智と卑屈のどん底にある農民の爲に、共に苦しみ俱に楽しみ彼等の不満彼等の憤怒、そして彼等一切の感情に言葉を與へ、そしてそれを統一し、まとめ上げ、組織立て、理論づけやる指導者たるにあり、而して憐れなる彼等を踏臺として高位高官を求むる者では決してない。我等は共存共

榮を常に念頭に置く。

入學試験について一言すれば、餘り難しくはない。英語、數學(代數、幾何、三角)、動物、植物、作文の五課目だ。英語は、農業及び動植物の術語と、自然に關する文章が出る事が多い。そして英語は入學後原書を多く讀まねばならぬので幾らやつて置いても損はない。數學は動植物と共に、及落を決する大切な課目である。三角は難問の様に見える。動植物は、専門の教授がある關係上相當難題が出される。作文は要するに思想と國語の力を見るにすぎぬ。以上の詳細に亘つては小生或は、都野繁雄吉岡哲郎、田中博諸兄の許に一報を賜はれば、喜んで出來得る限りの盡力を惜まない。

卒業生の就職状態は、最古の歴史を有する農學校だけに、農林省、地方官廳その他試験場、農會等に、百パーセントの好成績にある。

幸ひに諸君の中に、駒場の使命を奉じ、モットーを理解し、雄々しく闘はんとする友を得ば、拙き文を草せし効がある。乞ふ！奮つて駒場に集はれんことを。

京城高商より

同校 長曾正雄

秋も漸く酣となり五年生諸君は間近に逼る受験校の選定に悩まれる事と思ひます。

扱此の度は京城高商の内容に關して御紹介致しまして皆様の御参考になれば幸甚に存じます。

朝鮮は日韓合併以來農工商に於きましては其進歩著しく、例へば農業に於ける米麥は併合以來二倍に迄も増加し尙も將來は農業十年計畫等と云つて偉大な計畫を企て工業に於きましては東洋屈指の大工場が所々に建設されてゐます。従つてそれに伴ふ農工商生産物の移動交換を掌る商業は云ふ迄もありません。是等農工商業界に支配的位置にあつて經營に盡力する者は朝鮮唯一の京城高商卒業生が其大部分です。

近頃滿洲の迷雲も漸く晴れ渡り内地青年間に於きましても滿洲に對する所謂滿洲熱が彌々益々旺んになつてゐる事と確聞致してゐます。而して内地青年達は何の豫備知識をも具へず唯滿洲へ行けば如何にかならうと思ひ込

み鴨の大志を抱けるが如き氣持にて漫然と渡滿する者が多いのです。そして彼等は思つた通り如何にかなつたがそれは氣の毒なルンペンです。

經濟原理より見ましても文明人が未だ文化程度の進まざる下級な土地へ勞力を以て侵入せんと勤むるも其は不可です。内地人の滿洲へ對するも同じです。只滿洲に入りて生活を保持し得る者は資本を投する資本家、或は社會的に特殊な才能を有する人或は特殊な技術を有する人です。普通人の裸一貫と云ふ風では到底駄目です。

では滿洲朝鮮に腕を揮はんと志す青年は如何にして豫備知識を得ればよいか。斯うなれば其の方法には色々ありませうが、私としては最安全で最有利な方法は、京城高商にて準備をお進めになる事をお勧め致します。勿論臺灣にも植民地唯一の高商がありますが、あそこは南支南洋、臺灣本土に活躍する爲の豫備學校です。決して滿鮮には適しないと思つて過言ではありません。近頃内地に於きましても山口、長崎の諸高商は滿鮮の研究に随分血眼となつてはゐますが其効果は少い様に思はれます。それでは京城高商は豫備知識として研究してゐるもの

は一體何であるかと申しますと、内地高商の修むる一般商業學は勿論、朝鮮語、支那語、ロシア語等をやつてゐます。高商三年間には朝鮮語、支那語は殆んど自由に話せる様になります。と云ふのは中學校當時の英語とは異なり鮮人、支那人に常に接近してゐるので會話に於ける上達が非常に早いのです。そして其の間言に語學を覺える許でなく鮮人の風俗氣質、支那人の性質をはつきりと理解する事が出来るのです。この氣質を理解する事が鮮支間の波に漂つて事業の成功を助ける最も重大な役割を演ずるのです。

今や朝鮮は就職と云ふ點に於きましては内地から獨立してゐる傾向を有してゐます。官廳、大工場、大會社、銀行、金融組合と云ふ行政機關或は企業に於きましては總督からのお諭しを受け全部鮮内の學校から採用してゐます。實際内地からは全然侵入出来ない状態に立到りました。前述の金融組合と申しますのは朝鮮に其偉大なる勢力を有する金融機關として全鮮到る處に、如何なる田舎にも存在し全く銀行を驅逐して了つてゐる金融團體です。そして金融組合の理事(銀行ならば支配人、支店長)

變更があるらしいですが京城高商は多分變更のない事と思ひます。

特に注意致しますが本校志望者は英語、數學をしつかり學んでおく事です。どちらかと云へば英語です。皆様御勉勵を祈りつゝ。

滿洲工專より

同校 大庭 政 雄

御便り誠に有難う御座いました。皆様にも益々燈下に御親みになり目的に向つて突進されてゐる事と思ひます。私も御蔭様で無事に滿洲の地に勉勵してゐます。

扱て皆様の御参考になりそうな事とても餘りありませんが私の見聞の範圍内で少し書いて見ませう。もし少しでも皆様の御資料になりましたら幸に思ひます。

先づ滿洲の生命線に働きたい希望のある方、而して健全なる身體を有し、工業に志のある方は私等の學校に活躍の第一歩として入學されん事を切望します。その方が内地の學校より、あらゆる點に於て有利だと思ひます。

は京城高商卒業生の獨占到歸してゐる状態です。

高城高商卒業生中には自ら營利企業を起す者も相當にありますが、就職と云ふ方面から觀ましても近年の不景氣に災されたとは云へ内地諸學校に比すれば全く優位を占むる次第です。就職の工合を示して見ますれば(但昭和七年)

金融組合理事 廿名 專賣局 十名
行政官廳 十六名 營利會社 十一或は十二名
殘約十名は獨立營利企業を起す。

と云ふ有様でして卒業生七十名にルンペン無しです。

只今萩中卒業生で本校在學者は

三年生 末成君 二年生 長會君 一年生 大山君 の三名です。

私共三名は萩中より京城高商へ一人なり共多く入學されん事を切に希望致します。若し希望の方は長會のもとへ御手紙を差出され、ば願書の方法等を御知らせ致します。と云ふのは京城高商は願書の記入事項に依つて採用の工合が違ひますから、今年春は四百五十名の志望者で採用人数は八十五名でした。内地は來年より採用人数に

本校卒業生は或ひは滿鐵なり各會社に入り或ひは奥地の新京、ハルビン、チ、ハル等に入り新滿洲國建設の爲め一身の危険をも顧みない様に出でゐるかも知れませんが、(代數、平面立體、三角)、物理、化學で一般に困難ではありませんが、數學は容易な問題が澤山出ます。そして特に三角を、しつかり勉強してをいて下さい。入學後も之がないと一日も暮せません。物理も山などは決してかけず、みつしりと見てをく必要があります。どんな問題が出るか分りません。英語は常識的の事ばかりです。入學試験の一覽表には率も少ない様に出でゐるかも知れませんが、實際の所は無試験入學者が過半数を占めますから受験者に取つては、もつと高い筈です。その上事變に刺戟されて今後増加の見込がありますから一層自信の養成に勉めて下さい。萩中卒業の在學生は私共で四人居ますが他の三人は三年で來春は巢立ちをし私が一人取り残され寂寞を感じる事になります。何卒特に滿洲に於ては活動の要素となる身體を充分に鍊へられて勉勵され私等の學校に是非志望入學されん事を望みます。

もし志望される方がありましたら大連市伏見町南滿工

専寮内宛に御一報さるれば二、三年前までの試験問題も
ありますから御送り致します。では御機嫌よう。

廣島高工より

同校 村岡慶太郎

今や滿洲國も承認され、彼地三千萬民衆は重年の塗炭
の苦より脱し、一路光明の殿堂を築きつゝあり。これが
補佐援助には、第一に我國の衷心よりの誘導後援をば必
要とすと、斷言するに何の躊躇をも要せず。

今搖籃の中にある彼をして立派なる一人前のものと養
育し東洋の福利、世界の平和の爲一日も早く理想的の郷
と成育せしむべき責任は一に吾等が双肩にあり。

彼が福利の増進として取る可き手段を擧ぐれば十指を
屈するも尙足らざるも、こゝに第一指を屈すべきものと
して工業の發展、生産工業の合理化即ち廣義の工業の發
展進歩を擧ぐ。

一國文化の發達するや否やは、その國の工業方面に眼
を轉ずれば一目にして分明すと云へるが如く、工業の盛

衰は直に一國の盛衰に重大なる關係を有す。こゝに工業
に專進するものゝ自覺を促す。

今や天高肥馬燈火親しむの候、國家天下に雄飛せんと
して霸氣勃々たる青年の羽音高く奮起せられんことを望
む。最後に本校受験希望者の參考迄に一言呈す。

本校は御承知の如く入學試験課目としては、例年英語
數學の二課目のみを課す。

英語は時事に關する平易なる、通俗單純なる文章にし
て他校の如く、込入りたる強いて諸子をして苦汁を味は
さんとするが如きとはその趣を異にす。

數學は主として證明問題にして吟味を要するが如きも
のを主とし、三角法は大に勉強して置く必要あり。

大體中學校に於ける成績を半分と、試験成績を半分と
して採點せる様に推察出来る。英語はともかく、數學に
至りては平易な一面深慮を要するが如き問題を例年出問
す。此處に諸子のどしどし御入學あらんことを切にノ、
希望す。現今聊か寂寞の感あり。

東京高等商船學校より

同校機關科 山村源治

僕達の學んでゐる東京高等商船學校は隅田川の河口に
近い越中島に房總の山々をはるかな水平線の彼方に望み
つゝ東京灣の青波を脚下に、晴れた日には富士の高嶺を
軒端にも眺められる形勝の地位に立つてゐます。

維新の風雲いまださだまらぬ頃、早くも海運立國てふ
海に對する無言の啓示は本校を誕生させました。

爾來數十年の輝ける歴史、斯界の最高學府として榮え
來つた本校の沿革を詳記するには紙數の足らないのを恨
みますが我が校の内情を一貫せる傳統理想てふものは敢
て宣揚すべき價値あると思ひます。まして海運の一日と
雖も吾人の日常生活から切りはなせない、而して太平洋
時代に直面しつゝある現代日本が典型的な大和武士の血
を享けた「シーメン」の颯起を刮目して待つてゐる今日に
於て本校内にみなぎつてゐる一種異様な靈感！それは
外來の參觀者の心を少からず刺す或物があるそうです。
云ふまでもなく「プロミシング」な「シーメン」として

は元來旺盛なることも必要でせう。心も動作も洗練され
て「スマート」なことも必要でせう。不撓不屈の精神が
眉宇に漲つてゐることも必要でせう。然し「シーメンシ
ップ」の粹なるものは實に規律節制に外なりません。敷
衍して述べれば限りはありませんが越城生活のあけくれ
私達の生活は規律そのものです。精神的にも又肉體的に
も一定の條軌が四百數十名の若い者の心を一つの理想に
一つの目標にみちびいて行きつゝあるところに越城（越
中島の吾等が城廓の意）の「エッセンス」があります。起
床ラッパの朝の靜寂を破れば十分の後、一糸みだれずグ
ラウンドに整列して一日の活動のスタートを切る彼等し
づかな燈下に二時間の研學終れば全寮に響く就寝ラッパ
の音とともに越城はすこやかな夢に包まれて行きます。
數十尺の練習船のマストのヤードに操帆作業にいそしむ
未來のキャプテン。轟々たる爆音きつゝ、「デイゼルエ
ンチン」を運轉し、或ひはモーターの微妙な音につま
れつゝ電氣實驗に熱中せる機關長の卵のたのもしい姿等
々、當の私達は意識しなくとも外部の人の目にうつる私
達の生活は彼等に一種の「インスピレーション」を與へ

ざるを得ないでせう。越中島の生活はスパルタ式などこ
ろは勿論あります。然し時勢は越城生活による意味に於
てモダンな雰圍氣をかもして居ます。恰も精神的に國
粹主義にこりかたまつてゐる私達が高遠な航海術「アッ
プリーデット」な機關術を一も漏らさず自家藥籠中の物
とするが如きです。生徒寮に於ける私達の生活は全く文
化生活といつてよいでせう。鐵筋コンクリート三階建の
美しい校舎に堂々たる圖書館に汽罐室にその設備はその
源たる姿は智的にしてしかも剛を帯び華にして猶ほ浮薄
ならぬ越城健兒の心そのものだと思ひます。商船學校と
云へば勿論所謂船乗りを作る學校です（船乗り）と云ふ
言葉は世間の人はどんな感じをふくませて云つてゐるか
私達はあまりにそれに拘泥してはゐません。然し私達を
おいて誰が現代の大商船を圓滑に動かし得て絶えざる經
濟戰の第一線に立つて帝國の海運界を維持して行く事が
出来るでせうか。海國日本、海運の國、海の子の使命……
……を考へる時世界の檣舞臺に活き、且つ動く私等に
無限の自得自負を感じます。私等の自覺はかゝる信念の
下に育まれ來つたものです。私達にのみ許されたる東京

灣を吾が物顔の「ブーリング」に「セーリング」かくし
て大洋に覇を唱ふべき越城の粹越中島スピリットは不斷
にみがかれて行きます。

試験についての心得等、規則書を讀めば解りますし他
の注意も常識です故蛇足と思ひ省きました。吾々萩中卒
業生として諸君達の入學を雙手を舉げて待つて居ます。

大阪商大高商部より

同校 藤本朝三

天高く馬肥ゆるの候、諸兄は今や來るべき入學試験を
目指して日夜勉強に餘念なく御勵精の事と存じます。

諸兄等の中には或ひは陸海軍の學校へ、或ひは高校、
高工等へと目指して居られる方もあるでせう。が、又高
商志望の方も多數居られる事とせう。私は自分の立場よ
りして高商方面入學志望の諸兄に一言致したいのであり
ます。高商志望の方々には或ひは近くの山口高商へ、或
は東京商大へ、或は他の地方高商へと各々その志向によ
り、目的校の選定に頭を悩まされつゝある事とせう。私

てゐます。

右に述べたのは我校に關する一部に過ぎませんが、右
の點だけでも十分諸兄の考慮を促し得るに足るものと信
じます。等しく高商へ入學せられるならば地方高商に埋
まれるより緊陣一番、我商大高商部へ御入學せられん事
を切に御勧めします。

入學試験に關しても地方高商のそれより多少困難かも
しれませんが、周到な準備でなされた勉強によつてすれ
ば入試又何するものぞです。現在山口縣出身者僅かに三
名で甚だ寂寥を感じてゐます。

是非我商大に多數入學されん事を切望して止みませ
ん。入學希望の方は私の元まで御一報下されば、試験に
關して参考になる事もあります。兎も角も健康を維持し
て大いに勉強され、來るべき聖戰に多數の諸兄が榮冠を
獲得せられん事を御祈りします。

（大阪市天王寺區烏ヶ辻町大阪商大内）

は大阪商大高商部の生徒として、諸兄が我が大阪商大高
商部をその目的校に選定されん事を願ふものであります
我商大の沿革を略述すれば、明治十三年に創立された私
立商業講習所に基を發し、其後幾變遷明治三十七年大阪
高商となり、昭和三年商大に昇格し現在に及んでゐます。
その教育方針は大阪なる土地の然らしむ處により、實際
的と云ふ點に主眼を置き、實業に於ける實際的手腕は定
評があり、此點同系統學校の何れにも遜色なしと一般に
確信されてゐます。

更に禮儀正しく自治的であつて共同一致の精神に富ん
でゐるのも其の特長とする所です。創立以來長い年月を
經て幾多の先輩を出し、その先輩は實業界の各方面に於
て重要な地位にあり、活躍をして居ます。且又日本の商
業都市にある爲、就職にも便宜が多く此不景氣の時代に
於ても比較的就職難が少いのは全國でも稀とする所で
す。此の點安心して可なりです。

又校舎は現在不完全な古い建築ですが、來春よりは
市の南端大和川畔の新校舎へ移轉する豫定です。その設
備は近代的で、完備し、勉強、將又體育にも甚だ適當し



固靴の跡

四年 柳井 清

七月廿一日、木曜日(晴) 憧憬の旅への門出。
「番號!」一、二、三!……」と皆の聲には包み切れない元氣が溢れてゐる。「二組異状無し!」と張り切つた菊屋君の聲が、乾燥した大氣に消え込んだ。

玉江プラットホームで四年生七十二名は、皆一様の楽しみと希望を抱いて、御見送りの先生方に少時のお別れをした。校長先生のお顔に喜びが見られる。金子、河野、山本(百)、山本博の諸先生のお體が焼け付く様なホームに見られた。後から岡庭先生が自轉車で乗り着かれた。先生方の御恩を今更感謝しながら乗車。

先生から戴いた謄寫版刷りの旅行日程と毎時の様に首つ引きして待つて居た甲斐が有つて、いよゝゝ出發だ。

ざわゝ騒いでゐる中に汽車は一揺れしてホームを離れた。時計は靜かに午後二時四十分を指してゐた。前途を祝福するが如き、優しい指月山の姿も次第に眼界を離れた。まどらかな幾つものグループからは、愉快相な喜びに満ちた笑聲が起り、雑話の聲が次第に高まつて来る。「丘を越えて行かうよ、眞澄のお空は朗らかに晴れて……」と、ハーモニカの樂音が車の音と雑話の聲の間を強く押し切つて流れて来る。「此んなに驅ぎよつたら今に弱々なあ」と田中が言つた様に皆は陽氣な學生をきめ込んでゐた。

僕は仲良しの田中、水津、小倉と一グループを形成した。お互ひの視線が會つた。「ふゝゝゝ」と忽ち微笑だ。

安心と言ひ切れぬ複雑な楽しみとの混結だ。中々意味深長な微笑だ。「少し脚を入れさせ」と長い脚が僕の方に迄侵入して来た。小倉の脚だ。「家宅侵入罪だぞ」と僕も、持ち行き處の無いゲートル巻きの脚を侵入させた。向ふは田中のかいお釜と、小倉の細いのどで平均が取れてゐるが、何う見ても狭い、廣い朝鮮の汽車が想はれる。此の旅行が終れば直ぐ歸省だ。僕には楽しみみの二重奏だ。他の連中の昂奮が下火となつた頃正明市に着いた。とても時の過ぎるのが速い様だ。

右手に迫る日本海の水は、手に染まる様な碧い波になつて、汪洋として果しなく打つてゐる。

何時の間にか、汽車は軽く下の關にすべり込んでゐた。夕陽が柔かく射して、ビルディングの硝子は金色に反射してゐる。覚え知つたホームを走つて驛前に集合する。

もう其處には大都會の交響樂が奏でられてゐた。銀バス、青バス、タキシードが飛ぶ。萩市とは趣が違ふ。靜と動とのコンストラストだ。スピード時代たる事が明らかだにのぞかれる。小倉君が新製の靴と洋服に身を固め、案内役を司るさうだ。休憩廿五分の後壇の浦へと隊伍を整

へた。「良く並べよ」と小聲でお互に自重した。(皆の者よ、今衆目の中で校風を發揮せんとして居るのだぞ)と心の中。屋根の上に草木の繁茂してゐる建物を左に廻つて少時の後龜山神社を素通りだ。力の弱つた淡い日光の中に黒ずんだ祠が見える。

修繕最中の危い小道に沿つて赤間宮へ。もう夕陽は家々の屋根の彼方に沈んでゐた。金枝玉葉の御身で西海の藻屑となられた、安徳天皇を想ひながら立派な石段を登つて参拜。左手に御裳川の石碑が建つてゐる。「今ぞ知る御裳川の流れには、浪の底にも都ありとは」の悲歌が思ひ出された。入海の時の感情を思へば他事とは思はれなかつた。間もなく町を通り抜けて壇浦に出た。海が有るばかりで他に何も無い。文明の姿一汽船の浮んでゐる淡暗い海面は、古を思はせるに足らなかつた。此處から又驛へ引返した。途中見落した春帆樓を久保先生が指さされた。日清談判の跡だ。石段に門構へは宿屋兼料理屋にも似つかぬ殿しだ。見落したのも無理は無い。講和談判を料理屋でやつたところは、所謂樽俎折衝で如何にも東洋風らしい。ふぐを食べた事だらうと思ひながら通過

した。驛で腹ごしらへの爲に解散した。夜が深まるにつれて町通りはいよ／＼忙しくなつて行く。肥つた腹を抱えて十時廿分、關門連絡船のデッキに立つてゐた。ホーツと押し太い鳴笛を擧げて船は軽く浅橋を離れた。十五分の後、鹿兒島行きの札を腹に掛けた汽車の、人待ち顔な入口を潜つた。玉江驛をスタートして以來の追憶がからくりの様に疲れた頭腦を走る——僕は同じ半日でも暮し様では随分長いものだと思つた。午後玉江驛で先生方にお別れしたのが餘程以前の様に考へられた。少時下關の話に花が咲いた。

「えい、寝られんの」と田中が眼を開いた。「やかましい早く寝んか」と誰れかどわめく。興奮してゐる連中は仲々寝付き相も無い、まして汽車の中の一泊だ。僕は寢よう／＼と必死に眼をこぢるが、頭腦は五える一方だ。寝られ無い連中は口の運動が頻繁になつた。

「やかましい！興奮するな！」と小河君の恐ろしい聲に大分静かになつた。カタ／＼と車輪のリズムに、何時かうつら／＼と夢の國を彷徨つて居た。

七月廿二日 金曜日(晴) 港町佐世保、長崎への旅。

陽に靜かに黒ずんだ肌を反射してゐる。繪馬殿には元寇時代のであらう、怪し氣な刀や弓が掛つてゐた。鳥居の側に小さな銅像がある、建武中興之忠臣村山氏第六代贈正五位村山義信公之像と刻んである。時間になつたので海兵團に向ふ。海軍の白い軍服がそろ／＼と朝の出動に急いで居る。軍港街を思はせるに餘りある光景だ。スーッと軽く、海軍のマークを付けた自動車が多過ぎた。白い軍服が胸をさらせて乗つて居た。ドライブに持つて來いの立派な平坦な道だ。右手に高く受信マストのアンテナが朝日に輝いて居た。出動命令の時には雄々しい電波が舞ひ入る事だらうと思ひながら、立派に整列して海兵團の衛門を潜つた。「海兵團は兵を訓練して各艦に分配する源です」と言ふ、恐ろしく簡単な説明の後、舍内を引張り廻された。歩兵聯隊と違ふ所は無い、只白い可愛らしく見える水兵さんが居る許りだ。がらんと静まつた兵舎の間を通過してプールに出る。素敵に美しい。四五人の兵隊さんが練習をして居る。水兵さんの髯化場だ。淡青い水の面が白い天氣雲を映して居る。ドボン！ 白い飛沫がパツと散る。「伎癢に堪えずと言ふ處だ」と誰れ

何時か皆の聲に眼が覺めた。「未だ三時だ」と誰れかの聲眠い眼をしばた、いて早岐驛でだるい乗換をした。五時十分！外は早朝の景色だつた。急に異國の空の下に居る淡い淋し味を覺えた。餘り感心しない辨當に箸を附けたが魅を食ふ様だつた。小倉君が濃い霧の包んだ窓外の景色をぼんやりと見てゐる、多分ホームシツクにかゝつたのだらう。二十分程で佐世保に到着。

通りは、辨當箱を抱えて忙しく流れ行く、無数の詰襟にハンチングの工場労働者で忽ち一杯に成つて行く——あの工廠特有の朝のパノラマだ。驛のすぐ向ふは軍港だ。城砦の様にどつしりと影を落した軍艦。淺瀬の背に見られる潜水艦。油に染つた海は、餘程深いらしく、向ふは高い山が視界を遮つてゐる。直ぐ八幡様に参拜。

軍事都市！佐世保の街は、海軍御用の四字の看板に裝飾されて居る。立派な花崗岩の石段を登つて恐ろしく廣い境内に出た。右手の高臺に校舎が見える、境内では若い男や女の先生方が、幾組もの子供と一しよに體操をしてゐた。仲々勇敢と言ふ事を聞かない。僕等は隔世の感があつた。町の方に向いた戦利品の大砲が二つ、朝の太

かと言つたが、實際僕達は泳ぎたかつた。再び水面は天氣雲を映して、夏の強い日輪はじり／＼と迫つた。再び衛門を潜る時には、額の汗は應接に閉が無かつた。埃道を通つて上陸場へ………。燐寸箱の様な汽關車が生意氣に大きい貨車を引きすつて居た。白服の水兵さんが一人、暑さうに運轉して居た。道の突當りが立派な石製の上陸場だ。大きい鐵製のブリッジが浮船に渡してある。海上は油を流した様に眞夏の太陽をざら／＼と反射して赤いブイがぬたり／＼と泳いでゐた。

疲れた兩脚を冷い石壁の上に投げ出して寝ころんだが何時か氣持良く寢込んでゐた。「おい／＼」と田中の聲にはつとして起きた。今から又歩くのかと思ふと、疲れた隻脚が出来得るならば離して行きたい氣がした。

左側に進む。漏斗形煙突の軌道車が、腹を立てた様にかた／＼と動いてゐた。皆は疲れた體に食鹽注射をした様に自然と列を正した。右手に豫備の巨大な砲身が、鼠色に熱い焼け付く様な反射熱を發散してゐる中を、あくびをかみ殺しながら、軍艦陸奥見學に向つた。

大きい黒ずんだ工廠からは、今朝見た人々の、御國の

爲に熱い息苦しい工場の中で、振り下す鐵槌の響が、カ
ン／＼と、勢よく廻轉してゐる機械の響と交錯して午後
近い邊に響がつて行く。しゆつと何か大きい音に驚ろい
た時、大きい起重機の下に、今見る御國の礎——陸奥の
大きい船體が、優しい笑を持って迎へた。おゝ!! 我等が
誇る戦艦陸奥よ。大きいブラシと水とで埃と砂で化粧さ
れた固靴を洗つた。無意識に壊れる様に坐らうとする兩
脚をふみしめて案内される。水兵さん何時も良く案内す
ると見えて飲み込んでゐる。副砲の側を通ると「これが
副砲、全部で廿門、直徑十四糎」と至つて明朗だ。「八
糎高射砲、全部で四門」の後、巨大なる主砲だ。直ぐ説
明する「本艦の主砲、口徑四十糎、前後兩甲板全部で八
門、發射距離三萬米で發射装置は全部電氣仕掛」と。

巨大な砲口は何處を向く! 煙突上面には疊が十八枚
敷けると言ふ。嘘の様な本當の話に聲に出ない驚きを感じ
乍ら説明に耳を傾けた。息苦しい下室を見學して睡
眠不足の體は水母の様に弱つた。士官室の寒暖計は九十
七度を指してゐた。案内を終つて「助かつた」と壊れる
様に横になつた。強い午後太陽を遮切つた白いテント

端近くに汗まびれな雜囊、水筒、ゲートルを投げ出した。
汗を拭ふ間も無く再び埃だらけの固靴を足にして、褐色
の小さな電車で船詰めになつた。餘り感心し無い街が流
れ去る、何處も機關庫見たいに黒いと言ふのが僕の第一
印象だつた。ほつとして船詰めの車中を脱した。異國風
の光景——英字看板がパツと瞳孔の中に寫つた。やはり旅
行は見聞を廣くすると感じ乍ら、勾配の強い坂道を登る。
門札は日本語、ローマ字の共書だ。やはり長崎だなど一
寸外國に居る様に感じた。クリストの十字を切つた尖塔
が如何にも天への憧憬を示す如く夏空にくつきりと浮ん
だ。色の白い女の様な男が、先着の者に説明をしてゐた。
遠くからは大理石の様に思つてゐたマリヤの像を「銅に
ペンキを塗つたのだ」と一心に検査してゐた松井さんが
證明された。固靴を脱いで嚴肅な布教場には入つた。あ
ゝ!! まあ!! 素敵!! と所有感歎詞を吐き出させる美が射る
様に視神經を興奮させた。それは、太陽光線をスペクト
ル分光器で白壁に映し出した様な鮮かな、到底人工とは思
はれない純な色彩を持つ、ステンドグラスの裝飾繪だ
つた。僕等は失神した様にクリストの最後——十字架上の

の下で、心持ち冷い甲板の溫度に直ぐ眼の緩るのを覺え
た。白河夜舟三十分の後、寢の足らぬ赤い眼をこすつて
後甲板で松井さんの體操學校きたへの號令で、「頭左!
なほれ! 坐れ」と艦長和田大佐に面接した。氏は萩中の
卒業生で非常に喜ばれて、三十分許り、當代青年の意氣
の衰退と國難を訓戒された。太陽熱に熱した海風が上
氣した僕の頬をなでた。「時間も無い事だから、當艦の
ランチで驛の近所までお送りしませう」と言はれた時の
ほつとした事思ふべしです。ザーと緑波をけつて驛へ:
……がた／＼と機關の音はとても上等な睡眠促進劑
だつた。七八人がもうこくり／＼初めた。時間が無いと
言ふので驛に走つた。汽車に乗り込んで、自分の體とな
つた思ひではつとした。ギョと車輪の軋る音、一瞥の佐
世保に「さらば」をしたのは零時過ぎだつた。

日盛りの絶頂頃長崎線の汽車に乗り込んでゐた。窓外
を流れ去る風景は、大村灣の泥海と夏密柑の島だつた。
列車は隧道から隧道へと暮に進む一路!! 史都長崎目ざ
して……三時五分、車輪が突然軋る、長崎に着い
たのだ。直ぐ驛前の宿に駈込んだ、僕は小倉等と二階の

姿を映した硝子繪に見された。水沼先生だと早速「美的
だねー」と飽かず見られる美だつた。「美しい」と最
後の賞讃を残して、狭く長い机の有る禮拜堂を背にした。
嚙緊むる様に眼底にちらつく鮮色を味つて居る中に何時
か乗車場に置いて居た。船詰の電車は進む……
乗替で電車を捨て、徒歩だ。珍らしく電車に乗つた皆の
心は陽氣だつた、そして苦情も無く疲れた脚を動かした
行儀の悪い行路樹が、一寸美しい通りの真中にのさばつ
て居る。暗く狭い這上りの路を出ると、珍型の赤い山門
が眼前に現はれた。——名高い崇福寺の山門だ。

支那風の丁度龍宮の門の様だ。小さい石段を登つて、
がらんとした、支那風の濃い境内には、珍型の建物や國
寶國寶の札を掛けてゐる。怪し氣な赤い大きな提灯が、
ゆら／＼と氣味悪く動揺してゐる。「おい／＼大きい釜
だなあ」と頓狂な聲に駈け附けると、成程でかい釜があ
る。立札に「天和二年海内饑饉長崎亦大に饑ゆ是に於て
當寺第二世千呆禪師一山の僧衆を率ひ行乞をなし粥を炊
て饑民を救濟せる一大記念の大釜なり一時に四石二斗の
粥を煮る事を得」と殊勝氣に書き立て、ある。本殿を覗

き込むと明朝の印官苑道生が刻んだと言ふ怖ろしい仁王様や達磨様の姿が淡暗い光線の中に、今にも歩き相だ。皆に後れて山口先生と水津と三人で赤門を潜つた時には早、太陽は力無く夕色を帯びてゐた。疲労し切つた五體を電車に委ねて五時半頃驛前で下車。宿の二階も三階。皆の水洗ひしたシャツが鈴成りに掛つて居る——二日間の汗の着いて居た物だ。室に歸つて長く——心行く迄背伸びした。焼飯を掻込んで友達とキネマに慕進した。歸途路を迷つてやつこの事で宿に辿り着いて、懐れる様に五體を投出した。手摺の彼方に、丸い月が……。

——長崎の山に出る月のよか、こんげん月はるつと無かばいと——詠んだのは蜀山人だと思ひながら、夢の國に引摺り込まれた。

七月廿三日 土曜日(晴)吏都長崎に別れ仙境雲仙へ。冷氣を感じて眼を覺すと、下宿の二階に非ずして異國長崎の旅館の廊下に寝て居る。冷かつたのも無理はない、廊下の上だ。加之長崎の海は鼻の充た。田中のぐつすり寝て居る中に潜り込んで再び寝入つてしまつた。自動車にしてはリズムの高い響に眼が覺めると、旅館の天井が

ば出づる軍艦入る蒸汽、ドンコがとりもつ縁かない——と異國情緒の漂ふ古い港町よさらば!! 絶え間ない車輪と共に、雲仙征服の宿望も漸次實現へと進みつゝあるのだ。勃然と口を上つた一語!! 「ミスターウンゼン!!」

豫定を變更して愛野村から十一臺の自動車に分乗した。「どうか君は前の助手席に……」と巨大な柔道マン後藤君は運轉手の取計ひで助手席に落着いた。客席に頭張ると一人前以上を占領してどうも狭い。大分後藤君疲れて柔道の時の元氣は無い。實際僕達は二時間の動搖に弱つてゐた。廣い國道に車が掛つた時には、雲仙の頂は雲の中に隠れて居たが、僕はその男性的な端姿を恍惚として仰視した。スピードメーターは三十哩を突破して、心地よいクツションの動搖を感じ乍ら一路!! 頂へ——!!

前の後藤君は大きい頭をこくり——と氣持の良い睡眠を續けて居る。詩的な千々石浦に掛つた時、前の車から軽いシャッターの音が聞えた。詩的風景——白浪、緑松、漁船、實際仙境だ。カーブからカーブへと車は登る。弱敗した卵の様ないやな臭氣を感じた。その臭氣の強くなつた頃今夜の宿——絹笠旅館に辿り着いた。少頃後直ぐ

眼に寫つた。下は電車が走つて居る。水津を揺り起こし女中に路を聞いて靜かな朝の街道を、から——と下駄の音高く諏訪神社目指した。途中で眠むた相なあつばつばあの女に道を尋ねたが早口で解らなかつた。石疊——長崎の路は全部石疊だ、如何な大雨が降つても大丈夫だ——に下駄は心地よい響を發す。櫻の並木に、モダンな長崎商工獎勵館の建物、それが諏訪様の入口だ。外人好みの勝つた公園から市街を見渡すと、長崎の海と葦が靜かに眸中に納まる。實に長崎展望の勝地だ。國幣中社諏訪神社の神殿に旅の幸を祈つて、英文御籤の締切紙をにくらしく眺めて、起床時間に間が無いので電車に飛び乗つた。道具の整理を終へた處に、頼んで英文御籤を引かれた山口先生達が歸られた。急いで事を失敗する!

ぎ——と汽車が吏都長崎を後にした。時に午前九時。長崎は直ぐ外國を連想させる歴史の都だ。三百年鎖國の際に獨り泰西文化を吸入して燦然たる華を咲かせた、文明の光の入る窓だつた、のだが……僕等の見た長崎は、衰運した長崎だつた。名高いカステラも高價で口に這入らなかつた。——夏の涼みは公園に、鶴の港を眺むれ

登山だ。固靴とシャツ一枚の輕装。厭が上にもステップは舞ひ狂つた。緑のカーペットを敷き詰めた様な、東洋一を誇るゴルフ場の芝を踏みにちり乍ら慕進す。ゴルフ場には人つ子一人も居なかつた、尤も空には一時過ぎの熱した太陽が一つ悠々として輝いて居た。寫眞屋は職業意識を發揮して重たい寫眞機を擔いで御苦勞にも先頭に立つて登つて行く。最初の休憩所邊で十數名の小學生に出會つた。健脚の連中は早く頂の空氣を味ふべく馬力を掛けた。三四人の女がはあ——と言ひながら降りて來た。鼻の先が赤く日焼けして、可愛相に白粉の剥げた斑な顔に流れ出る汗を拭き——下る。洋服は豪無しで、香水の香だけがつんと鼻を突く。邊は一面の躑躅で、五月にはどんなに美的だらうと思ひ乍ら進む。前にシャツを脱いでしまつた楊井や三浦の日に焼けた脊に油汗がにちみ出て、太陽の直射にさら——と輝いて原始的だ。僕は久保先生と二人殿を進む。少時すると後藤君が弱つてベンチに腰掛けて流れる汗を拭き乍ら「おれはよう登らん」と度胸を据ゑて居た。植林の跡を鮮にしたピラミット型の野嶽や絹笠山はすつと下方に展開し、夏の入道雲が黒い

影を山肌に落して居る。太い防火線がはつきりと見える。さつき通つて来た路が白く山腹を縫つて居る。少時すると頭上は密林に覆はれて、淡い緑色の光線が木の間に漏れて濕つた地上に幾つもの斑點を映して、ちり／＼する太陽の直射を逃れる事が出来た。這ふ様にして最高の休憩所に辿り着いた。亞鉛張りの倉（賣品を藏す設備）の扉に「霧の森俺の住居を見てください」と一紅葉茶屋あと四町の憩ひ哉の二首が墨黒々と書いてあつた。渴を我慢して居た咽喉が急に行儀悪く唸り出した。ラムネは最低の賣店から五錢、七錢、九錢と算術級數的に増加して十三錢だ。梅干ばあさんは相變らずにや／＼と氣味悪い笑を漏らし乍ら、飲まんにやなりますまいと言はん許りに「學生さんですから割引きして十一錢にしませう」と奨める。咽の方はぐ／＼の連發だ。仕方無く水を一杯、二杯、三杯、四杯、五杯と息もつがずに飲んだ。水をコップ一杯三錢（但し五錢の割引です）合計十五錢!!!今始めて水の有難さ、價值がしみ／＼と解つた。寫眞屋は氣の毒に水も飲まずに汗を拭き／＼休んで居る。あと四丁!!と馬力を掛けて頂目ざした。やつ!!と氣合を掛け

き山路を下る。外人が二人ゴルフをしてゐた。白い球が夕近い空にぐんと伸びて飛んで行く。緑色のカーベットの様な芝を踏み乍ら放心した様に宿へと疲れた歩を運んだ。食後、登山杖を引下げてぶらりと淋しい街へ出た。若い夫婦が幾組も腕を組んで大道を勇敢に、平氣に潤歩してゐる。日本の風習を標準にして比較すると、可笑しく感じた。肥つたワイフと瘦せたハズとが潤歩して来た。べら／＼言つて居るが七分通は解ら無い。一寸いきな小間物店を覗くと、額と頭の境界の判然としない小父さんが美くしい外國婦人を相手に何か言つて居る。恐ろしく度胸のいゝ小父さんだ——英語と日本語を併用して話して居る、あれでも通ずるから偉いもんだ。「所變れば品變る」總てが外人向きた。何十人も外人が異國の寒村に涼んで居る。一寸外國に居る様な感だ。今夜は山の寒村で何にも無く、高山の夜の空氣は寒い程身に迫る。黄色い温景に入つて、疲れた五體を休めた。皆が寒いと云ふので硝子戸を入れて、何時か登山の疲れで安らかに寝入つて行つた。

七月廿四日 日曜日（晴）雲仙を後に森都熊本へ。

て、島原半島に聳ゆる世界的？公園雲仙岳の最高峰——普賢岳を征服したのだ。僕等の胸は征服感の爲風船の様に脹んだ。海拔四千四百尺の高峰で深呼吸を三つした。頂は猫の額の様に狭く椅子が一つ。椅子にも木にも石にも記念の字句が、うちや／＼する程書かれてあつた。

……晴天の日には、阿蘇、九重、霧島、有明海、千々石灘、八代海、天草諸島……等が指顧の中に收められて、天に沖して立ち造化と暝合するの感に打たれる此の大展望美は雲仙の頂のみが持つ生命だが、惜い哉、下界はミルク色に見えなかつた。曇つた所爲も有つたが僕達は既に雲上の人となつて居たのだ。妙見岳は鼻の先に白雲をバックに鮮に山肌を見せて居る。山口先生、松井さんと三人、天然氷の有ると言ふ鳩穴に向つて下山した。次第に冷氣を覺える頃、大きい黒い口を開いた洞窟がある、それが鳩穴だ。周圍皆氷の體の縮む様な穴に入つて綺麗な小片を口にして、冷氣に堪へかねて這ひ出た眼鏡がぼ／＼と曇る。冬から……夏への温度中を這ひ出たのだ。大きい風穴が幾つも白い蒸氣を吐いて居る。夕暮が迫つたので、甕の様な恰好をして、ひぐらしの聲高

東空が茜さす頃、厚い被浦團をしつかりと被つて、冬の様な朝の冷氣に反抗してゐる自己を雲仙の宿に發見した。軽い朝食を終へて、白煙立ち登る地獄をバックに記念寫眞をとつた。午前十時淡いガソリンの爆音を殘してエンジンの音も軽ろく、十一臺の自動車は山を廻り／＼麓町島原へと向つた。スピードメーターが四十哩を指す。四十五、五十……とミスターウンゼンを後にスピードアップした。一時間許りの動搖を終へ、道幅の狭い島原の町に隊伍を整へた。皆は雲仙で買つた木刀をがら／＼と引きずつて行く。野犬が七八匹、犬殺しと間違へたのか吠え附いて来た。右手に實驗室のガスタンクの相似形の大きいのが怪物見たいに聳えてゐる。田舎風の町を通つて城址に出た。二十六萬石有馬貴純の居城で東は有明海に接し、西は一帶の泥田で満潮毎に自然の濠をなす、天險要塞を誇つた屈曲多き城壁も今日は夏草に覆れて、草壁を成して居る。寛永十四年、島原の亂に天草四郎時貞三萬餘衆を率ゐて確守したのだが、志成らず（血潮は流れて河を成し屍は積りて山を成す）と幕府の銳鋒に力盡きて火焰は有明の海に映じて天を焦す許りに落城したのだ。

心中で朝露と果てた三萬餘衆に合祈しながら、木影も無く、ちり／＼する太陽光線の亂反射する中を船着場へと急いだ。甲板の上に横たわつて折詰辯當に箸を附けた。ぼーっと牛の吼える様な鳴笛を残しつつ、油の様に静かな海の上を、三角に向つて走つて行つた。雄大な雲仙の姿は悠然と微笑んで一切の物象を見下してゐる。空には雲無く鳥影なく日輪一つ只悠々として大虚を渡る。腹の肥つた僕等は睡眠促進劑の様な機關の響に、疲れた眼蓋は何時か下りて居た。「おい／＼」と水津の聲に夢破ぶられた。眠い眼に、漁船が白い帆を腹一杯に脹らしてついで／＼と走る、あの女性的な光景が映つた。ごもりと船は棧橋にだき附いた。もう三角だ。狭い階段を下りて再び焼け附く様な日光の洗禮に會つた。熊本行きの列車に乗り込んだのは二時近かつた。車中にはもう陽氣な修學旅行獨得の雰圍氣を醸し出す一校歌が高らかに響く。一時間の動搖を了へ汽車は熊本驛に滑り込んだ。

木刀一つの輕装で電車に詰められて、クロス點で電車を離れ都會地らしい雰圍氣の中を進む。櫻並木を滑つて嚴しい第六師團司令部の表札を見ながら、三名城の一

熊本城へと大粒の砂利をザク／＼と踏んでゐた。固靴を脱いで宇土櫓を見學する。貴重な歴史參考品を參觀し乍ら、急な階段を三つ程登ると其處がもう上層だ。

汗ばんだ體を微風に晒し乍ら心行く許り森の都に見入つた。第一天守閣の跡一六師團司令部前の廣場では、クーラーと傳書鳩の聲とぼつねんと設けられた古大砲を發見した。其處で案内者の順序立つた清正公の築城術を聞き一同電車に委ねて水前寺成趣園に向つた。

一步公園に入ると清い!! と言ふ感が電氣の様に目を射た。隨所に滾々として湧く清い池の水、縋ひ泳ぐ緋鯉眞鯉、ピロードの様な緑の芝、總てが人工とは思はれ無い純日本式大庭園だ。白熊、白蛇、獅子等赤道の兩翼の猛者連中の顔が見られる動物園は自由に見廻つた。背中に夕光を一杯に感ずる頃、今夜の宿一司旅館へと急いだ。「おい早くかたづけよ」と田中の急がすのをゆう／＼とラスト迄頑張つて四人連れで都會の夜の空氣を味ふべく流れ出た。街から街へと虹が流れて夜の都は全く一大不夜城である。ネオン、サインの亂れ飛び交ふ處に、ジャズレコードの響く處に、人道一面に夜都の大氣は凛然と

流れ行く。

今夜又夏と蚊——あの八釜敷く憎らしい蚊の存在を知つて戦慄を覺えた。何時か小倉の寢息に釣られて熊本の空の下に寝て行つた。

七月廿五日 月曜日(晴)九州の首都福岡への行進曲

「おい起きんかー」と通信係小河君のでかい聲に甘い旅宿の夢は破られた。明け易い夏の曉は氣持良く新鮮に明け放なれた。熱い朝飯を掻込んで本妙寺指して朝の街をステップ軽く舞つて行く。心地よい七月朝の日射しが、アスファルトとポプラの廣い葉の上を滑つて居る……。満員の電車が喧しい警笛をならして頻繁に通る。この成り連中も森の都の一縮圖だ——何處も住居とばかりに巢を郊外に食つて夜の明けるのを合圖に這ひ出るらしい。鈴實りの電車の數に郊外生活の繁昌を卜し乍ら、幾つもの塔中と櫻並木の間を進んで行く。

「えらいの、未だかま」と下を見詰め乍ら、長い石段を上る皆の鼓動は高くなつて居た——熱度を増した太陽はもう背後からちり／＼と追ひ立てるのだから。

「来た／＼」と油汗を拭ひ乍ら、淨池廟の額の掛つた、

白い巨人コンクリートの大鳥居を睥つた。

遠く聞えて居た讀經の聲が急に強く響いて来る。田中が「おい／＼あの女あすこいの」と先刻から氣狂ひの様に(南無妙法蓮華經)を連發してゐる廿六、七歳の女を指した。聲も體も奇抜な強い高低を現して、あれでは清正公も八釜敷いだらうと、彼女の甲高い讀經の聲を耳にし乍ら、良く肥えた若い小父さんの説明を聞く。餅は餅屋で實に雄辯だ。社殿は五色で塗り立てられた立派な朝鮮風の建物で、如何にも英雄の趣味らしい。社殿の横に朝鮮風の墓がくすぶつて在る。彼が朝鮮征伐の際幕ひ附いて来た鮮人金官(會計役名)の菩提だ。彼の死後、鮮人の心として殊勝にも——主の後を——追つて異國の土と果てたのだ。右手には同じく殉死者——大木土佐守の姿が、立派な墓石に淋しく大木土佐守藤原兼能墓と……。

(君々たれば臣々たり)と英靈に合唱する。裏には、一丈程の自然石の墓石に——故肥後守從四位藤原朝臣清正墓——と一代を鳴らした鬼將軍の淋しい姿だ。如何にも英雄の奥津城らしく哀を催した。未だ先刻の氣狂ちみたフアナテイック(熱狂信者)は一心不亂、お題目の聲は晴れ

渡つた大氣に伸びて行く。線香の無味な香を後に感じ乍ら石段を下る。レブラ患者の存在を豫期して來たのだが

皆郊外の家舎に收容した相で何だか満足出來なかつた。只四五人の怪し氣な乞食が、垢で覆れた細い手を、如何にも哀を催はさせる様に投げ出す氣味悪い光景が映つた。だけだつた。遙か熊本の空は埃で淡灰色に曇つてゐる。あの澄み切つた秋の青空を想ひ出して自然に惠まれた自己を感じた。九時近く細川氏五十四萬石の御城下町―熊本を後に、上熊本驛より一路!!二日市へと窮屈な車上の人と成つた。二時間半許りの倦怠を覺えた頃鳥栖で乗替へて、〇時十三分―二日市の焼け附く様な簡単なフォームに降り立つた。直ぐ大型の青バスに吸ひ込まれて、名所―大宰府へと走つた。心地よい筑紫平野の微風を感じ乍ら、三十分後大きい幾つもの鳥居立ち列む大宰府に着いて居た。油汗を拭き乍ら廣い立派な参拜道を進む。「坊ちゃんお冷い水があります、どうぞお入り下さい〜」〔繪ハガキはどうぞですか〕と實にうるさく、喧鬧に壓氣を催す。素敵に急な反り橋をあえぎ〜渡る。下には餘り美しくも無い池中に、緋鯉が（小父さんあの魅を

五錢で買つて、まいて下さいよ）と言ひたげに附いて來る。大きい樟の影は池にぼやつと映じて居る。

反橋を二つ渡るともう、壯嚴な天満の樓門が日光直射の中にならんと建つてゐる。靜に拜す。右側には柵を廻らした。菅公遺愛の飛梅が主の神前に千古の面影を留めて居る。邊には、あらゆる氣紛れな形をした梅が、靜かに寝て居る。「東風吹かば香起せよ梅の花、主なしとて春を忘るな」と現在でも主なき浮世に淋し氣に、古そのまゝの芳香を放つ事だらうと思ひ乍ら、日光の直射に堪え切れず再び反橋を渡つて、土産物の賣店に入つたのだか、呼び込まれたのだからしてしまつた。

「坊ちゃん、お父様にどうですか？二倍は入りますよ」と瓢箪形の蓋を自慢相に見せた。僕は繪はがきを一つ買つて逃れ出た。むつとする様な自動車の中に詰め込まれて歸途に着いた。涼風が心地よく疲れた眼を休めた。日盛りの二時四十分頃には、今夜の宿―博多へと向つてゐた。

官幣中社大宰府神社は、新しくつた所爲か、強い太陽の所爲か（清爽身に迫つて、神威自ら崇高を覺ゆ）とか

言ふ、神社獨得の心境は感じられなかつた。

車は……廣漠たる筑紫の原を疾走して居る。車中には疲勞の空氣が漂つて居る。何分暑い時の事だ―水銀は狂つた様に這昇る。立賣りの「氷ター―アイスクリーム〜」の聲が不思議な強い引力を持つ時節だ。林立せる煙突の見られ出す頃、「博多〜」と列車は喘ぐ様に大きい構内に滑り込んだ。自動車、電車が、走る。ベルが叫ぶ。疲れた頭は、阿修羅の巷―都會の感をびんご感じた。直ぐ驛前の高島屋旅館に走り込んだ。

甘疊近くの廣い間に、汗まみれな旅装を解いて、休む間も無く電車で詰められて荒津山頭―西公園に向つた。偉大なる建物が次々ゴノラマの様に展開する。學生が歩調速く歩いてゐる、成程學生の多い町だ―と思ひ當る。電車の苦しみを逃れて十間道路を進む。汗まみれな兵隊さんに微笑を送つて、三〇度傾斜ぐらひのアスファルト道に行く。肥えた人が苦情を言ひ相な高い處に、舊藩主黒田考高、長政を祀る光雲神社がある。殿様に頓着する連中で無いから一寸默禮をしたゞけで英文御籤を引いた。グッド、ラック!!!

直ぐ、松林の間を走つて福岡、博多灣を一望の中に納め得る公園の一角のベンチに走つた、海上を這つて松の梢を傳る微風は、心持ち上氣して汗ばんだ肌を包んだ。此處が大都會の一隅か？と展望の勝地を疑つた。

シューツ〜とサイダを抜く氣持良い響が頻繁に、だつた廣い公園一帯に擴がつて行く。直ぐ下は、ぶ〜ぶ〜と船の警笛の聞ゆる福岡灣だ。青葉の間から帝大、縣廳と東公園……等が、夕近い日にいぶし銀の様に輝いて眺める。眼下の廣い國際飛行場の格納庫の亞鉛屋根が、強く兩眼を射る。「高い處ぢやけん、眺望がよござすばい」とサイダ屋のばあさん氣嫌が良かった。乗車。

福岡城跡の城壁は苔蒸して、石垣に僅か昔日の繁昌を留めて、濠には大きい蓮の葉が、白い葉裏を覗かせてゆら〜と夕風にそよいでゐる。アスファルト道は長靴短靴、下駄―あらゆる階級の人の靴のオンパレード!!直ぐ立派な化粧煉瓦の浴場に飛び込んだ。毎日の事なので僕は、風呂場の凝り方に依つて宿屋の格式を判定する様になつた。（博多が一、熊本が二……）と思ふ内に、茹玉子に成り相なので急いで上つた。立派な夕食を

した、めて、驛前で中年のキツブ賣りの女から乗車券を買つてキネマに向つた。都會にあつ氣無くほうり出された田舎者達は、幾度も迷ひ兒になりそこねて映寫館の扉を滑つた。はねてから夜氣に冷え始めた夜路を急いだ。途中、あれも良い、これも良いと迷つた末博多人形を買つた。澄んだ星が一つ、群星の中から光を強めた。

蒲團を引被つて、狸寝入りをする間も無く寝入つた。旅館の夢の慕は次第に明け行くのだ。

七月廿六日 火曜日(晴) 憧憬の樂しき旅の最終コースを迎える。僕等は寢附きの良い程度に起床も早い。五時半頃から、すつとんばつたんと荷物の整理に餘念が無い。食後すぐ電車に身を委ねて東公園に向つた。明け易い朝は澄み切つて白雲一つ無く、皆の氣嫌も三國一だつた。大分皆の手にも土産の數が増した。廣い道をのこくと黒ずんだ龜山上皇の像を拜した。身を以て國難に代らんと祈られた憂國の御心を想ひ、感激して心から默禮した。敵國降伏の銅板を後にして、疎らな松の間を巡つて、日蓮上人の像に參詣した。立正安國の四字を銅板に刻して澄み渡つた福岡の空に儼然として聳えてゐる。頭がくり

く、なので大きい坊ちゃんの様だ。像は無邪氣な鳩と眼無き線香の香と、八釜敷い御題目の聲に包まれて居る。附近は千代の松原、松の梢に渡る風音に昔日の思ひに耽る。潮風にもまれる爲か、松はあらゆる氣紛れな形をして居る。箱崎八幡は目と鼻の間だつた。

八抱えも十抱えも有り相な大きい鐵筋コンクリトの鳥居が社前の砂中に巨人の様に、馬鹿の様に聳え立つてゐる。邊りには千年の風雨に打たれた大きい磯馴松が弓を引き絞つた様な強靱な力を持つて反つたまゝ、見渡す限りの濱邊に並んでゐる。此の一帶は元寇の舊跡で持ち切つてゐる。多々良の濱から此の海岸沿ひは古戦場であつたらうと思ひ乍ら、遙かにざら／＼光る海上に見入つた。(あの海上で二百十日の颯風即ち神風を食つて十萬餘騎の敵も溜らず死んだのだな、それにしても生存者が唯三人とはひどい死亡率だ)と思ひ乍ら神社の方にひき返して、眞心から參拜した。古い元寇時を目撃したであらう老松が、神々しく聳えてゐる。「忝け無さに涙こぼるゝ」と言ふ事は、此の様な千古の神松から受ける催眠術的暗示だらう。現世の平和を謳歌する様に、多くの鳩がばた

／＼と可愛らしい。時間が無いと言ふので社後の箱崎驛へと急いだ。八幡様と言ひ龜山上皇と言ひ、此處に来ると何やら遠い元寇の昔を偲んで、もつと歴史に精しいと面白いだらうと思つた。箱崎驛から蒸し暑い汽車に吸ひ込まれたのは八時廿分頃だつた。多分な心残りを感ぜ乍ら、廣い福岡を半日で見きわめようとするのは、少しおしが大いなど思つた。三十分程の動搖を續けた頃、福岡にと下車した。直ぐ銀バスに鮎詰めと成り、韋駄天足りに宮地嶽明神へと進んだ。ひつそり閑とした參道に登るマ、立派な白木製の社殿が綠色の山と、青空をバックに靜かに覗かれた。總ての器物が寄進ばかりだ。

大きい開運鉾が晝近い太陽に反射して銀色にざら／＼と輝いて居る。丸味を帯びた銅板張りの屋根を滑つて、簡単に、慾の皮の張つた開運を祈つた。眞向ひの淡暗い中にざら／＼と神鏡が光る。餘り太陽がちり／＼するので「やれん」と休憩所に引返した。コト／＼と怪し氣な客車を馬が喘ぎ／＼引いて居る。前世紀の遺物！鐵道馬車だ。十九世紀の音をカタ／＼と立てゝゐる。實に悠長なものだ。驛には馬糞があちこちと散在して、蠅が

うちやく／＼と集つて居る。驛員は一人一間の抜けた様な男は鈴を片手に白河夜舟。何も十九世紀の風景圖だ。點呼を終つて驛にごスピードアップした。

十時五十七分!!福岡の驛を後に、一路!!!萩へ〜と最終のコースを走つた。空が曇つた頃にはもう、北九州の大工業地帯を走つて居た。煙突々々の森林續きた。これは空の曇るのも無理は無いと感じた。

「惜しいな、此んな處でもぞん／＼行つてしまふのだもの」と窓外を流れ去る光景に見された。「何!!あの空を見、萩の方が餘程恵まれて居る、史蹟にしても、町は田町があるし……」と水津が悪口を言つた。見たいのに素通りする處は何かと難癖が附けたく、何でも輕視しないと氣が済まないのだ。「此處もきたないなあ」と八幡も飛沫を受けた。その口の下から「實際盛んななあ!」と感歎の聲をもらす。大小の數限りない煙突々々々々々の連続だ。

眞晝、門司に辿り着き、直ぐ待つてゐる連絡船に吸ひ込まれた。ゴト／＼と船は直ぐ出き出した。「もうすんだのか……?」と思へば長く短い六日だつた。何

だか寂寞の悲哀を感じる。――歡樂の後の悲哀だった。

玉江驛を廿一日の二時出發した時の、あの甘たるくも
楽しい雰圍氣は微塵もなく、空虚な雰圍氣に皆の心は淋
しかった。「もうすんだのかえ」と田中も感慨無量らし
い。實にいやな氣持だ。皆の兩眼はきよとんと旅の疲で
見開ちかれて居る。六日の日も早過ぎたのだ。

(お前には偉大な收獲だったなあ)と僕の心の、聲無
き聲が私語いた。皆の健康と晴天に恵まれていやな思ひ
もせず旅を終へる事を神に謝した。

廿六日―零時三十五分―「長き旅―樂しき憧憬の旅」を
終へた萩中四年修學旅行團の七十九名は、光線が複雑に
交錯して構成派の舞臺面の様な、下の關に元氣よき力強
い萩への一足を踏み緊めた。手拭で靴を二つ纏いで振分
けの様に擔いだ赤帽達が、群集を分けて左往右往する。
靴と下駄の音が揺れ昇つてあわたしい旅行の香ひがし
て、旅!!旅々と言ふ感覺を振播いてゐる。下關驛待合所
の擴聲機の様にも物音のこもるトンネルの通路を通つて、
發車ホームに登つた。厚狭行き汽車がホームとすれす
れに競争犬の様にスマートな黒い瘡せた逞ましい機械的

な構成美を見せて、發車時刻を待つてゐる。

僕は皆に離れて下の關のWAY・OUTを滑つた。
旅の悲哀の後は直ぐ、甘たるい歸省の喜びが溢れて來た。
――さうだ!!明日は釜山の棧橋が見られるのだ。母の顔、
父の顔、弟の顔々々が浮ぶ。他の連中は厚狭行きの汽車
に吸ひ込まれたらう。強く、遠ざかる汽笛が一つ!!ビ
――村岡、久保、山口三先生の親な慈悲と親切とに
包まれ、暑い夏の勇者――車船の操者と無神経な車船に
も限り無き感謝を捧げ乍ら旅を終へた恵まれた自己をう
らやんだ。長崎天主堂の鮮かなガラスの色と、水前寺の
オシアスト人工園と福岡の近代文化の表象―建築とが交
錯して幻の様に頭腦をかすめる。

もう一度「樂しき旅は終つたのだ」と心に言つた。
萩に向つた友はどうだらうか? やはり僕と同じ寂寞を
感じ乍ら、美禰線をひた走りに走つてゐる車席に各自の
心と問答して居る事だらう。



校 報

第三十二回卒業式

昭和七年三月三日午前十時より第卅二
回卒業式を講堂に於て舉行す。生徒父兄
及保證人並に來賓多數の着席あり。河内
校長舉式の辭に次ぎ勅語奉讀あり。次に
卒業證書及び賞品授與ありて學校長の告
辭、來賓を代表して藤田中將の祝辭、父
兄保證人を代表して平瀬少將の挨拶あり
午前十一時に終了す。當日卒業生にして
受賞せる者左の如し。

一、學力俊秀にして能く校則を守り平素
勤勉にして皆勤五箇年に及び且伍長と
なりて能く其の任務を盡したる者
岡本 益亮

- 一、平素勤勉にして能く校則を守り學刀
俊秀にして伍長となりては能く其の任
務を盡したる者
小橋一男 吉田榮一 芳野泰禮
天野元興
- 一、平素勤勉にして能く校則を守り精勤
五箇年に及び伍長となりて能く其の任
務を盡したる者
中村 松枝
- 一、平素勤勉にして能く校則を守り皆勤
五箇年に及べる者
林 正二
- 一、平素勤勉にして能く校則を守り精勤
五箇年に及べる者
中井道永 小倉英一
- 一、平素勤勉にして能く校則を守り伍長
となりて能く其の任務を盡したる者
近藤信一 山崎正義 頓野幸夫
河野希一
- 一、本學年間伍長(室長)となりて能く其
の任務を盡したる者
瀬畑良作 岡藤宗次 渡邊觀吾
田邊滿希 河村一夫 大山慶太郎
岡藤徳太郎 筒井 深 土方三郎

- (室長)
- 一、本學年間皆(精)勤せし者
仁保文雄 田中猛夫 波多野九
藤井太郎 河村 清 井上國雄
松浦精男 鹽田惣一 大谷敬信
(以上皆勤)
- 松浦利二 山本誠次 景山九一
(以上精勤)
- 一、卒業の際五席以上にして同窓會より
奨學賞を受けし者
岡本益亮 吉田榮一 芳野泰禮
小橋一男 天野元興
- 賞品授與式
四月八日、新學年の始業式後、前學年
度に於ける第四學年以下の生徒に對し賞
品賞狀授與式行はれたり。
- 一、特等賞(平素勤勉にして能く校則を
守り學刀俊秀にして伍長となりて能く
其の任務を盡したる者)
四年 木藤正典 中村晋作
三年 小方 司 長谷和夫 河野通弘
二年 新谷寺治 西本 實 山下誠一
栗田常雄

一年 杉原大泰 安野 藤 貞本 尙
一、一等賞(學力俊秀にして能く校則を守り伍長となりて能く其の任務を盡したる者)
四年 田坂興道 横山雅輔 玉井友世
三年 辻野三郎 林 幸男
二年 松尾美男
一年 石村豊徳 河村定一

一、一等賞(平素勤勉にして能く校則を守り伍長兼室長となりて能く其の任務を盡したる者)
四年 兼田喜興
一、二等賞(平素勤勉にして能く校則を守り伍長となりて能く其の任務を盡したる者)
四年 堀 政一 中原五郎 金子治平
三年 佐伯一男
三年 三浦尙彦 金山 繁 田中政樹
二年 玉木和彦 波多野雅造
二年 辻田珍次 森本英男 風間定夫
能善忠廣 山口 實 藤本盛八
藤田 茂 荒川 勉
一年 香川朝政 神村 正 山中健一
福田寛雄 田中正明 秋山 實

一、二等賞(本學年間伍長となりて能く其の任務を盡したる者)
四年 蓮池平四郎 品川勝 深田善信
荒川英春
一、三等賞(本學年間伍長となりて能く其の任務を盡したる者)
四年 綿鍋義夫 西本春男 香川恒政
杉 光男 石川 浩 矢次三重
佐々木軍治 倉増敏夫
三年 小倉吉高 柳井 清 中原正久
石田安成 佐伯孝友 菊屋嘉十郎
大島康正
二年 田中達樹 岡敬太郎 本石光雄
一年 吉津孝甫 小田數夫
瀧口吉世 能美陽一 淺野 力
吉屋竹治 吉松 陽
一、三等賞(本學年間室長となりて能く其の任務を盡したる者)
四年 森澤忠夫 清水忠夫 磯部博雅
三浦義澄 堀 信一 齋藤孝正
杉本 等
一、四等賞(本學年間皆勤者)

淺原昌佑 中村五郎
一、二等賞(平素勤勉にして能く校則を守り室長となりて能く其の任務を盡したる者)
四年 蓮池平四郎 品川勝 深田善信
荒川英春
一、三等賞(本學年間伍長となりて能く其の任務を盡したる者)
四年 綿鍋義夫 西本春男 香川恒政
杉 光男 石川 浩 矢次三重
佐々木軍治 倉増敏夫
三年 小倉吉高 柳井 清 中原正久
石田安成 佐伯孝友 菊屋嘉十郎
大島康正
二年 田中達樹 岡敬太郎 本石光雄
一年 吉津孝甫 小田數夫
瀧口吉世 能美陽一 淺野 力
吉屋竹治 吉松 陽
一、三等賞(本學年間室長となりて能く其の任務を盡したる者)
四年 森澤忠夫 清水忠夫 磯部博雅
三浦義澄 堀 信一 齋藤孝正
杉本 等
一、四等賞(本學年間皆勤者)

一、四等賞(本學年間皆勤者)
四年 廿八名
三年 廿八名
二年 三十名
一年 卅七名
一、四等賞(本學年間皆勤者)
四年 三名
三年 三名
二年 四名
一年 十一名
同日同窓會より各學年成績優秀なる者に奨學賞の授與あり。

同日同窓會より各學年成績優秀なる者に奨學賞の授與あり。
四年 田坂興道 木藤正典 中村晋作
横山雅輔 玉井友世
三年 小方 司 河野通弘 辻野三郎
林 幸夫 長谷和夫
二年 新谷幸治 松尾美男 西本 實
山下誠一 栗田常雄
一年 杉原大泰 石村豊徳 貞本 尙
安野 藤 河村定一

第三十三回創立記念式

十月十八日午前八時より第卅三回創立記念式を講堂に行ふ。河内校長舉式の辭後告辭朗讀、來賓豊田菰市長の祝辭、卒業

業生代表田坂信一氏祝辭、讀いて岩田山口高等學校長の祝電披露あり。午前九時終る、引續きて陸上競技大會に移る。

先生の更迭

昭和六年十一月以後(前號報告後)
△伊藤先生 昭和七年三月卅一日御退職
先生は本校に十二年勤続せられ最近は首席教諭として訓育に盡せられたり
△鎌田先生 昭和七年三月卅一日御退職
先生は本校に四年勤続せられたり。
△沖田先生 昭和七年三月二十日御退職
後横濱市の紅蘭高等女學校に奉職せらる。
△金藤先生 昭和七年三月卅一日朝鮮新義州高等普通學校に御轉任
△山本博先生 昭和七年四月十五日御新任 歴史科御擔任
△津村先生 昭和七年四月三十日御新任 國語漢文科兼道科御擔任
△山本(百合熊)先生 昭和七年七月廿三日御退職 先生は本校に廿二年間勤続せられ訓育に盡せられたり尙今後は菰市會議員として活躍せらるゝ事と

りたり
△齋藤先生 昭和七年九月十六日御新任 體操教練科御擔任
△藤田書記 昭和七年三月二十日御退職 先生は寄宿舎會計の書記として十二年間御盡力ありたり
△堀田書記 昭和七年四月九日御新任 寄宿舎書記として就任せらる。

校誌 (簡略)

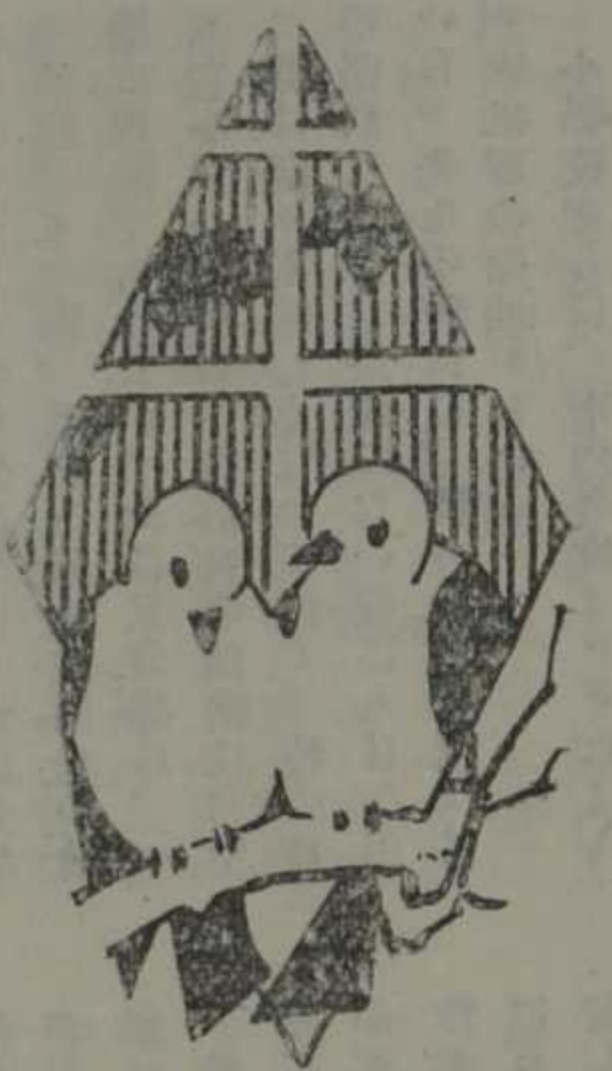
(自昭和六年十一月至昭和七年十月)
△十一月三日 明治節拜賀式舉行 式後山本校醫の衛生講話あり
△同六日 上野射撃場にて五年生實彈射撃あり 放課後弓道場開き舉行
△同七日 三見方面へ全校生徒の一日行軍あり
△同十三日 山口武學養成所主幹松田少將の軍事講話あり
△同十六日 學校長の國際聯盟に關する講話あり
△同廿一日 松陰先生追慕會舉行 香川阿武郡教育主事の講話あり式後卒業生南部法電氏の滿蒙に關する講話あり

終りて一同松陰神社參拜
△同廿四日 第五學年生兵營生活の爲め山口に赴く
△同廿七日 第五學年生山口聯隊より無事歸校
△十二月一日 秋期辯論大會開催
△同二日 生徒より恤兵金一人五錢宛贈出、之を縣教育會に送る
△同三日 關東軍司令官に學校長及び各學年生徒總代より慰問文を送る
△同廿一日、廿二、廿三日 火災呼集演習
△同廿四日 第二學期終業式
△昭和七年一月一日 拜賀式舉行
△同八日 第三學期始業式
△同十日 武道実稽古開始
△同十九日 武道実稽古終了
△同廿三日 武道大會開催
△同廿八日 阿田本縣知事來校
△二月八日 第五學年生電話交換局見學
△同十一日 紀元節拜賀式舉行 式後職員及生徒總代明倫小學校庭に於ける建國祭に参加す
△同二十日 全校生徒雪中行軍舉行
△三月三日 第卅二回卒業式舉行

- △同十日 陸軍記念日に就き藤田中將の講演あり
- △同廿七日 入學考査開始
- △同廿八日 入學考査終了
- △四月八日 新學年始業式 式後伊藤先生告別式 午後より新入生入學式
- △同九日 本學年度伍長室長任命式
- △同十一日 新舊生徒對面式
- △同十四日 文部省圖書監修官桑木來吉氏理科教授視察 各學年學級自治會
- △同十五日 放課後志都岐山神社參拜
- △同十八日 山本博先生新任式
- △同二十日 玉木中佐の乃木大將夫妻に關する講話あり尙大將夫妻の遺品陳列を觀る
- △同廿三日 全校生徒第一回腸チブス豫防注射
- △同廿九日 天長節拜賀式舉行
- △同三十日 第二回腸チブス豫防注射 山口高専主催陸上競技大會參加の選手出發翌日歸校
- △五月四日 第四、五學年辯論小會
- △同五日 第一、二、三學年辯論大會
- △同九日 龍山文部省督學官來校視察あり

- △同十一日 鎌田先生告別式
- △同十二日 津村先生新任式
- △同十四日 全校生徒各學年毎に一日修學旅行
- △同十五日 萩體育聯盟主催陸上對抗競技に参加す
- △同廿三日 運動場にて消防自動車見學
- △同廿五日 松陰神社參拜 松陰神社内武道大會に本校選手出場
- △同廿七日 海軍記念日につき田村能介大佐の講話あり
- △同三十日 行啓記念陸上競技大會
- △六月三日 山口高等學校田淵教授第四五學年生徒に數學講話あり
- △同十一日 水泳選手山口に向け出發す 明倫小學校講堂に有地海軍少將の軍事講話を聴く
- △同十三日 全校生徒軍艦便乘見學油谷灣に至る
- △同廿一日 永井陸軍中將の滿洲事件に關する講話あり
- △七月一日 山本校醫の衛生講話 山口縣醫會推奨體格優良生五年生矢次三重

- に賞狀授與式あり
- △同二日 武道大會舉行
- △同四日 放課後菊ヶ濱にて第四十二聯隊歩兵連合演習見學
- △同二十日 終業式
- △九月一日 第二學期始業式後山本百合熊先生告別式
- △同十一日 第三、五學年生徒父兄保證會、展覽會開催
- △同十三日 乃木大將追慕會 生徒感想發表 河野先生講話あり
- △同十六日 水泳部選手山口縣體育大會に出場のため出發翌日歸校
- △同十九日 武道競技小會舉行
- △同三十日 地歴科研究會第一日
- △十月一日 地歴科研究會第二日
- △同三、四日 全校生徒トラホーム檢診
- △同七日 第五學年生夜間教練の爲め志都岐公園に野營し拂曉戰を行ふ
- △同十四日 山口行選手壯行會
- △同十五日 志都岐山神社參拜
- △同十八日 第卅三回開校記念式後陸上競技大會
- △同二十日 山口行選手の體育大會狀況報告あり
- △同三十日 教育勸語奉讀式舉行



校友會報

書道部

九月十一日例年の如く第三、五學年の保證入會を機として生徒成績品展覽會を開催した。曇り勝ちた空模様心配された天気も十一日になるささすがに晴れて絶好の展覽會日和となった。丁度此の日は明倫青年團の競技會であつた爲昨年程は観覧者になかつたが午後はかなり混雑をした。書道部は第四學年二組の教室を生徒の平素の成績品や参考品の陳列場とし小學校の書方は第三學年三組の教室に陳列した。習字は學校に於て教師監督の下に書いた物の中優秀な物を選び一、二、三、等に分つた。榮譽ある一等賞を得た

ものは

第二學年(其一)(現在の第三學年)
伊東 邦治君
石村 粂徳君
第二學年(其二)
洗練された伊東君の習字と落ち着きのある石村君の書法は一きは目立つて居た。此の度第一學年に一等賞の無かつたのは甚だ遺憾であつた。一年生の諸君は今後大いに勉勵され來年は榮にあら一等賞を得られん事を望む。
小學校からは明倫、椿東、椿西、越ヶ濱、白水、木間よりそれ／＼伸び／＼した立派な作品を出品され一段と觀覽者の目を惹いて居た。出品學校には、この誌上で感謝を表す。

畫道部

九月十一日、例年の如く、第三學年第五學年生の保證入會を機として、我萩中生徒成績品展覽會は舉行された。當日は餘り快晴と云ふ程ではなかつたが、日曜なので、朝來多數の觀覽者を誘つた。我畫道部は、第五學年二組、及び第四學年三組の兩教室を會場に充て、一室には生徒の夏期休暇中自由作品の中、二三等入選作品、及び選外佳作、その他、生徒平素作品等を陳列し、一室には、最もすぐれたる、一等入選作品、及び番外作品を陳列した。一等に入選せる諸君は、一年土井千幸君、二年、貞本君、秋山君、三年、田中達樹君、四年、柳井君、五年、森重君等であつた。土井君のは、一年とは思はれない程素晴らしい出来ばいだった。色の配合と云ひ、遠近の表はし方と云ひ實にうまく畫かれてゐたが、唯近景が少

(能美忠廣記)

し物足りなく感じられた。秋山君のは、實に明るい、ほがらかな感じを與へる繪であつたが、今少し遠景の色合に注意し近景の粗雑に過ぎざる様にされたい。貞本君のは、秋山君のま全く異なつた感じの繪だつた。全體として落ちついた色調だが、此もやはり遠景に注意し、もつと立體的な感じを出して欲しかった。田中君の幾何圖案は原色の配置が非常にうまく出来てゐた。四年の柳井君の用器畫製圖、及び五年森重君の住宅設計圖は實に精密に出来てゐて、兩君の努力の跡が偲ばれた。一二等入選作品に附せられたる部長水沼先生の短評は、觀る者をして、一々よく其の繪を理解せしめるに多大の効果があつた。番外作品では、水沼先生の油繪、五六點、及び五年生佐伯君の油繪三四點であつたが、此は又會場には、一異彩を放つて居た。佐伯君の油繪は、年と共に益々素晴らしいものになつて行く。特に君の強烈なしかし味の無い繪は入目を引いた。先生の繪には、我々如き若輩には到底批評の餘地がない。

小學校からは、市内各校よりそれと

三學年の保證人會が機ミ一盛大に舉行された。其の日は、白雲空を覆ひて太陽は雲越しに蒸暑い光を投げてゐた。午前八時より午後四時迄一般の觀覽に供したが八時のサイレンを待たず早くも觀覽者詰めかけ、陸續として後を絶たず、午後には特に其の數も増した。一、理科部、本部は五年一組の教室理科室及び理科實驗室を會場に充てた。理科實驗室には、諸君の休暇中に於ける苦心の研究品が所狭き迄に陳列され、船、風流な米つきゴーストツブ……等あらゆる方面に亘り、デリ／＼／＼カタ／＼／＼と眞に理科部らしい感じのする所だつた。本年は、彼の滿洲事變上海事變に於ける飛行機の大活躍!!新聞!!講和!!獻納!!蒸上空の爽快な爆音!!あの勇姿!!等々々々によりて、飛行機に對する印象、研究心が深かつた爲か、飛行機の模型非常に多く、其の數軒然昨年否過去數十年をリードし、それが爲理科室は所狭き迄陳列し、飛行機の大格納庫の如き壯觀を呈した。其の中一年生小橋君のグライダー、二年生門司、山田兩君共作飛行機模型は其の主座を占め

兒童の作品が出品された。無邪氣な幼い兒童の繪にはほゞほゞまされる。又上級兒童の作品には中學生にも劣らない程のものも多くあつた。出品された各小學校には、此の誌上にて厚く感謝の意を表はす。終りにのぞんで、今後益々我畫道部の隆盛に赴く様、諸君が一層努力されん事を切望して筆を置く次第である。

(五年坂 峻誌)

地 歴 部

時九月十一日、日曜日例年の如く第五第三學年保證人會を機として菽中生徒成績品展覽會は盛大に開催されたり。此の日朝少しく曇りたれども十時頃より好天氣となり觀覽者陸續として蠅集し午後に至りては一層増加して下駄の音靴の音騒然として絶えざりき。

我地歴部は二教室を以て其の作品陳列室に當て、特等、一等、二等、三等有望の五に此を分てり。本年は地理模型の製作尤も多く、記述、地圖統計表等此に次ぎり。而して其の出品數遙かに昨年を凌駕し作品全部を陳列する能はざりしは甚

だ遺憾なりき。此の故に有量中にも例年の三等に比して遜色無き物も多少有りき。此の點諸君に御諒察を請ふ次第なり。亦規模及び緻密の點に於て一二年生諸君の進歩發展著しかりしは誠に慶賀すべき事なり。作品はさして優秀無かりしが就中特等、一、二等の如きに至りては共に精巧緻密刻苦の跡歴然として觀者をして歎稱の辭を發せしめたり。

思ふに我部は年毎に發展して今日の隆盛を見るに至りたり。されど未だ改良すべき點多々有りて是を以て十分なりとは爲すべからず。加ふるに月日は流れ、時勢は日に月に變遷して現今地歴を研究して世界の狀勢を知るは大に必要なりなり。故に今後とも諸君が新時代に適ふべき有意義なる作品を奮つて出品され、而して我地歴部の向上進歩の爲に盡力されんことを切望して止まず。

(香川記)

理 科 部

菽中秋期行事のトップを飾る生徒成績品展覽會は、九月十一日(日曜)第五、第一

入目を引いた。緒方君のタンク飛行機も面白いものだつた。

五の一の教室は、軍艦、汽船、モーターボート、ラヂオ等本年の優秀なものを陳列した。中にも一年生土井君の軍艦三笠の模型、三年生徳久君の一等巡洋艦模製は殊に偉彩を放ち、其の専門的な、精密な設計と、圓熟な技術は、觀覽者、感歎の聲を發し、誰しも語辭を惜まない所のものである。歐洲大戦に使用せる發煙劑の陳列も参考になつた事と思ふ。販賣部は四年生有志諸君の休暇中の努力により、アイス、カルピス、キヤラメル、ドリ、ロツプス、化粧水、フケトリ香油、クリームを販賣し、成績良好で、キヤラメルド、ロツプス、カルピスは直ぐに賣り切れた程だつた。二、博物部、一歩々々確實な歩を進めて行く本部は一年生の植物標本二年生の昆蟲標本が主であつて、博物教室は其れが爲一ばいだつた。よくもこれだけ感歎せしめ、暑中休暇中の諸君の努力の後が歴然と見える。其の他海へび等を陳列して觀覽に供した。何れも大成功裡に四時のサイレンを合圖に幕を閉じ

競 技 部

山口高専聯盟主催
第七回近縣中等學校陸上競技大會
五月一日(日曜)第七回近縣中等學校陸上競技大會は山口高商グラウンドに於て舉行された。前日の雨は我々菽中選手一同の心を暗くしたが、幸なる哉本日は絶好のスポーツ日和、快晴に恵まれて必勝の靈氣物凄く戰運を神に祈つて高商指して出發し午前八時の開會式に列した。昨年の優勝校山口師範先づ優勝旗を返還し千六百リレー、優勝校菽中續いて優勝旗を返還し、山師主將佐伯君の宣誓もすみ會長岩田高校長の激勵の辭ありて式も終了し、各校選手一列になりてグラウンドを

軽く一週しやがて八時半、百米第一豫選より戦の幕は開かれた。

我校より横山、岩城、辻野三君出場す。横山君A組で奮闘せしも惜しくも三着にて落選、岩城君、新入の意気物凄く頑張りしが胸一つの差で三着となり落選す。老功辻野君B組にて軽く豫選パス。續いて二百米第一豫選始まる。本校より、辻野、吉岡、五年藤田君出場す、辻野君悠々入選す、吉岡君よく戦ひ二着にて入選、藤田君ラスト迄戦ひしも遂に利あらず惜しい所で敗る、尙同君は練習の日淺し。今後の奮勵を望む。

此の時フキールドにては萩中選手の奮闘振り目ざましきものあり。太田君幸運にも萩商三好君を押へて一着にて歸る。萩中選手一同歡聲をあぐ(精細はフキールド部に廻す)折しも八百米のラストコイルかゝり、四年來島、田中兩君を連れてスタートに立つ。三着迄入選なれば兩君さも頑張れば入選の可能性充分にあり先づA組來島君軽く走りて三着にて入選、新人田中君B組にて奮闘し三着にて入選す。萩中選手一同の氣、大いにある。

トに依つて一勢に飛び出した。辻野君一寸遅れたる感あり。皆んな一語にゴールに飛込む、審判の結果辻野君四等にて貴重な一點に入る。一等山師堀君一秒九。

續くは千五百米決勝。日はかん／＼と照りて走者の意氣をそぐものあり。中村(太)君終始奮闘せしが武運拙く五等にて落選す今一寸の頑張り要す。山師小田君萩商永澄君接戦してゴール一寸前にて永澄君小田君を抜きテープを切る。一時五十分よりローハドル第二豫選開始さる。吉岡君B組にて二着にて入選中村君A組にて三着で入選す。今一步のラストへビーを希望す。富田君、フキールドに全力を注ぐ爲棄權す。

二時半、二百米決勝ラストコイル。辻野、吉岡兩君必死の覺悟にてスタートに立つ、幾回かのスタートやり直しの後、一同の出發が揃つた。カーブを出て直線となつて見ると辻野君が先頭を走つてゐる。百米の恥を二百米で雪がんと必死で走りつゝある。ピッチも素晴しく早い。百八十米頃迄

來り決勝を待ちて控室にて休む。九時五十分より千五百米第一豫選始まる。本校よりの出場者は萩中競技部の古瀬中村太三夫君と八百米の來島君出場す。されど來島君は八百の決勝を自重して棄權す。中村君樂に走り二着にて入選す。

千五百米に續いてローハドル豫選開始された。四年吉岡君五年中村正四郎君出場す更に新しく富田君も之に加はる。吉岡君A組にありて力戦スタート悪くカーブはやゝ遅れたれども直線コースに出するや君のスピード物凄く萩商右田君に續いてゴールに入る。C組富田君、彼はハイドルは新しき試みなれど長足を利用して二着にて入選、D組中村君軽く二着にて豫選パス。

此の間二〇分ばかり休みありて百米第二豫選のコールがかかる。第一豫選の入選者辻野君微笑を以てスタートに立つ、君には自信あり。日頃の練習の効果も充分に發揮されん。A組B組と別れ辻野君はA組にて軽く走り三着にて入選し決勝に残る。一着山師堀君一秒八の記録を出す。

ツブを走りつゝあつたが最後の甘水と云ふ所で二着を走つてゐた下中の前村君すごいダッシュを以つてゴールに突込んだ。辻野君惜しくも胸一つの差で彼に名をなさせしめ、二着となり更に三點を加ふ。

二時五十分五千米決勝。各校の選手も精銳を選び出し、劈頭より華々しい競争が始つた。本校より中村(太)君、中川君、豊田君以上三名出場したが中村君朝來連戦の疲勞漸く見初め中途にて棄權す、若冠中川君新人豊田君よく走りしも何分練習の日尙淺く最後の力闘に堪ふる能はず、無念の涙をのんで中座す。秋季大會迄には十二分の練習をして此の恥を雪がれん事を切望す。

残るは二百米ローハドル決勝、吉岡君自重してスタートせし爲やゝ遅れたる感ありて、カーブは一番遅れ直線に出るやスピードを出し難なくカードリングして接近しゴール前にて三着となり二着と相續いてゴールに入る。中村(正)君力戦せしも及ばず五等にて入賞せず。今少しの頑張り頼む。吉岡君若しスタート宜しきを得ば樂に二着は確實性あり尙一層今後

續いて直に八百米決勝戦が始まる。來島、田中二君最後迄ベストを盡せしも戦運吾に利あらずベストフオアーにのらず五等六等と續いて惜しい所で敗退す。尙秋季大會の奮闘を祈る。引續いて二百米第二豫選始まる。辻野、吉岡二君共に入選して決勝に残る。此の時萩商田中君一着なれどもコースを切りてオミットさる同君の爲吾等いたく之を惜む。

正午、本大會呼物のマイルリレー豫選始り本校チームはA組に屬し強敵山師、宇部工と組む三着迄入選なれば下商を離して入選す。以上にて午前の部は終了し晝食に入る。午後は一時より百米決勝より開始さる。朝からの災天は午後に入りて熾き付くが如く。しきりに喝を催すされど母校の爲選手一同元氣よく午後の競技に全力を然注す。やがて午後一時、百米決勝のラストコイルかかる。本校の辻野君緊張してスタートに立つ、總員六人四等迄入賞。第一回のスタート、一人フライ、イングしてやり直し。此の時の辻野君のスタート申し分なくよかつた。第二回目のスタート

の精進を祈つて止まぬ。此處に於て更に三點を加ふ。計も點を數ふるに至る。最後に千六百米リレー決勝。山師、鴻城、萩商、宇部工の強豪と組み新入チームを以つて之に對抗し奮戦せしが及ばず遂に五等となる。秋季大會迄にはうんと練習の功を積みて此のうらみを晴さん。

かくてトラッグ、フキールド合して總計十八點参加校十一校にて三等となり、山師、萩商に次ぐ。生徒諸氏の熱誠なる歓迎を享けて萩の地に入る。「フキールドの部」

先づ第一に砲丸投のコールがかかる。オー。と勇まし聲をかけて飛び出た三人これこそ、我萩中の重鎮富田君と老練杉本君そして又新進田村君。腕によりをかけた三人が今鴻城の地に大きな巨弾を飛ばして居る。十一米のライン附近にみなおちる。三人とも悪戦苦闘をつけて居る。五尺六寸の巨軀の持主富田君投げける而し力足らず十一米のラインのあたりへ杉本君

も投げる、そして田村君も。が而し、遂に榮冠は山師の長崎君にレコード十二米三三。あゝ癪に障る。二等は見えれば十一米七〇練習の時には十二米も平気で投げる萩中二選手 思ふても仕様がなない我輩の責任だ。

同情する、實力を持つて居る君達が、そして……
次にハイジャンプ我校からは三人 中村正君、大田君、田中君、みな飛ぶあざやかなフォームで。

が面し中村、田中の二君遂にオミット、未だ我々の大田が居る。パーは一米六十に上げられる、みなかゝる而し太田君を見よ彼獨特のフォームで其して他にゆるさぬあの怪脚で見事オパー。見て居るのに胸がスツツとする此の時残つたもの僅かに四人、そして又四人があせり出す。君はと見れば平氣の平座だ。歌でも口ずさんで居るのではないかと云ふ位に。残つた三人やつとオパー。パーは一米六十三に、是又君丈けに天のゆるすフォームでオパー。側に見て居る山中の者が「スゴイッ」と唸り出す。愉快

だ残つた三人さういふオミット。今まで夢にまでゆるさなかつた、君が一等とは而もA付きで遂に貴重なる五點、オ、その時だつたはるか萩の里をはなる、鴻城の地において我々の辻野君が朝日に輝し丑のコークを見せて百米第一豫選のテ

ープを切つたは未だ四年だぞ「よく見ておけ」と言つてやりたい位だ。次が圓盤投の決勝又杉本、富田、田村の三君勇ましく出場。是又悪戦苦闘。遂に杉本君田村君がオミット。一人残りし富田君戦友の氣をなぐさめんものと掛け聲勇ましく飛ばして居る。が而し遂に又五等で破れようとは……知る人ぞ知る君の心察すに餘りあり。

次が走り幅飛の決勝萩中からは杉本君太田君、富田君の三人を送る、杉本君、富田君断然優勢だ。
が而し彼の山師を見よ。我を断然リードして「一、二、三」を續けて居るではないか、して又我はと見れば富田君が六米を飛んで四等。三等との差わずかに二糧一躍せよ富田君、お、恵まれない我々よ！否俺は同情する杉本君に去る年の懸體に

は眞剣に言つた。「ナアーニ俺は平氣だ」あつさりしたものだ。其れも其のはすスボーツマンだもの、又三段飛の所へ引き返る。

ハードルでつかれて居る中村正四郎君痛む足を引きすつて母校の爲に戦つて居る。天候は！眞夏の太陽を思はせる眞晝の太陽はカン／＼と照つて居る。

俺は泣き度くなつた。杉本君も痛む足を引きすつて居る、そして又遂に君をして榮冠を保たしめなかつた俺！これ又一等山師の堀君見事なフォーム、正確な踏切り。レコード一三米四八敵ながらも天晴れ。

次はボールの決勝。我校から中村君出場、君の踏切る方の足が大部ふくれて居る、是も三米で四等。

嗚呼戦はずでに終る萬事休す。「泣くな男だ」今度こそはと思つた今年も又……。「泣くな男だ」言ふも涙！聞くも涙！本當に選手の日否彼等の五箇年は涙に生き涙にほゝむられて行く。
本當に汗と涙だ。そして又今年も芳し

からの成績を取つた、而し彼等は反省する否反省した。
而して此の反省がやがては彼等が近き將來において彼等が月桂冠を得る要素だ俺は確信する山口における選手諸君の御奮闘を謝し且又當時の戦況を詳かにせざるをうらむ。(Y、N、姓)

- 萩中出場選手
百米 辻野三郎(四年) 岩城仁將(四年)
二百米 横山岳朗(四年) 吉岡 健(同)
- 藤田 仁(五年)
- 八百米 來島敏夫(四年) 田中健介(同)
- 千五百米 中村太三夫(五年) 來島敏夫(同)
- 五千米 中村太三夫(同) 中川修二(三年)
- 豊田金次郎(五年)
- 二百米 ローハドル
吉岡 健(四年) 中村正四郎(五年)
- 富田義治(四年)
- 千六百米 リーチーム
來島敏夫(四年) 岩城仁將(四年)
- 横山岳朗(四年) 五島正一(五年)
- 補 藤田 仁(五年)
- 砲丸投 杉本 等(五年)

足をいためて出場出来ず男泣きに泣いた君をそして又今日の君を。

次が槍投の決勝我校から富田君、田村君、來島君出場、あの富田君のフォームを見よ、我校で二三回位の練習を試みてそして出場する君の心の緊張を！

直線をなして進んで行く銀の槍を！。君今度こそは投げて呉れよ是が非でも。俺は心の中で叫んだ、落着いて行け頑張れなんて言ふ言葉は此の場合不必要だ。兎に角落着いて行け！又叫んだ。「心の

時を同じうして三段飛の決勝がある。本校からは杉本、中村二君が出場する。我輩は三段飛の所へ行つて居る。杉本君がモーシヨンをつける、アツ。飛んだ砂けむりが上る、槍投の決勝の所へ行つて居た太田君が飛んで歸つて来た。槍投の決勝がおはつたのだ。
「オイ富田が一等だ」「何一等」「何處に」我輩が飛んで行く正しく一等だレコードは四十二米八六。富田君の所へ飛んで行つた「富田有難ふ」「俺は今のお前を待つて居たのだ」「本當に有難ふ」俺

- 富田 義晴(四年)
- 田村 由之(二年)
- 圓盤投 田村 由之(三年)
- 走高跳 中村正四郎(五年)
- 太田 肇(四年)
- 田中 健介(同)
- 三段跳 杉本 等(五年)
- 中村 正(同)
- 槍投 富田 義晴(四年)
- 來島 敏夫(同)
- 田村 由之(二年)
- 中村 正(五年)
- 吉岡 健(四年)
- 來島 敏夫(四年)
- 棒高跳 中村 正(五年)
- 吉岡 健(四年)
- 來島 敏夫(四年)

第二回 萩商業學校對抗陸上 萩聯合青年團 競技大會

初夏らしき氣分を引き立たせる五月十五日、未だ關西の競技大會に敗北の憂目を見て、涙乾かざる中早くも第二回中、商、青、陸上競技大會は萩商グラウンドで開かれる。
此の日や天よく晴れて、風とてもなし本校六百の若人は今日こそ晴れの競技を

見んものと、否、彼等の聲のあるかきりに應援せん、勇み立ち、二十名の選手を擁して堂々と萩商のグラウンドに乗り込む。

午後零時半選手入場式、壯且つ嚴なる「君ヶ代」二唱の後に訓話等ありて愈々戦のトツプを切る百米第一豫選のコールがかゝりフキールドの方では時を同じうして砲丸決勝のコールがかかる、我が校からは、杉本、諫早、富田、水津の四君出場、富田君、杉本君投げる、

清く澄みきつたみ空をあの巨弾が流れる、二人とも軽らくベストに残り、水津君、諫早君おしくも落選。

富田君、杉本君断然優勢だ。杉本君力強き君の腕で見事十一米九十を出して一等、是について富田君四等は是に七點を得る、幸先きよし。

行け我が選手よ！

次にハイジャンプのコールがかかる。我が校からは、品川君、大田君、林君、三好君出場、バーは一米五十に上げられる！皆軽らくオーバする、バーは五十五へ、此の頃から段々かゝる者が居る、萩中の

三吉君おしくも落選未だ試合なれのせぬ彼、大いに奮闘を望む。

バーは六十へ、大田君、品川君、三好君、右田君の四人オーバする、我が校の林君、商業の澤本君終にかゝる。バーは六十五へ、商業の三好君やうやくオーバ。

あの關西で優勝した大田君飛べ！何故さげぬのだ！一等は終に三好君へ、我が校は大田君が二等、品川君が三等と林君が五等。

次が圓盤投、我が校から杉本君、富田君、江島君、田村君出場。

是を時を同じふしてブロードの決勝、我が校から吉田君、杉本君、富田君、中村君の四君勇ましく出場。圓盤のベストに軽く入つておいてブロードの所へ引き返す。杉本、富田の二君、江島田村の二君非常に奮闘せられしもおしくも落選、ブロード、ブロード、聞くからに勇み立つ我萩中の特殊競技、飛ぶ、みなきれいなフオーで。

見よ！春光を浴びて飛ぶ若人の群を！我が校の杉本、富田、吉岡の三人共にベス

トに残る中村君は棄権、ベストに残る者三人、たのむぞ君達よ。

三君の意氣あたるべからず、最後に一飛びした吉田君六米二十二、君も驚く小生も驚く今の今まで君が六米も飛んだのを見たことがない。もう二等だ占めた。次が杉本君の番アルコールをぶつかける走り出す、あゝ飛んだ、レコード六米二十七、おや、又飛んだ、鳴々終いに三人の御奮闘のおかげで、二等三等五等の成績を取り此の時の差わずかに商業と四點。

頑張れよ、諸君！杉本、富田の二君圓盤の所へ引き返す。少しのつかれも見せぬ彼等、エイオーの掛聲勇ましく投げらる、此又富田君一等、杉本君四等。君等の御奮闘を謝す。

次が最後のボール決勝。我が校から中村來島、吉岡、山崎の四君出場。

二米八十から練習開始、み鮮かなフオームで飛ぶ。

やがて二米九十、戦は段々進行して行く願はくは萩中四選手よ、此において、彼の商業に食ひ込めきつと、商業に

食ひ込め。

而しあくまで恵まれない我々。

終いに又彼等の軍門に降る。此の時一等、大田君三米五十、我が中村君四點、嗚呼萬時休す。

關西の涙乾かさる中、又も、男泣きになく。

あゝ癪に障る。選手控室でも誰も話す者もない。

臥薪嘗膽來年こそはと誓つた今年も。

然し選手諸君よく戦つて下さつた。

最後に先輩諸兄の御指導を感謝すると共に併せて本校六百の諸君の御聲援を謝し尙文拙く當時の有様を詳にせざるをうらむ。(YN記)

出場選手名

走幅跳	杉本 等	富田義晴	吉岡 健
	中村正郎		
砲丸投	杉本 等	富田義晴	水津清信
	諫早 清		
圓盤投	杉本 等	富田義晴	江島 修
	田村由之		
走高跳	三吉二三男	林幸男	品川 勝
	大田 肇		

棒高跳 中村正四郎 山崎内匠 來島敏夫

吉岡 健

當日のレコード

砲丸投	杉本 等(中)	十一米九十
圓盤投	富田 義晴(中)	二十八米
走幅跳	大田 博邦(青)	六米四十
走高跳	三好剛二郎(商)	一米六十五
棒高跳	大田 博邦(青)	三米六十

トラックの部

百米豫選より戦の幕は切つて落されるA、Bと二組に別れる。A組には本校より五年杉本君四年吉岡君出場せしも杉本君フキールドに全力を傾注する爲補缺岩城(四年)君と代る。ラストコールで各選手スタートに居並ぶ自信ありげにおもむるにゴールをにらむ、いよ／＼スタートだ。バット土煙をあげて飛出す。如何にぞ見れば各一直線五十米、七十米、九十米、ラストへビーと心に听んで氣をもむ一せいにゴールに流れる。結果如何にぞアナスを待つ、一等青年大田君(昨年の本種目優勝者)二等、三等と續いて本校選手難なく豫選はパスした。次はB組此の組では強豪揃ひ、萩中、萩商の對抗

である。

本校より辻野君、横山君 共に四年(二君出場す。

スタートも軽く出で共に懸命に走る辻野君好調子にて他を押へテープを切る、横山君と氣をもんで見ると胸一つの差にて落ちしは遺憾千萬である好漢自重せよいよ／＼決勝だ。三人の選手が残つてゐる。どうしても一舉に點をかせよ必要ある種目である。ベストファイブまで入選だ選手は六人一人落ちるだけである。然しいづれも縣下の強豪揃ひ油断は大敵である。はげまし／＼スタートに選手を送る。選手も必死の覺悟が肩間に見えるスタートの額も緊張して靜かに用意の掛聲かゝるうまくスタートする様にこそ神に只管祈る。

ドンと一發鳴る、一せいにダッシュする。本校選手は如何にと眼を向ける一直線互に接戦だ、ラストを頑張れよと心に願ふ其の腹に早やテープは二つに切れた成績如何と場内アナスの聲を待つ、一等と長く引張つて萩中と次に呼んだ時飛び上つて喜んだ、辻野君、タイム

十一秒八と續いて呼ぶ、之は昨年と對記
録であります、更に吉岡君六等に入りて
一舉六點に入る。岩城君の奮闘も又感謝
す。

續いて四百米第一豫選之もA B二組あ
り。

A組に本校より横山、石光君出場せし
も都合ありて五島、藤田兩君と代らしむ
二君ともパスさせればならぬと激勵して
スタートに送る。顔ぶれを見ても餘り強
さうなのは居ない之さへパスすれば決勝
に入る資格はあるのだ。如何にしても噴
込めと勵ます。スタートもうまく出て前
半はかるくついて行く、後半に入つて二
人ぐんぐん出て行く、もう占めたま心に
叫ぶ折から後の選手猛烈なラストへピー
を出して来たはら／＼して早くゴールに
突込めと叫ぶ、後三十米、二十米、十米
あゝみんな一直線とつこせいにゴール
に流れこむ、誰が勝つたのかよく分らん
決勝審判の判決を待つ、一等萩商木村君
二等青年來島君、三等萩中五島君の順で
一人はパスする事を得た。藤田君涙を吞
んで退場す。

す。

萩商に強敵揃ひで吾軍に望薄い勝負で
ある、されど元氣一杯の奮闘を望みて出
場す。

中村、田中二君よくペースを保ちて一
回／＼他校選手について走る、萩商長澄
君自重して又自信を待つてとん／＼變ら
ぬ調子で進む。七周半でこのレースは終
る、後一回と云ふ時ピストルが鳴る、此
の時中村君五等を走る。田中君は疲れて
途中にて棄權す、餘り此の種目になれぬ
ため、止むを得ぬ共にラストを頑張つて
抜かせず、そのまゝゴールに入りて中村
大三君五等となり一點を擧ぐ。
萩商長澄君一着となるタイム四分四十
一秒一。

一萬米
これは餘りにグラウンドでは時間を取るた
め郊外競走である、マラソン足袋に、白
鉢巻、元氣ある顔なスタートに十六名居
並ぶ本校よりは五年中村(太)君、豊田君
三年中川君、二年河村君出場す、豊田君
健康思はしからず二年波佐間君代りて出
場せしむ。

B組續いてスタートにつく、本校より
は岩城、來島兩君(共に四年)出場す。
岩城君のラスト見ものさ出發を待つ。

前年かかるくついて行く百五十米、二百
米、三百米までしんがりをつくり二人
共走つてゐたが三百五十米位に至るや猛
然とラストへピーを出して敵を抜き出し
た。岩城君ぐんぐん抜く、岩城一岩城一
と盛んに聲援起る、來島君は見えれば少
しラストの出し方が早かつたせいにかフキ
ニシユあまりきかず遂にゴール直前にて
へばつてしまふ、岩城君最後まで力戦し
て三等にて入選す。一等萩商田中君、二
等青年八道君であつた。

残るは決勝此の間色々種目の豫選あ
れど直に決勝を詳記する事にする。豫選
をパスせし選手六名五等迄入選である。
二人の選手を此の種目にパスせしめて力
強い、五島、岩城兩君の奮闘を期待して
止まぬ。ラストゴールでアルコールをぬ
るのもやめてじつとピストルの鳴るを待
つ。

いづれも強敵何處まで奮戦してくれる
かぶ見ものである。新進岩城君自信をあ

元氣よくやつて來いよ、又行つて來ま
すの合言葉と共に出て行く。

其の間フキールの種目着々進み得
點を重ね萩商に肉迫して行く。
やがておよそ卅分或はそれ以上ちよ
つと待たかと思はれる頃合、がや／＼
外の方で人の立騒ぐ氣合が見ゆる、さて
はま心を驅らせて走つて出て見る。先頭
の走る選手の姿が見ゆる。誰かま待つう
ちにやがてはつきり姿を現す。やはり定
評に違はず青年新見君だ。さして疲勞の
色も見えず元氣よく走つて歸る、満場の
拍手を浴びてグラウンドを一周しテープを
切る。タイム卅九分十五秒のこであつた
二等青年藏岡君、三等萩商長澄君、四
等萩商岩城君、五等萩中中村(太)君の順
序でゴールに入る。こゝに於て貴重の一
點を更に加ふ。

二百米ローハドル
A B二組に分れる、A組に本校より五年
中村正君、四年吉岡兩君出場す。この組
には右田、大田君等の強敵顔を並べて苦
戦である。必勝の意氣高く一せいにスタ
ートしてハードルを飛ぶ。第一、第二ミ

りげに敵恐るゝに足らぬと云ふ吾も又意
を強うせり、いよ／＼スタートする。

前年二人の策戦により五島君トップに
出で、他校選手を引張る、ラストにて岩
城君に抜かせる策戦に出す。

されど五島君依然トップのまゝで三百
三十米まで押す。あと七十米、こゝまで
來るさ他の選手もラストへピーにエネル
ギーを傾注して必死にゴール目指して進
む、岩城君は見えれば之亦ものすこきラ
ストスタートだ、途中大分もまれて苦戦
なるにも負けず君の闘志満々としてラス
トへピーを出す、ぐんぐん他を抜いて行
く、他の選手も負けじと頑張る。最後の
廿米泳ぐ様にしてゴールに倒れこむ、一
等萩商田中君、タイム五十六秒のこ二等
青年來島君、三等萩中岩城君だ、五島君
前半に疲れて後半のラスト出でず落選せ
しは残念であつた。

こゝに於て三點を加ふ。
千五百米

此の種目は直ちに決勝である、本校よ
り中村(太)君、田中(健)君、兩君出場す
來島(敏)、來島(次)兩君都合ありて棄權

段々ハードルを飛びて最後のハードルを
越す頃大田君トップにて走る、吉岡君之
に續いて右田君三等にてゴールに入る。
右田君は決勝に力を注ぐため力をセーブ
して走つてゐるのだと油断ならぬ事を心
に思はしめる。

B組には山崎、富田二君出場す、初出
場にもかゝはらず二君共に奮闘して一等
富田君、二等青年佐古君、三等山崎君の
順でゴールに流れる。
いよ／＼決勝のゴールかゝつて各自選
手スタートにつく豫選をパスせし者六名
五等まで入選である。

一せいにバットスタートダッシュして
第一ハードルを飛ぶ、越す、第二、第三と
難なく飛び越す、六、七臺目のハードル
を越す頃右田君と吉岡君のきをけつづつ
て戦つてゐる。されど今や西日本の雄將
名ハードラーとして盛名高き萩商右田君
段々吉岡君を離してテープをきるタイム
二十六秒のこ、二等萩中吉岡君、三等青
年大田君、四等萩中富田君、五等青年佐
古君の順でゴールに居る。
更にこゝに於て六點を加ふ。

残るは本大會の呼物八百米リレーである。

本校オーダーはトップ吉岡君、セカンド横山君、サード岩城君、ラスト辻野君である、いづれも四年生で前途有望である。萩商、青年、萩中と並びスタートに就く、萩商田中君トップに出て吾を離さんこの策戦に出ず、吉岡君懸命に彼を追ひてセカンドにバトンタッチす。横山君更に追ひてサード岩城君に渡す、全力を盡して戦ひいよ／＼バトンはラスト辻野君に渡る。必勝の意氣ものす／＼、前十五米を走る萩商ラストを追ふ走る！／＼、両者弾丸の下く飛んで行く。

五十米、百米、百五十米あさ五十米だこの時差僅かに五米抜くかと思はれたが惜しくもカーブに入りて悪くラストを懸命に頑張りがあゝ惜しきかな遂に抜く能はず二米餘残して惜敗せり。選手一同涙を吞んで退場す。一等萩商チームタイム一分四十三秒。

こゝに於てトラックは全部終了す、得点二十點
フキールドと共に總計して十三點の差

にて萩商に名をなさしむ願はくば後輩諸氏この恨みを他日雪がれん事を希望して止まぬ。

マネジャー 服部正吾
山口縣體育協會主催第二回縣下
中等學校體育大會

昭和七年十月十六日、おゝ此の日こそ我等が待ちに待ちし、一年間の苦心、血と汗を以て猛練習し來りし成果を遺憾なく發揮しようとする日である。萩中競技部衰へたりの聲を聞きて涙を吞みし事ども幾度ぞ、我等が鐵腕鐵脚の下に敵を蹴散らしてくれんさ、十五日午前八時戦運を春日神社に祈りて鴻城原頭指して進んだ。明くれば十六日、未明より起きて神社參拜武運を祈願して、一同勢揃ひする。選手の意氣揚々として高商グラウンドに進む。定刻八時至れば開會式、壯嚴なる君が代奏せられ我等一同襟を正す、式も型の如くすみやがて百米第一豫選より戦の幕は切つて落された。

(以下各種目毎に豫選より決勝まで書く事にします) 順序不同百米、
此の種目には古家辻野君、新人藤田正君を配してゐます。されど辻野君練習中

肉離れを起せし事ある爲試合如何と心配一方ならず。案の如く君スタートするや十米ならずしてはたさ倒る。共に涙を吞みて退場す。幸漢、自重して明年の奮闘を祈る。藤田君未だ二年生にして、試合も數を経ず、うまくスタートせしも三着にて敗れしは残念、前途有望今後の練習を希望す。(二等迄入選)

百米決勝一等下中前村君タイム十一秒六、辻野君は昨年の縣體にて十一秒三を出せし事を思ひて涙新たるものあり。

二百米

辻野君肉離れの爲止むなく棄權、若冠藤田君に期待して出場す、あまされど天運空し百五十米まで斷然他を押へしもラストへビー利かず三着にて涙を吞む、萬事休す。然れども兩君とも明年あり、來年の事を云ふさ鬼が笑ふさ云ふが、其の鬼に笑はれぬ様立派なる成績を上げられん事を切望す。

四百米

五年五島君、四年岩城兩君出場、五島君は豫選にて頑張りがしもラスト餘り利かず惜しい所で敗る。

岩城君斷然ラスト利きて下商淺田君(優勝者)に次いでゴールに入る、此のタイム五十六秒、平素のベストレコードより二秒縮めり。之にて第一豫選通過第二豫選に至りても君はラストへビー見事に利ききて二着にて入選す、残るは決勝のみ此の間マイルリレーありて君は扱れしもしこはす、全エネルギーを傾注して闘ひ遂に四着にてゴールに入る。實に見事な奮戦振りと云ふべし。此處に於て貴重な三點に入る。

八百米

五年藤田君、五年來島君出場す。されど來島君は千五百米に力を注ぐ爲棄權し。一人藤田仁君の奮闘を頼む。スタートより直ちにトップに出で前半調子よく走り後半に入りて君少しく難色見はたれどそのまゝ頑張りがゴール前五十米まで押す此の時二、三等を走りし選手を押し合ひて藤田君に迫る。抜かせじと必死に争へども、遂に空し、胸一つの差にて三等となり失格す。實に残念なる試合であつた。

千五百米

五年中村大三君、五年來島豊兩君出場す

中村君は夏休の練習に於て四分廿九秒を出し萩中レコードを破りし程の猛者なりしも如何にした事が、つい此の一箇月ばかりスランプにて振はず、實にこのスランプ程選手を悩ますものはない。然れども精一杯の力闘を期待して出場す。來島君も新學期に入りて練習し日未だ淺けれどタイムはかなりいゝし、相當の所まで戦へるさ信じて参加せり。いよ／＼豫選のラストコールかゝりスタートに並ぶ。中村選手は強豪多くよく戦ひしも利あらず遂に敵の軍門に下る。來島君の組は新人多く未知數の力を以て互に競争しコースも一定を保ちて三等にて走る。このまゝ押してラスト利けば入選可能とさきりに應援せしも天運空し力盡きてゴールに泣けり。此の時フキールドにては諸選手奮闘しつゝあり。トラックは全滅の憂目を見んとしてゐるので、吾輩必死にて選手を激勵す。岩城君の四百米三點ありのみ、非常に心細き極みなり。

五千米

此の種目は直ちに決勝である。縣下の精銳數名スタートに居並び必勝の意氣眉

間に見ゆ。本校よりは中村大君新人二年生河村君出場す。平素の猛練習の効果をこゝ晴れの場所に見せんものさ必勝の意氣高くビストルの鳴るを待つ。されど兩君の爲こゝに一言を聞きて欲しい。中村君平素の練習に十七分五十六秒出で前途に光明を見出し河村君亦十八分の好記録を出し、共に入選の可能性を抱かしめた。然るに何たる皮肉ぞ、中村君試合前のスランプは實に泣くに泣かれぬ悲哀を感じしめた、然し今や總てを忘れて只兩君の奮闘を祈るのみ。一發の號砲と共にスタートし一回二回と兩君調子よく進めども共に先頭のグループについて行くのに難色見は來り漸次遅れて中頃を走りおれども入選の可能性を失ひしか遂にレースを棄權せり。二年河村君は未だ若し他日此の汚名を雪がれん事を切に望む。

二百米ローハドル

四年吉岡君、三年山崎君出場す。吉岡君はハードル界の古豪である。新人山崎君も名フォームを以て堂々たる實績を示してゐる。プログラムの組合せを見ても兩人うまく編成されて第一豫選パスは確實

と見られた。

果せる哉吉岡選手、強敵師範長崎君を
押へてテープを切るタイム二十七秒二實
に本校レコード二八秒Fを破つてゐる次
は山崎君スタート調子よく第一ハードル
も難なく越へ好調子かの如く見はしが如
何にしけん第六ハードルに至りて足をか
けてバタリと前にころぶ。萬事休す。涙
を呑みて君を慰むる言葉もなし。

此處に於て吉岡君決勝に残り。強敵萩
商右田君との對戦を待つ、いよくラス
トコールと共にスタートにつく、精銳六
名一發の號砲と共に飛出す。吉岡君ス
ート思はしからず君の苦手のカーブこれ
また足あはず益々困難に陥る。されど直
線に出でしならば君獨特の強味を見せて
くれるのであると期待せしもうまく足あ
はず、遂に五等にてゴールに入る實に不
運であつた。實力ありて此の憂目、され
ど君には來年がある自重して今後の奮闘
を望む此處に於て二點を加ふ。右田君テ
ープを切りてタイム廿六秒この新記録な
れどハードル一臺倒せし爲参考記録とな
りしは惜しむ所なり。

山師、二等宇工、三等萩中、四等鴻城中
の順にて一等タイム三分四十二秒、本校
得點四點。

此處に於てトラック種目全部終了し、
本校得點十三點個人入賞は四百米岩城君
ハードル吉岡君であつた。
顯り見れば實に不運な試合であつた。
泣いても、も此の心の痛みはいへるこ
も見えず悲嘆の涙にくれる。

來年こそ此の恨を果して貰はねばなら
ぬ。紙上を通じて切に諸君に御願する次
第である。

特筆すべきは五千米宇山下君の立派
なる態度である。足をスパイクでふまれ
三百米餘も抜かれしも、マラソン足袋さ
はきかへ奮戦力闘遂に三等となる。君の
精神こそスポーツマンに最も肝要なり。
左に本校メンバー及び一等記録を記し
て参考以供す。

- 百 米 下中 前村君 十一秒六
 - 二百米 萩商 田中君 廿三秒九
 - 四百米 下商 淺田君 五十五秒六
 - 八百米 師範 吉松君 二分九秒F
- (新記録)

四百米リレー

この種目にはかれて優勝を期待されてお
り。メンバーも一流を配してゐるので強
味は充分にあつた。

豫選は他に強チームも見えずはるか二
等を離してテープを切る。タイム四十七
秒F、B組にて萩商四十七秒Fにてテ
ープを切る。C組にて山師四十六秒七にて
テープを切る。決勝は接戦だなき心に會
心の笑をもらす。タイム順から云へば山
師一等であるがリレーは水もの豫選は許
されず。決勝の至るを選手の足をもみて
待つ。本校トップ杉本君セカンド吉岡君
サード富田君ラスト藤田正君(辻野君は
内離れのため出場出来なかつた事はかへ
すくも残念千萬)以上のオーダーをもつ
て對戦する試合もだんくすみて日はか
げりて肌寒さを覺ゆ、身心の緊張するを
覺ゆ。ラストコールと共に一齊にスター
トに就く。一發のビストルと共に弾丸の
如く飛出す。杉本君や遅れ氣味なれど
もよく頑張りてセカンド吉岡君に渡す。
君もよく頑張りバタンはサード富田君に
渡る。富田君長足を利用してぐんぐんの

千五百米宇中 山下君 四分卅二秒二
(新)

五千米 宇中 藤田君 十八分三

秒ハードル 萩商右田君 廿六秒二

(参考記録)

四百米リレー 萩商チーム 四十七秒F
マイルリレー 師範チーム 三分四十二秒

本校メンバー

- 百 米 辻野 三郎 藤田 正
- 二百米 同 人 同 人
- 四百米 五島 正一 岩城 仁
- 八百米 藤田 仁 來島 豊
- 千五百米 中村太三夫 來島 豊
- 五千米 中村太三夫 河村 定一
- ハードル 吉岡 健 山崎 内匠
- 四百リレー 杉本等 吉岡健 藤田正
- 富田義治
- 千六百リレー 石光吉月 五島正一、
- 岩城仁將、田邊實彦

「マイルド」の部

愈々午前八時半トラック百米第一豫選
マイルド砲丸投決勝によりて、戦ひの幕
は切つて落された、砲丸投の決勝、我
より出場した、杉本、富田の二君参加選

1111

びる此の時三等なりしが二等師範をぬき
て遂にトップに迫る。バトンにはラスト藤
田君に渡る。此の時萩商TOP萩中、山
師の順であつた。師範のラストは古家堀
君、藤田君ごまで之に對抗するかうま
くやつてくれればよいがと神に總てを祈
る。五十米、七十米未だ本校は二等餘す
處三十米、聲を限りに應援す。されど堀
君古家の名に恥じず、ラストにて藤田君
を抜き、TOP萩商に迫る。三者相亂れ
て戦ふ。殆ど胸一つの差にてゴールに飛
込む、一等萩商、二等山師、三等萩中、
タイム四十七秒F、此處に於て四點を加
ふ、餘所千六百リレーのみ。

千六百リレー

實にこのリレーは豫期以上の好成績をお
さめたレースであつた。豫選も岩城君の
奮闘によつて難なくパスし決勝出場の資
格を得たり。山師、鴻城、宇工、萩中、
四校入り亂れて混戦が豫想される。春の
大會にて鴻城中優勝し、強味を傳へられ
てゐたが結果は四等に陥るなども狂はせ
な演じた。五年石光君、五年五島君、四
年岩城君、三年田邊君の勢を謝す。一等

手實に三十名、然れども十一米のライン
附近に落ちるもの僅かに六七名、幸なる
かな我等の二名も軽く投げて居る。
愈々ベストシックスの取られる時、杉本
君は確實だ然し、富田君は十米九〇厘位
い、然し初め富田君投げる時きれいなフ
ォームで「ウン」ミーとつきつき出した
占めたベストへは完全だと思ふ嬉しく
てたまらない。然し其の喜びの次に來る
ものは果して何。

嗚呼！富田君の右脚がサークルに上つ
て居るではないか此の時小農の横瀬君十
君九〇厘位愈々ベストが取られる審判
の所へかけつけた。富田君勝つか、横瀬
君我に打ち勝つか、願はくは神よ我等の
富田君をして、彼に勝たしめ給はせ、然
るに天はあくまでも皮肉だ終いに富田君
ベストへも乗らで彼等如きものに破れる
さは嗚呼コンジションは是迄影響するも
のか、残るは只杉本君のみ、御自重して
投げて呉れよ、良き友富田君を失つた君
の心の痛手に富田君の復讐をしてやつて
呉れ頼むぞ、然し又神は我々には恵を
與へなかつたのか僅か一厘の差で下中の

生野君に勝を譲ると思へば癪に障る富田君も僅か五粒の差で破れた事を思へば……其の次がハイジャンプの決勝、我々からは我等の重鎮大田君と新人三吉君出場は又参加選手實に三十餘名パーは一米五〇―五五、我等の二人とも難なくパー、六八一、三吉君終に破る君未だ練習の日尙浅し幸いに自重せられよ、三吉破るゝも我に未だ大田君あり今年關西の大會で一米六三Aを飛んで見事一等となり初陣の功を奏した大田君が居る君よ頼むぞ、一米六五へ、大田君何んなくパー、此の時六五をパーした者實に七名、パーは七十へ、大田君一回、二回……三回あつて飛んだ！占めた！と思つた時君の左の腕が僅かにかゝつて終に六十五をパーで破るゝは、此の時七〇をパーした者、岩中の田島君、興中の田中君、田中君恐る可し、終に一米八〇を飛びて優勝せり、君未だ三年と聞く、田中君恐る可し、

三等の戦ひ、是では只大田君残る輩を一蹴して見事三等ハイジャンプにかゝる人々の出現した事、大田君幸いに自重して来る可き大會にはきつと頼む、幸いに自重せられよ、次が三段跳決勝、我々から杉本、中村正の二君出場。第一回目兩君とも軽く十二米餘り、第二回目、第三回目試合は進んで行くベストへは確實だベストに残つたなら氣も上る其れ迄頼むぞ、然し何うだつたらうか、今まで一米九〇の邊をうろ／＼して居た山中の大井君十二米二〇を飛んで、又此處に我等の破るゝは、然も斷然期して居た杉本君が、嗚呼何ふして慰めたら良いか、我輩には分らない、去年の縣體で足を痛め續く今年の春にも遂に破れた、彼、彼をして古の彼であらしむれば大井如きに負を取る君ではないのだけれど足も運命なのだ、只あきらめるのだ、涙で、残るは中村君のみ、君頼む杉本君を慰める爲にでも、丁度其の時第五回目的時我等の先輩松岡さんが來られて「只無意識に跳べ其して無茶苦茶に走れ」中村君敵を守つて走り出した。側でコーナされて居た松岡さん「跳んだ」「やつた」「占めた」其う言つて走つて行かれた。我輩も後について、見事、十二米五二今四

等なのだ、其して三等の差僅かに一糧、も少しだ、第三回目、足合はず遂に駄目、然し何事か十二米五一飛んで、君に追つて居た田中君（興中）七二飛んで又我々が破るゝは、嗚呼残念だ、諸先生に對して、何うしよう、然し君等はスポーツマンシップをよく發揮して呉れた有難ふ此の時の一等山脚の堀君記録十三米四十五。

次が圓盤投の決勝、我々から富田君出場、砲丸投の失敗を残念に思ひつゝ、石光君都合によりて棄權す。

富田君自重してかゝる、恐しい程に投げる、見事なターン、今彼は母校の爲に腕の折れる迄決心して居るのだ、其れが今現はれたのだ、あのターンを見よ、今三十米のラインに迫らんとして居る、良かつたら二等だ！

第四回目、第五回目、井本、小野頭を上げて來た一等は元通り師範の佐伯君、富田君よく彼等を制すが、然し何ふしたものが、初め程振はず、若し彼をして初めの勢あらしめば彼等如き者には思ふべき……是又接戦に接戦を重ね遂に勝を

下中の小野君に譲るゝは……僅か三粒の差だ、何うにかならぬものか、丁度此の時だつた我等の吉岡君があの君の健脚でローハードル第一豫選において見事山脚の長崎君を敗りタイム二十七秒一の萩中新記録で白テープを切つたのは、次がブロードの決勝、我々から吉岡、大田の二君出場。吉岡君ハードルで破れたとは言へ大變元氣だ。安心させたら第一回目、吉岡君六米十七、此の分ならば大丈夫だ君頑張つて呉れ、きつと〜大田君、五米九五、あゝ！君にはスピードが足りない。最も君のあのバネでもう少しスピードがあつたらなら……吉岡君二回目。六米卅二種、太田君振はず、然し見よ春に比してブロードの進走を、六米八〇、七〇、六〇さらに居る何ふしよう若し君がベストへものならなかつたら鳴々！又しても我々の上に訪れて來たものは……吉岡君のベストへ乗らなかつた事だ残念だ〜春だつたら完全に二等でしかも一等と接戦なのに……思へば思ふ程に接戦、其して又師範の堀君を見よ、見事七

米〇二を飛びて大日本中等學校新記録を作るゝは然し公認ではないけれども、堀君の踏切りの確實さとしてスピードのつけ方、フォーム、然し吉岡君を何ふして慮める、我輩の責任だ、然し男だ、否其れよりも萩中に生を求め健兒なのだ、反省だ。〜其うして来る可き近き將來においてきつと彼等を……吉岡君と、大田君と、其して我輩と鴻城の地で誓つたのだ今も忘れはしない、そして二人とも猛練習をやつて居る次がボールの決勝。我々から新人山崎君、重鎮中村君出場競技の白眉とも言ふ可きボール、二人とも元氣盛んに二米八〇で練習、美しいフォームで、八〇、九〇、三米、三米十、二人とも難なくパーパーは三米二〇、中村君難なくパー、山崎君一回。二回。ボールは弓の様に曲る、體が落ちるのだ、ボールさによかつたら、遂に彼は三米二〇で然しベストへは確實だ、残つた中村君、戦友山崎君を慰むる爲に雄々しくも又悲壯にも……此の時残りし者萩商

の右田、田村の二君、然し田村君三米三〇をパーして棄權した、残るは只右田君、中村君の只二人パーは三米四〇へ中村君難なくパー、右田君少し體を廻し乍らパー、パーは五〇へ縣體育大會對記録、中村君見事なフォームで、然も確實にパー、右田君遂に中村君の前には敬し難く兜を脱ぐ、パーは三米五五へ、スピードカーの報する聲も「只今の高さ三米五五は本會新記録であります」中村君自重せよとして又君の實力を信じよ、見る人垣の如し、衆目觀視の中で遂か萩の地を離れた鴻城の地に、今彼は母校の爲に、未だ誰も越した事のないあのパーを今自分が越すのだ……彼の瞳、希望で燃えて居るのだ、只今彼は勝敗を度外視して母校の爲に、飛べ君よ、一本のボールに身を託して今走り出した「あッ」パーは僅かのタツチで……遂にパーする事の出来なかつた原因は、餘りにも意を出し過ぎた精か、否其れよりも彼の良き敵右田君を失つた事だつた、次は四等争ひ、山崎君と佐

伯君、山崎君きれいなフオーで三米十五をオーバー、佐伯君も……。二〇で我失敗すれば彼失敗す、遂に十五で四等、又佐伯君も遂に終りを告げ合計二十點を入れ(フイルド)又芳しからぬ成績を取つた事を悔います。其して逐々應援の爲來られた諸君に厚く御禮申します。

願はくば諸君よ君等の合理的練習の本に、君等の意志の本に、君等の努力の本に、あの榮ある優勝旗はあるのです幸いに自重せられんことを、文拙くして様子もお分りにくい所のあるをうらみします。

(Y N 生)

出場選手名

走高跳 大田 肇 三吉二三男
走幅跳 吉岡 健 大田 肇
砲丸投 杉本 等 富田 義治
圓盤投 石光 吉月 富田 義治
三段跳 中村正四郎 杉本 等
棒高跳 中村正四郎 山崎 内匠
記録表
走高跳 田中 弘(興中)一米八〇(新)
走幅跳 堀 曉男(山師)七米〇二(新)
三段跳 堀 曉男(山師)十三米四五

遂に三九對十一のスコアにて破れた。しかし破れて悔なき試合であつた。選手一同にとつて尊き経験であつた。

つら／＼その敗因を考へて見るに、先づ第一に其の日の朝四時頃から起きて、おまげに自動車でゆられて來た選手としてはコンディションが悪かつたのは云ふ迄も無い事だ。

然し選手一同元気で全力を盡して闘つた。決して我れは他校チームと比較して遜色はなかつたと思ふ。

優勝校は山師であつた。最後にメムバを書いておく。

藤本 大津
中村 落合 マネヂヤイ
C 森澤 F 吉見 G 林 佐々木
吉武 岩本

拙文よく當時の悲壯なる状況を表明する能はざるを恨みて筆を置く。

佐々木軍治生記

山口縣體育大會主催縣下
中等學校體育大會

縣下スポーツ界の王座を占むる縣體育大會主催縣下中等學校及青年團體育大會は昭和七年十月十六日秋色酣なる鴻城の

砲丸投 長崎忠頼(師)十二米三七
圓盤投 佐伯信夫(師)廿二米〇七(新)
棒高跳 中村正四郎(萩中)三米五(對)
尙(新)とあるは記録の新たなを言ひ、對するは對記録を言ふ。

籠球部

春季山口高等學校主催籠球大會
新緑蕪る五月の中旬山口高等學校主催近縣中等學校籠球大會は同校、校庭コートに於て花々しく開始された。

参加校は十一校で、縣外よりは廣島一中が來たのみで、あとは全部縣下の中學校であつた。

新進よく勝利を得るか? 古豪よく新進を破るか? 興味百パーセントなる若人若人との内鬨戦である。

其の日五月十五日は眞夏の午後の如く絶好の競技日和と云はれなかつた。

吾が萩中チームは岡部先生引率の下に其の日(五月十五日)の午前五時半萩を出發して八時に山口に到着し、直ちに休む隙も無く山高に行き、少しバスの練習をしたが、試合前でコートの使用を禁ぜ

天地高商グラウンドに於て花々しく開始された。此の日前日より氣づかはれた天候も少しの雨を催しただけで、概して良好のスポーツ日和であつた。

我々籠球部はマネーヂヤイ共に十一名諸先生及生徒諸君の熱烈なる見送りを受け、十五日午前九時必勝を期して山口に向つた。途中元氣に、十一時着、直ちに高商グラウンドにて練習を行つた。一同元氣旺盛、戦はずして敵を壓倒するの感あり。此の日曇り勝ちにて南風しきりに吹き明日の大會が氣づかはれた。

明ければ十六日、六時起床、一同そろつて野田、豊榮兩神社に参拜して必勝を誓ふ。八時入場、早や場内には各校の選手が過去一年間鍛へに鍛へた、たくましい體を思ひ／＼のユニホームにつつまむオミニング、アツプものすごい。文字通り嵐の前の静けさだ。さて此の静けさが如何に破れるか? 大山口の朝の寒氣は氣持よく身に沁む。籠球部は参加校十三校、これをA組、B組に分け、A組の勝者B組の勝者をもつて優勝戦を行ふ試合法、即ちトーナメント試合法により

られてゐるためシュートの練習は少しも出来なかつた。それ故に練習不足で又コートに馴れて居らず、選手一同も疲れてゐた。無理も無い事だ。プログラムを見るに、なんぞ驚いた事か! 縣下第一の強豪山口師範と組んでゐるではないか、選手一同あんなりした。然し強豪にあつて始めて十分に其の實力を發揮する我がチームは捨身のかまへを以て山師にあつた。時これ十時十分いよいよ會圖の音の音と共に、センターボールは投げ上げられた。俄然火蓋は切られたのだ。吾がチームのセンター森澤君も萩中では大きい、山師のセンターはまだ／＼同君を三、四寸ものす様な強大漢だ! 森澤君も懸命にジャンプする。

萩中チームは始めは非常に元氣よく、其の洗練されたパス、ワークにより、斷然山師を壓してゐたので、敵も恐れて、メムバーを大變更し、全部ベスト、メンパーを以て我に向つて來た。が我は屈しななす／＼奮闘又奮闘!! (試合の進行状態は一々書くまい。)

しかし體力、技術の相違は致し方なく

て行はれた。

A組には前年度の優勝校にして、連戦連勝の意氣ものすこく、又々優勝をねらう山口師範を始めとし、山中、防中、徳商、中等の縣下中等學校の精銳中の精銳に對して本校。B組には徳中、防商、宇中、小農、萩商、下商、これ又接戦につぐ接戦を豫期さるゝ番組だ。本校は第一回戦にて多中とくんだ。八時半愈々中勝。次はいよいよ本校對多中の戦だ。我選手の胸は高鳴り、血潮はおどる。時將に九時三十分、一發の銃聲は鴻城原頭に轟きわたつた。センター、トスは秋晴れの空に投げ上げられた。センター森澤軽くジャンプしてボールを打つ、これは試合開始刹那の状況である。かくしてゲームは進行す。本校選手は最初は試合調子居るの爲多少あがり氣味だ。然しタイムの進行につれて漸時その實力を遺憾なく發し、フオーワード、中村、吉武兩君非常に調子よく、完全に敵をノックアウトしてしまつた。前半のスコア十四對五。悠々たる餘裕をつけ後半にては全

部第二チームにかへた。多中もさる者後半にては必死の努力もすく、我にせまつたが、第二チームは云へ鍛へに鍛へた本校選手には敵す能はず、遂に十時二十分閉戦の幕は閉ぢられた。後半スコア一十對八、合計二十四對十三豫定をリベスト選手の力を充分セーヴして第一回戦を終へた。此の戦に於て特筆大書すべきは未だ三年生の吉武、岩本兩君の働きであつた。君等は猶三年前途洋々たり、よろしく自愛すべし。萩中籠球部のために。

競技、球技、各々白熱戦、各校選手の活躍ものすく、若人、防長健兒の意氣又秋の空の如く高し、將にこれ肉體美の極致だ。さて籠球大會第二回戦本校の敵は山中なり。愈々十一時五十分、山師對防中戦の後をうけて開始された。

これよりさき本校選手間には山中撃破決勝の雄叫び高し。山中選手を見るにひよろくでスクエヤービルトの者は居らず、これは勝てるといふ自信を深くしたが、いざ戦つて見るさ仲々あなざれず、加ふるに敵は百戦を経た古狸、我は未だ

試合不馴のチーム。充分の實力、體力を持ちながら試合未熟のため平素練習の力の十分の一も發揮せず、其の上キヤツプテン天津君は對多中戦にて踵をくじいたが、ファイテング、スピリットに富み、元氣旺盛、加ふるに一軍の將としての責任は重し、決然として涙をふるつて陣頭に立つたが、その涙ぐましい奮闘、選手一同血と涙の努力も報ひられず、黒雲蒙蒙として萩中陣頭を蓋ひ、陣中寂として聲なく、遂に勞冠の鐙は我手を去り、山中軍の手に歸した。

嗚呼!!天無情?過去一年間鍛へに鍛へた、血と涙の努力も報いられず今は悲しき敗殘の將となりて山口の地を去る。選手的心中寂漠として聲なく、秋風又淋し優勝戦は山師對徳中で徳中奮闘の甲斐もなく山師の手に榮冠は奪はれた。かつて我校選手が夢みた秋の優勝旗は再び山師の手に歸した。あゝ残念無念よく言ふところを知らず、しかし思ふに驕れるもの久しからず、猛き人も遂には滅ぶ、偏に風の前の塵の如くに。祇園精舎の鐘の音は殷々として諸行無情の響を傳へて居

るではないか!!萩中籠球部第二チーム選手諸君を見よ!!加ふるに今秋斯界に名聲高かりし齋藤先生を籠球部長として迎へ金城鐵壁、曳に鐵棒!!我萩中籠球部が縣下吾全國に君臨する日の最も近き將來にあることを願言して筆を置かん。終りにあたり我籠球部先輩玉屋氏に感謝の意を表して筆をおく。

(マネジャー 佐々木軍治記)

水 泳 部

第四回近縣中等學校水上競技大會 時は初夏、陽光は燦々として今盛りの青葉に映ひ、新設プールの漣を黄金色に照り映ゆる。是に六月十二日、山口高専水上競技聯盟主催第四回近縣中等學校優勝水上競技大會は華々しく開催せられ、四縣下七校の水上の猛者はその覇を争はんとする。

八時半、プール側に於て開會式舉行、優勝牌返還、會長式辭、選手宣誓は型の如く行はれ、九時十時、二百米自由型第一豫選に戦の幕は切つて落され、悠々白雲の去來し、コースのみくつきりさ靜

まり返つてゐた水は、忽ちにして躍り狂ひ飛沫を上げて蛟龍の争は展開された。A組に我が武田君あり。山師、濱中に次いで三着となり豫選にパス。我が校幸先よしと選手一同意氣大いにする。C組松山君力戦の甲斐なく惜敗。續いて八百米自由型豫選あり。本校の古豪藤本君A組にて修中藤田、山師田村君等強者と組んで堂々奮戦せしも、コンデイション悪く無念や三等にて惜しくも落選。こは我等の意外とする所。B組伊藤君よく頑張りしが、これ亦三着にて落選。十時半二百米胸泳のコール懸る。これには是非入りた。金子、土田二君出場。A組金子君苦闘の末敗れて退き、C組土田君番組宜しく、強豪山師藤尾君の後に續いて入選十一時百米自由型第一豫選。A組の新進吉崎君善戦せしも、水泳部に入りて日尙淺き爲遂に退き、B組藤田君亦練習不足の爲敗る。次に行はれしは自由型四百米豫選。B組藤本君最初よりストローク物凄く修中木村君をリードしてトップを續けしこ二百米。さあれ後に残る二百、八百のリレーの爲二百五十にして中止せ

ざるを得ざりしは返すくも惜しむべきこと。藤本君先日來耳疾あり。今日強いて出場せり。その犠牲的精神責任觀念の旺盛なること誠に賞すべきである。C組伊藤君。八百の疲れ未だ癒はず、これ亦午後のリレーの爲自重して棄權す。残る豫選は百米背泳のみ、武田君B組にあり修中の豪渡邊君等と組み、スタートせしも、直後尾部に痙攣起り遂に中止の已むなきに至り、これが爲、二百米準決勝にも出場し得ざるに至り、我が水泳部豫選に入りしもの僅か土田君一人となり勝算已になく、豫定の如く玉碎主義を以て最後迄戦ふべく悲壯な決心をしたのであつた。

午後、百米準決勝に始まり、濱中山本君一分五秒二の新記録を出す。次に二百米胸泳、土田君奮戦力闘遂に五着となり貴重なる二點を獲得。二百米自由型準決勝にも濱中西田君二分二九秒六の新記録を出した。

二時四十分二百米リレー決勝となる。トップを承るは新進藤田君、「頑張り」の語に勇ましく進んだが焦り過ぎて、實力

出です。他校も僅かに遅れて歸る。續いて松山君より三番吉崎君に至るや、修中山師等の猛者既に大分リードし、我校に遅れしは山中のみ。藤本君、大島商船をリードせんま物凄く進まれしも、如何せん。我が校五着となり四點を擧ぐ。次に八百米決勝あり。我が藤本君出場し得ざるに一抹の寂しさあり。君よりタイム悪しくして豫選に入りしものもあるに、番組さへよかつたならも残念だ。續く百米自由型に濱中山本君更に一分四秒七の新記録を出し、四百米決勝の大接戦に續いて百米背泳決勝となれば、彼のオリンピック豫選に出場して三着となりし修中渡邊君斷然光つて一分十四秒四の新記録を堂々と作る。更に自由型二百米に於ては米子中林田君二分二九秒六の記録を作つて濱中西田君と同タイムとなつた。大會の最後を飾る八百米リレー決勝は夕陽將に入りなんとする六時二十分より行はれ戦況々進んで我軍無々不利の感あり。このリレーこそは一同強が上にも勇み立つ。伊藤君先鋒となり力戦して吉岡君續く君は新進なり。苦闘して好タイムにて

武川は殆ど到る所水泳が出来、一方菊ヶ濱には絶好の海水浴場がある。それで、諸君が自ら率先して水泳部に入らんとする意志なきことを遺憾とする。あの山都山口市の山師、山中等がプールで練習してゐるに比べると我々は誠に幸福な衛生的な男性的な練習場所を有してゐる言ふものだ。山中は今年に一年生二年生を出場させてゐる。彼等が四年五年になる將來の事を考へて見たまへ。下級生諸君、どうか一つ奮發して水泳部に入り、萩中をして縣下の否、日本の水泳王國として欲しい。

これが下級生諸君に對する僕の切實な御願ひなのだ。

水泳は年々レベルを高めて行き、新記録續出の有様で、その傾向は日本に於て特に著しく、今年オリンピック大會に我が雄圖勃々たるものもあるもそれだ。今度の大會に於ても前記の百米、二百米、自由型、百米背泳。更に八百米リレーに於て新記録を合計四つ出してゐる。これから見ても、水泳に於ても充分なる練習と

美しく築き上げてくれた土臺に傷をつけてしまつた。責任は誠に重大だ。誠に申譯もなく慚愧に堪へぬ。

顧みるに本校水泳部の惨敗には二つの原因の大なるものを擧げることが出来ると思ふ。一つは練習不足であり、他の一つはフォームの舊型の爲である。練習不足、これは地理的に言つても已むを得ないことだが、本年は特に氣候不順で水温上昇せず、長く水中に居ることが出来ず且つ六月に入ると臨時考査の爲充分練習出来ず、考査中も練習を軽くして出来るだけ良成績を上げたいと思つたが及ばなかつた。も一つのフォームについてだが萩は偏在して他校と接觸する機會が少ないので、僕の日から見ても今大會に於ける他校のそれに比較して研究すべき餘地多々あるを知つたのである。今度惨敗したが惨敗に依て良い經驗を得た。秋は勝たう必らず。これが我等水泳部の誓ひなのだ。捲土重來の意氣を以て、今春の不面目を回復したい。

萩は水に恵まれてゐる點から言へば他に類なしと言ひたい。二分して流れる阿

歸りたれど他校よく頑張つて我が軍不安なり。柁山君これに次で差を縮めんとせしむ及ばず、ラスト利かすして已む。最後は藤本君なり。山中との差この時十米ばかり。彼勝ちて我負くるか我勝ちて彼負くるか。責任は誠に重大だ。五十、百五十、差は次第に少くなれど何分にも餘りに最初の差多ければ。百七十五、最後のタイムとなつた。此の時未だ三四米嗚呼我負くるか。否我々は藤本君の腕を信じさへすればよいのだ。それ見よ。雀を追ふ隼の如く、魚を捕ふる鯨の如く猛然とピッチを上げたではないか。觀衆は聲を上げた。我々も夢中で手に汗しつゝ、遂に君は勝つた。觀衆は更にごよめいた僅かに一二尺タイムにするも五分の一秒然かも君の功は偉大であつた。

戦は終りを告げた。玉碎、餘りにも果敢なく我が校水泳部は惨敗した。一等修中七十二點に對して十點。しかも何ぞ、昨年破つた大島商船には仇を報いられ、高をくもつて侮つてゐた山中にも敗れたのだ。水泳部マネジャーとして自分は誠に誰にも合はず顔はない。先輩が徐々に

不斷の研究さへあれば誰だつて選手になれるのだ。どうか諸君よ。早速水泳部に入つて呉れ給へ。そして水上の覇となつて。これが僕の下級生諸君に對する切實の願ひなのだ。

縣下男子水上競技大會

雪辱！復讐！これが今春惨敗以來の水泳部全員の意氣であり、念願だつた。來るべき秋こそこの希望の燃ゆ立つ所、全員は見事に團結振りで、倦まざる練習に孜々これ力めた。特に諫早兄——本校先輩にして現今日本的選手として將來を嚆矢とする——のコーチの下にあること約二十日、技大いに進み、必らずや雪辱なるものこの確信を得たのだつた。然るに事すでに己ぬ。大會番日、選手諸君の涙ぐましい健闘振りも、バットコンデイションと出場回数過多に依る選手の過勞の爲に災せられて、又もや商船山中の後塵を拜し、漸く柳商と響を並べて四位たりし事は悲憤慷慨に堪へぬ所だ。人事を盡して天命を待つ、然り、敗れたりとは云へ、我等は萩中スピリットを高調し

正々堂々ベストを盡して戦つたのだ、而して敗れたるは天運にして如何ともすることは出来ぬ。以下記する所、拙文よく選手諸君の健闘を充分表現し得れば幸甚とする。

X X X X X

九月十七日午前八時二十分。戦の火蓋は二百米リレー豫選によつて切らる。泳げせいで飛沫を飛ばしてA組萩中、山中、安中、柳中、津中の五校。我が校は第一水路、アウトコースで少し不利だ然し十二分の自信がある。トップ吉崎君「落着いて行け。いれるな」ビイッ用意！ドン、サット五人同時に飛び込む。素晴らしいダッシュだ劈頭から息づまる様な接戦である。五校皆一直線に並んで、廿五ターンの、依然として一直線だ。セカンド武田君相變らず負けず劣らず一直線サード柁山君調子よく突進するが一直線の平衡状態は少し亂れて柳中安中稍おくれ、山中、津中、第二線に柁山、僅かに頭角を現はす。ラスト藤本君。自信ありげにサット飛び込む。山中上野第二水路藤本について。彼は短距離の猛者、藤本

に肉迫すを見ながら藤本悠々追撃を退ぞけ、息づまる劈頭のリレー豫選に我は首尾よく一着を極めて、實に幸先がよい。二着山中、三着津中。B組にありては師範、商船、柳商入選す。續いて八時卅五分四百米第一豫選。A組伊藤君力泳して師範大谷君に續いて軽く入選。B組藤本君、第二水路にある商船田村君と並行して、老巧なピッチで悠々一着。タイム五分五十一秒。C組にありては柁山君、初めから調子甚だよろしく、餘り出し過ぎてるさ傍から心配する程、他を引き離し、これ亦一着で入選。これで四百の第一豫選は三人共パスしたのだ。意氣高し我等の選手。次に二百米平泳第一豫選。A組には僕。元來小心であるので、皆も色々注意し、僕自身も從容としてやうと臍に力を入れてやつたが、落着き過ぎてか、初めの百で遅れたので、後百をあわて、頑張つてやつと三等で入選出来た。B組金子君。昨日來身體の調子不整。不運にも落選。惜しむべきだ。C組土田君彼は平泳を双肩に擔つて立ち、あはよくば古豪藤尾を抑へんとする人。奇くも、

の豫選で既に顔を合せ、おまけに隣のコースである。藏尾最初よりピツチを擧げたが、土田君、平生のペースを變へず後に續く。百一十五に至つて殆ど並行、百七十五のターンからは全く並行と云つてよかつた。最後のターンで君は手を流して、一等を彼に譲つたが、彼藏尾君、少しは氣味悪く感じただらう。レース中見物の姫御前等は此の接戦に喝采の聲を惜まなかつた。君のタイム三分十二秒。九時十五分百米第一豫選。A組の栗屋君初陣の事とて、あがつたのかスタート悪く、苦闘の後遂に落選。B組藤田君もスタート悪く、惜しくも落選。C組吉崎君山中上野君に稍おくれ、二着にて事なく入選。こゝに百米は吉崎君に今後の健闘を願はねばならぬ。百米豫選終了後、九時半より八百米準決勝。A組武田君、アウトコースで不利な上に、身體の調子思はしからず、最後まで力泳又力泳、よく師範田村、商船野上等の強家に續いて行かれしも、その努力も甲斐なく惜しくも三等で落選、健闘の勞に酬いられざりしは全く遺憾の至り。B組藤本君、戦前すて

に目つぶして泳げるさ樂觀してゐただけに、その悠暢さは心惜いばかりだ、ピツチをうんと下げて、のそり／＼と行く。だのにこれについて行くものは師範河村君ばかり。然し彼も三百四百の頃からへばつて段々おくれれて行く。藤本君、時々顔を上げて笑ひながら泳いでる。ほんまに目つぶしのレースだ。それでも二等と五十米も差をつけて歸る。流石老練な主將たる折紙附の選手だ。C組伊藤君、柳商中野、商船田村、師範大谷等強豪を伍して出陣せられしも、後に四百決勝、八百リレー等あり、力をセーブせしむる爲、中途にして、棄權させたのは闘志満々たる君は甚だ足らの所を覺いたであらう。青年百米背泳後自由型二百米第一豫選B組岸君、初陣にしてあせり、且つ事前耳疾の爲暫く練習中止を餘儀なくせられし爲遂に落選。C組吉崎君、最も悪い第六水路に係らず、よく努力奮闘三着にて入選。D組松山君、これ亦第六水路なりしも調子よく三着入選。タイムは何れも良好だつた。續いて百米背泳豫選が行はれた。本種目は全く本校に取つては勝目なき種

目で、出場三選手も僅か大會前一週間しか練習させなかつた關係上、三君とも落選の憂目を見さしむ。に至つたが、栗屋藤田兩君は來年もあり、伸びる可能性があるから充分練習して來年はこの雪辱をして頂きたい。十一時十五分平泳準決勝僕はA組。藏尾、金江、井川君等の猛者が居るからとても駄目だと觀念してゐたが、案の定落選してしまつた。B組土田君、第一豫選よりタイム少し悪かりしも難なく一着にて入選。愈々午前最後の八百リレー豫選。A組にありて一着師範、二着山中、三着安中。B組にありては一着商船、三着柳商。本校は樂なレースで最初から信じてゐたので普通の如く泳いで二等にて難なく入選。斯くて午前の部を通観するに本校は確實に三等にはなれるさ云ふ信念を抱き、一同一層休養して午後の戦に備ふる所があつた。午後一時戦は再び開かれて、先づ四百米自由型準決勝。本校の三選手何れも選豫をパスしてゐる故、どうしてもこのレースでは勝を制したい。A組に松山、伊藤兩君。願はくば二人共入選してくれ。け

れど伊藤君調子上らず落選せられしは返すも残念。無理もない強豪揃ひだも。松山君、山師大谷、商船田村に次いで元氣よく入選。B組藤本君も樂に三等にて入選。傳統的に強味あるこの種目でかく二人の決勝出場資格を得たこと欣快の至り。次いで百米準決勝。A組吉崎君孤軍奮闘の甲斐もなく果敢に散りしは敗るゝも悔なし。師範八幡君又新記録を出す。一時四十分八百米決勝。決勝戦のトツプだ。藤本君第二水路、我等の喝望は彼の奮闘にかゝる。俄然出發。藤本君は先頭を切つて行く。調子がよいぞ。だが餘り出過ぎてる。三百の頃藤本君や、遅れる。全く最初出し過ぎたんだ。お隣の神商の中野君、第六水路商船野上君並々に君に先んずる。君、師範大谷と並んで進む。六百七百依然中野次第に間を引き離し、野上これに續く。君已に四番目だ。師範大谷は目前だ。のせ／＼。師範田村君君に後ろ、こゝ五六米。河村君は遙かに後。だが藤本君ラストに元氣出です大谷君と二米の差で敗る。是に於て榮譽ある最初の三點を獲得。二時より二

百米準決勝。A組松山君。B組吉崎君。但し吉崎君は後二百、八百の兩リレーに全力を注ぐべく自重されて遂に棄權。松山君アウトコースにあり。少し不利。飛んだ。君今日調子よし、ラストよく利きだ。君今日調子よし、先頭山師兒玉君商船永久君を引き離し、先頭山師兒玉君に肉迫してやむ。二分四〇秒、青年背泳の後平泳決勝。午前豫選準決勝で出した力を更に發揮して古藏尾を押へる。土田君、赤決心を胸に秘めて黙々スタートに立つ。ドン！藏尾君は第六水路だ。彼一流のフォームで猪突する。土田君、彼を追ふ。然しどうだ。彼の元氣に引きかへ、君は午後ばどうも調子が悪い様だ。百米一六分差がついた。だが土田君依然として彼につゞき、他の四名を後に従へて少しも衰へぬ。最後のターンだもう残念だが、彼を押へる確固は失せ遂に二着豫選で三分十二秒出した元氣が出たらなあさ一同残念至極。こゝに五點獲得二時三十分大會第一の呼物人氣物たる二百米リレー決勝だ。豫選にて已に大接戦を演じただけに一入興味を暖る。我が校如何なる不運か。厄附の最悪な第六のアウト

コースだ。トツプ吉崎君ビイッドン！一齊の飛沫、素晴らしい接戦、陸上の歡呼。一直線、何れが雄か。セカンド武田君、あつごうしたのだ。君、頑張れたがコースは不利。君今日調子悪し、師範一米他をリードし後四校大接戦、本校約一米半通る。松山君サード、此の差を縮めんと大いに奮闘せられしも、今朝來これで七回出場、殊に三十分前二百準決勝の疲勞で充分出でず。挽回ならずしてやむラスト藤本君。さばせじと物づく突進したが、八百決勝後一時間も立たず、殊に中距離選手にして、かゝる短距離に臨むの不合理なる爲、萬事休せり。遂に涙さ／＼に退く。こゝに山中はラスト上野の活躍によりて遂に二等を獲得し、彼我位置を殊にして我に暗影を投ぜしむるものがあつた。さばれ、勝負は時の運。最後まで雄々しく戦ふのだ。中二十分おいて又や二百決勝、松山君出場。まだ疲勞は充分癒はぬだらう。だが頑張つてくれ。君獨特のラストの利き振りは我等の期待に添ふに充分だ。出發。君は少し遅れてる。百一十二五もう出してよ

い頃だ。それを出したぞ。師範児玉を怒ち抜く。後二十五だ、頑張れ。商船藤本にぐんぐん追つたが、準決勝のタイムより遙かに悪く、遂に三着になれなかつたのは全く疲労の致す處。だがよく戦つてくれた。又も三點。山師八幡二分二十九秒八の新記録を作る。次百米背泳決勝。本校より出場者なし。寂寥。山中上野一着商船二三着を占む。山中は全く上野君の奮闘に依存してゐる。彼が全く點を稼いでゐるのだ。

三時三十分四百米決勝。藤本、柁山二君出場。今回は會の進行がスピード化して本校の如く、幾種目も一人が兼ねてゐる選手諸君に取つては全く不利な同情に堪へぬ所だ。二君にしても、前レースから五十分乃至三十分の休養に過ぎぬ。涙ぐましい。藤本君八百の時と同じく第二水路。八百の優勝者中野君は第一水路に師範大谷君は第三水路に、類馴祭の商船田村君は第四水路、我が柁山君は又も厄附のアウト第六水路だ。強豪と強豪。古夢と新進。進みつゝ、追ひつ拔かれつ可成りの接戦ぶりだ。師範永久君先づトツ

ブを、大谷、田村、藤本相並び、中野や、遅れ、柁山君最後を行く。然しこれは戦法だ。兩君は後に八百リレーの大役がある。柁山君を餘り疲労させては折角の好調が最後に出なくなつては、わざとこの決勝ではゆつくり泳がせたのだ。さるほごに師範大谷君、永久君に代つて先頭を切り、中野第三位、藤本君は第四位を進む。後あれを抜け。けれども、中野は最後ほど出すのだ。次第に君と藤をつける。商船田村君藤本君に大分おくれたついにゴールイン。君は又も四等。善戦その功を爲さず。惜しむべし。柁山君六着となり、こゝに四點を加へ、總計十七點を算す。次に百米決勝あれども、本校より一人の出場者もなく興味浅し。師範八幡君又記録を破り、山中上野、安中藤本物凄く大接戦を交へた後上野君遂に凱歌を奏した。

最後だ。最後の八百米リレー決勝のゴールが掛つた。時に午後四時。豫想以外の番狂はせに依て、完全に敗者の憂目を見なければならぬ。だがいざさらばやみなんだ、最後まで雄々しく堂々戦はう

藤本君出場回数九回、柁山君十回、全く氣の毒だ。だが頼む。頑張つてくれ。トツ吉崎君。セーウした力のあらん限りを盡し、二位を保つて、セカンド伊藤君に繼ぐ。伊藤君よく頑張り、善戦奮闘したが、商船の若冠野上君。新進の意氣もて、遂に君を抜く。君及ばずサード柁山君これに續く。屢々商船をリードするチャンスを得ながら、焦れども、心は矢竹にはやれども、疲れし腕をば如何せん。遂に抜き得ずしてラスト藤本君に譲る。商船は彼の田村君だ。君も亦元氣よくストロークに牙を見せて、屢々彼に迫られしも、彼もさるもの、老巧なる彼始終よく頑張る。百五十、後五十だ。差二米どうかならぬかなあ。頑張れ、そこ頑張れ。山中我に後るゝこ三米。御商これに續く。藤本ラスト頑張れ、だが遂にゴールイン。田村君、遂に君の追撃逃げ終せた。差二米たらず。三着なる師範はこの間終始先頭を切り、商船と五六米の差で勝を制し、山中我に後るゝこ三米半。

武道部記事

一月十一日より十日間寒稽古施行、二十三日武道大會開催皆勤精勤賞授與。
五月七日 武道小會開催。
七月二日 武道大會開催。
八月二十日より十日間暑中稽古を施行。
九月十九日 武道小會開催。

柔道部

下關遠征記

五月二十一日 土曜日 雨
本日放課後 本校武道選手二十名は、金子先生の優渾なる御訓戒を受け、岡部、津村、山川、大村の諸先生に引率されて玉江驛集合の上、愈々下關遠征の壯途に登つた。時に二時四十分。下關驛着。下關の生徒多数が出迎へに見送つてゐたのは、印象を受けた。雨後の事さて道はシロコの様だ。驛前の長陽館に着、夕食後軽い散歩を取り互に明日の奮闘を期待しながら寝に就いた。
五月二十二日 日曜日 晴
期待の日は明けた。快晴だ。關の朝は白

(K、T生記)

い朝霧と一緒に海からやつて来る。午前九時、日和山公園を通つて下商に向ふ。對岸の門司が見ゆる。朝霧の晴れた町は全く朗らかなつてゐた。關中の大きなコンクリートの建物に連らなつて之もコンクリートの下商がある。

一同控へ室に案内される。柔道部に強剛小河の顔が見えないのが流石に淋しい君は本校柔道部の第一人者、よろしく静養自重されて將來奮闘を續けられん事を切に望む。九時四十分、試合開始。本校のメンバー左の通り。

大將	重藤	小田
副將	後藤	長岡
三將	中原	竹内
	八次	第二 羽田
	佐伯	先鋒 江島

先づ下商と本校との紅白勝負に戦端が開かれた。然しこの試合は、八次中原の頑張り、後藤の健闘も遂に空しく敵に三將を残して惜散す。何しろ敵に數名の有段者あり、而かも策戦を弄し、おまけに本校のは平素の力が一寸も出てはゐなかつた。之は萩中の缺點中の缺點で、相當

の業を持ちながら有段者に對するに、徒に恐れて覇氣がなくなる。我等が壯途の主眼は此の點である。

然し斯様に試合練習の回を積まば追々この缺點も直る事だ。その時の萩中柔道部の奮闘こそ望ましいものがある。要は敵を選ばず業の十分なる發揮、常なる攻撃精神にあるのである。積極的の攻撃は防備を兼ねるものでもある。

次は下中との對勝負、矢張り敵陣には二三の初段が見ゆるが「今度こそは」と我の闘志は既に敵を呑んでゐた。試合開始 新尖江島 先鋒に出て敵を引ばつてゐるが「エイ」と背負。意氣は充分氣合はよし敵は仰向に投落されて「ドン」「一本」。快なる哉背負の美技。次々羽田強靱の腰を入れ飛ばせば又半圓を畫いてすつ飛ばす背負の快。技此處に於て沈澁し勝ちな我軍は調子づき揃ひも揃つて攻め立てた。缺點であるだけに、調子づけばさても強くなる。又竹内がやる。中でも副將後藤敵の大將資格の副將初段の強引を引外し引外し遂に押込みに打ち取りしは流石。大將重藤は我校切つての強

力、あの強力で敵將の首を締めつけたからたまらない、直に參る。結局七對一の好成績で完全に關中を押へて了つた。

一先づ休憩。その間に實踐商業と下商との對勝負が行はれ、僅か一二點の差で下商が勝つた。この分では大した事は無い。實商にも四五人黒帯があり大將は夜學部の髪を分けた青年だけども。

最後の實商對本校の勝負が對試合で行はれた。我等は少し疲れ氣味であつたが攻撃精神一杯に猛然と攻め進み無二突進した。竹内、長岡、小田、等之を最後とばかり渾身の力、全力を傾倒して戦つた。道の堅陣も狼狽を見せ後藤重藤は引分け。この引分けは審判が成つてゐなかつた。審判は神聖なるも後藤の場合には實に残念であつた。審判が試合を見てゐないのである。でも勝つた。又一點の差四對三で敵陣を踏にかける事が出来た。試合終了後約三十分亘り稽古を、後茶話會が催された。こんな成績で遠征の壯途は終つた。思ふに萩中に五六人の初段者があつてもよい。必ず作らねばならぬ。そうしたら黒帯に馴れて来るだらう。

午後二時半、下關を自動車にて長府に向ふ。赤間宮及び乃木神社に參拜し大いに萩中柔道部の將來を祈る。

午後八時一同無事に玉江驛着。解散。斯くして一段々練習を重ね廿日の柔道部を再現したい。此の點に於て今日の壯舉は實に有意義であつたと思ふ。

柔道部の諸君！再興の氣に燃ゆる萩中柔道部を一層強く美しく育て、下さい。終りに引率の諸先生の御足勞を感謝致します。

五年生 佐伯記

萩體育聯盟演武大會優勝記

力の伴はざる正義は無力なり。正義の伴はざる力は暴力なり。一パスカル。然し天下技多しと雖も日本武道程力と正義とを象徴してゐるものは他にあるまい。又これ程ビツタリ日本人に來る修養法はあるまい。この日昭和七年九月十八日滿洲事變一周年記念日なり。この意義深き日、萩市體育聯盟主催の下に第一回演武大會は行はれたのであつた。遠がは大會午後一時には、さしもの明

倫大講室も觀衆が我もく、一杯につめかけた。纏て福田會長並びに審判の挨拶と共に開演の幕は切つて落された。審判は教士千葉五段、職端は萩中對萩商。何か小輩ども萩中の意氣は凄かつた。

(○勝 △業有 ×引分)

- | | |
|----------|---------|
| 本校 | 萩商 |
| 和田 | × 村岡 |
| ○野村(足拂) | 松浦 |
| 江島△體落 | ○田原(抑腰) |
| 羽田△背負投× | 細田 |
| 小田 | × 吉村 |
| 長岡 | × 道源 |
| ○竹内(小外刈) | 田村 |
| 佐伯△抑込 | × 石橋 |
| ○杉本(足拂) | 藤村 |
| 中原△背投 | × 田中 |
| ○石光(跳腰) | 上田 |
| 矢次△抑込 | × 金子 |
| ○小河(内股) | 山中 |
| 後藤 | × 兒玉 |
| 重藤 | × 中谷 |
- 見よ將師大刀に颯らんと馬上頻りに焦てども疲馬の更に進まさるを。豫期に進

展せずして遂に五對一。でもほつこ息ついて控室に歸つた。

「馬鹿！此の態は何だ。たつた五點！こんな事では優勝出来んぞ」選手はどなられた。津村先生の腕は空を打ち頭上に鳴つた。立派な優勝それが先生の優勝であつた。

先生の熱誠、猛烈だつた練習、學友の感激に満ちた校歌の激勵、萩中の面目。思ひ合せる選手は堪らなかつた。一點を敵に譲つた江島は本當に涙を流してゐた。

あゝ感激この感激。この時はや優勝の因がすでに出来上つたのだ、これ正しく風蕭々として易水寒く壯士一度去つて再び還らざる感。諸君が萩商對萩青三對二の試合に熱中せる間萩中控室にはこんな事があつた。吾々は青年を敵に廻して奮起の闘志が湧いた。

選手はこの感激に我を忘れて躍り出れば戦は歌々たる中に殺氣さへも含んで開く。西側萩中の選手溜には闘志先刻に倍して峻烈凄愴なるものがあつた。

本校

青年

和田 × 福田

野村 × 石川

○江島(背負投) 能美

○羽田(巴投) 阿部

小田△巴投 ○岡(大外刈)

長岡 × 山本

竹内△大外刈 × 岡崎

○佐伯(業有二本) 熊野

○杉本(體落) 三浦

中原 ○津田(背投)

○石光 仁保

○矢次(巴投) 佐々木(掃負)

○小河(業有二本) 赤川 初段

後藤 ○木村(抑込) 二段

重藤 ○横木(抑込) 三段

あゝ見よかくして遂に優勝の大旗は萩中の手に一開け！高らかなる校歌の高唱を。選手は努力は遂に今こそ報ひられたのである。

萩中柔道部も永遠に覇者たれ。

大會得點表

	萩中	萩商	青年	計
萩中	一	五	七	一八
萩商	一	一	二	二七
青年	三	四	一	一〇
				一七

(佐伯記)

宇部遠征記

萩の地に於て萩商業、明倫青年團と戦ひて見事勝を制した吾等柔道部選手十人の者は、昭和七年十月二日、宇部へ遠征す。試合は即日行はれ、場所は宇部實踐商業の道場、相手校は初段五人を有する宇部中學、二段及び初段合せて十三人と云ふ剛の者揃ひの宇部工業の二校であつた。左に吾校選手の奮闘状況の概略を述べよう。

第一回戦 宇部工業對萩中學

先鋒より羽田、長岡、佐伯、竹内の諸君は敵の得意なる寝業を懸命によけ立業に移らんと思ひしも、何しろ敵の猛襲に堪へかねて敵に勝を譲る。小田君は初めより攻撃的に出で君の得意とする足拂ひ

で「業あり」を取りしも寝業で敗れた。中原君は抑へ込み、私は絞で負を取つた次は小河君相手は相當良い體格を持つてゐたが、君の得意な内股を以て「業あり」を取つた。然し敵は立業は君には及ばぬと見て急に寝業に轉じ執拗に纏ひ付きて遂に横四方に抑へ込み、君の跳ね返しも効なく惜敗す。續いて後藤君、相手は二段の闘將であつたが、君盛に襲撃し最も得意とする内股を以て見事一本を取り君の強味を遺憾なく發揮した。最後は大将重藤君で勇敢に相手の寝業の魔手を避けしも、流石相手は寝業に妙を得、遂に抑へ込んでしまつた。君幾回も覆さんとして力闘せしも、敵の固め愈々強くなり君の負。斯くして彼と我とは九對一で無念大敗す。

第二回戦 宇部工對宇部中

宇部中も宇部工には敵し難く六對〇で敗北す。

第三回戦 宇部中對萩中

本校の羽田君盛に攻撃的に出で、君の得意は業也投で相手は「業あり」の愛き目に逢つたが相手もよく防ぎ引分とな

る。次は長岡君は絞め、佐伯君は關節で惜しくも破れた。小田君初め立業で雙方戦ひしも、敵隙を見るや、すばやく寝業に移り、抑へ込みで君の負となる。次は中原君で、相手はすばらしい元氣を出して狂襲し、君は相手の大外刈のために投げられ負となる。その次は私でござん調子でか辛じて一本取り得た。小河君續いて出で、君には相手は敵し難く内股を以て「業あり」を取られ、續いて又あつさり過ぎる程あつさり立派に一本を取られて相手は負となる。次は副將後藤君で相手は前の君の業に恐れてか防備に努め隙を見ては寝業に移らんと思へしも、君は相手を引き起して倒して「業あり」を取る。相手は今度以前にも増して劇しく寝業に引き込まんとするを君よく防ぎ終りに引分となる然し此勝負は君に勝目は充分あつたのを引き分けとなつたのは吾等は勿論口惜しかつたが、本人後藤君は頗る残念だつたこと、想ふ。最後は大将重藤君で君よく戦ひしも相手は巧に寝業に引入れて君を亦横四方を以て抑へた。然し幸にも君は相手を覆して起き上つた。

すると亦もや君の油断につけこんで亦同業で抑へ君全力を盡して起きんと思へし敵の固めよろしきを得終に君の負となる。本校の得點二、宇部中の得點五と云ふ成績を以て再び吾等の負けと云ふ悲運に陥つた。此の二回の試合を通じて考ふるに、此の敗北の主原因は吾等の試合慣のしなかつた事と寝業の練習の不充分とであらうと思ふ。吾等はこれを痛切に感ぜた。今後試合に勝たんと思へば須らく寝業練習すべしである。

左に吾校選手氏名及び成績を掲げん。

- 宇工 萩中
- 岡本……………重村
- 中原……………後藤
- 内山……………△小河
- 中田……………矢次
- 原田……………中原
- 木村……………△小田
- 西川……………竹内
- 重本……………佐伯
- 藤本……………長岡
- 藤山……………羽田
- 宇中 萩中

- 白木……………重藤
- 藤田……………△後藤
- 上條……………○小河
- 堀之内……………○矢次
- 藤田久……………中原
- 坂本……………小田
- 秦……………竹内
- 野村……………佐伯
- 西村……………長岡
- 中村……………×羽田

【附記】

最後に尙一つ言ひ落したことは、誰知らぬ宇部の地に於て、萩中先輩上田、細田兩氏並に在宇先輩諸氏が吾々に種々便宜をお與へ下され且つ激勵下されて、吾々一同感泣した次第である。吾々は此の紙面に於て前記諸氏に對して、厚く感謝の意を表します。(矢次記)

山口縣體育大會

明くれば十五日、愈々大會が開催される。昨日の疲れも熟睡に依つて全く去り頭腦がすつきりしてゐる。参加校二十校が二組に分れ更に甲乙の

二班に分かれて都合四組での戦ひである本校は一組甲班に入つてゐる。山中も宇工も甲班、周中は大した事はないが小農は我にまつて可成りな強敵だ。然しこのコンヂションなら成績は良好だらう。

第一組乙班には濱寺にて優勝せし豊中第二組甲班では徳中山師、乙班には防中萩商はこの乙班の樂な組に割込んでゐる試合タイムは六分、總突法である。

第一回に萩中は先づ山中と組んだ。山中は全部二段の猛者揃ひの起陣容一今年京都武徳殿に優勝し尙今回の縣體に優勝し中堅、李君は京都にて個人優勝してゐる。組むと見るや否や直に寝業に引込まれた。何しろ全國での寝業の山中である本校矢次は第二先鋒に出で最後までよく健闘を續けたが惜しい所で抑込まれ遂に全波に歸した。然し彼の滿洲演武大會で優勝せし宇工が始めから足に噛りついて行つてでさへ一對零にて破れてゐる。山中の堅壁と思ふべし。

次は小農、好敵ござんなれ。之は初段三人擁してゐる。中堅小河組と見るや得意の大外見事功を奏し先づ一點。次に

老剛矢次終業に傾く附録ふをば、面倒な
り逆襲に出で、抑込み又も一點、強剛
後藤、内股見事極れども一寸の所で肩が
附かず惜しくも業有、後あせれども機會
を逸して引分けてしまった。敵もさるも
の唯にては點を許さず敗戦感するや猛
然と起り先鋒と大將とに二點を得て二對
二。萩中としては惜しい一戦ではあつた
この回得點二點。蓋し我に勝味ありしは
言ふ迄もない。

三回目、萩中對周中 頭より呑んでか
れば周中必死の頑張り。然し立業は縣
下に名うての萩中、敵頑張りに頑張れば
追撃鋭く又しても大業物小河跳腰に一本
極める。矢次、後藤、どうしても立たぬ
奴を抑込に行き二點を又しても擧ぐ。先
鋒大將はさすがに堅壘中の堅壘ごころ、
遂に抜けず三對零にて大勝。

最後の一戦は寢業の宇工。五年重藤、
矢次、中原、久しく鳴をしづめてゐたが
何れも悲壯な決心が顔に表はし全力を奮
つての最後の頑張りである。見よ重藤、
中原の猛烈なダッシュの攻撃を。前回は
眼を負傷せし矢次の涙ぐましき健闘は遂

に宇工の老剛木村と引分けとなり重藤以
下何れも奮闘空しく遂に勝を譲つたので
あつた。

その間萩中得點後藤の一點、小河の二
點、矢次の二點、合計五點を算し甲班の
三等となつたのであつた。

思ふて見るに全回を通じて審判が寢業
本位であつた事は甚だ遺憾。私は近來の
審判法の趨向を知りながら舊習のため業
の轉換に苦痛を感じる唯それだけの理由
での寢業本位の山口縣審判に腐敗の臭氣
を感じるのです。この點に於ても將來山
口縣の柔道界を率ゐて立業の本校柔道部
であらねばなりません。本縣での優勝そ
れは全國での覇を意味します。

然し萩中は業が未だ若く従つて闘
志が不足してゐる。氣合の充實氣の魄の
鋭さ、敵も味方もその迫撃力に荒膽ひし
がれるといふ所が少しも見られません。が
今回萩中の立業を十分發揮するチャンス
はなかつたが觀衆に立業萩中の恐怖を抱
かした事は確かだつた。
終りに僕の五年間の経験から見て他校
の段附の案外弱い事だ。たゞ素質ある萩

中としてはそれに對する恐怖心を除く事
だ、平氣でぶつつかる事だ。萩中柔道部
の隆盛は則ち諸君自身の問題だ。諸君一
人一人が眞摯な練習によつて豊度胸を積
まれる事以外に柔道部の再興法はないの
である。諸君の何れよりも最も豊富な經
験からおしてこつてある。たゞ「努力」だ
らすが競争各一人一人の自覺に待つ他
はない。

僕は萩中柔道部の委員として今再興の
柔道部を、萩中五年生として勇氣に燃ゆ
る萩中柔道部を大きく育て、欲しいんだ
學校のために、先輩のために、君の感激
の生海を飾るために、なつかしい萩中柔
道を再興してほしいんだ。
「エイ」と氣合をかけて一つ元氣に
やつて呉れ給へ。(佐伯記)

劍道部

下關遠征之記
本年三月新谷、岡本、阿武の三兄を送
り出し、且又木藤、中村の兩君を送り出
して、一度に五名を失つた我が劍道部

は淋しかつた。然しこの大打撃の中にも
我等は一には之等先輩の意にも酬ひ、母
校の名譽のためにも大なる努力を重ね
た。かくて吾等の日頃鍛へたる腕を試練
すべく、新緑滴る初夏、本校最初の擧
る下關遠征を舉行さる。

五月二十一日、土曜、この日午後より
小雨。放課後直ちに汽車にて我が劍道部
の選士十名一始めて出場する三年生四名
を加へて一は玉江驛より遠征の途に上る
明日の天氣を西方の夕焼に託しつゝ。六
時半下關驛着。夕方面も雨中を侵してわ
ざ／＼お出迎へ下され、且當日の旅館ま
でお送り下さつた下關商業學校の部員の
方々の御心遣ひを感謝しつゝ、宿に着く、
一同元氣旺盛なり。

五月二十二日、日曜、我等の久しく待
ちたる試練の日だ。此の日朝より一同の
氣にしたる天氣もからり晴れて、若々
しい初夏の新緑に照りつける太陽はさな
がら、初めての遠征の日を祝する如く選
士一同絶好の試合日和にめぐまれて、意
氣益々高し。
あゝ、下關原頭に凱歌を揚げ得るや？

將惜涙を流すか？

八時旅團出發。本日の試合場たる下關
商業の道場に向ふ。集るは下關中學、下
關商業、下關商工實踐の三校。九時試合
開始さる。
第一回、先づ下商と組む。因に當日は
全三回とも一本勝負の個人試合なりき。
最初の遠征、而も最初の試合の故なるを
以て、我軍大いに奮闘せしめ、武運つ
たなきか、練習不足か。遂に四對六にて
本校敗る。苦しい試練だ。

- | | |
|-------------------|-------|
| 下商 | 萩中 |
| 先鋒○馬場 | 山本 先鋒 |
| 新内 | 新谷○ |
| ○太田 | 湯淺 |
| 丸山 | 三村○ |
| ○舟木 | 山本正 |
| 長部 | 堀○ |
| ○郷村 | 梶井 |
| 久岡 | 田村○ |
| ○藤井 | 木本 |
| 大將○梶 | 水津、大將 |
| 第二回 直ちに商工實踐と試合。選士 | |

の心中には悲壯の氣がなぎり、一氣に之
を斃りて前戦の恥を雲がんとす。今回最
初の出場にも拘らず、三年生諸君の大奮
闘により六對四の成績により、前戦の雲
恥をなす。一同の氣大いに揚る。メンバ
ー左の如し。

- | | |
|---|-------|
| 下實踐 | 本校 |
| 先鋒○渡邊 | 山本 先鋒 |
| 中村 | 新谷○ |
| 友田 | 淺湯○ |
| 香野 | 三村○ |
| ○大西 | 山本正 |
| 太田 | 堀○ |
| ○中島 | 梶井 |
| 狼 | 田村○ |
| 熊井 | 木本○ |
| 大將○御原 | 水津 大將 |
| 第三回、最後の下中との戦。暫く休憩
室にて休憩。箸を練る。前戦の氣に乗じ
て我が鋭劍にて之を一蹴し去らんの熱さ
意氣、選士の胸中に湛る。再び此の感一
下關原頭に凱歌を揚げ得るや？將惜涙を
残すか？が一同の胸中を走馬燈の如くめ
ぐる。我等の血は躍つた。 | |

大いに氣を取り直して力戦苦戦した選士のかひもなく、四對六にて道に再び恨を飲む。選士の胸中如何。苦しい神の試練か？努力の不足か？メンバー左の如し

下中 本校

先鋒○山本

○吉原

吉村

日吉

中西

○土淵

永郡

○福永

○中村

大將○岡田

水津

大將

息づまつた試合の完了せしは正に十一時。あゝ。結局我等の力戦も及ばず、下關原頭に恨を残さればならなかつた。試合を願ひて——本校最初の遠征さて、我等は随分の苦心をなして奮闘せしにも拘らず此の通りの成績！止むなく今次の雪恥を期さればならぬ。幾度も先生に、先輩諸兄に、又度々の本誌にも注意され、述べられたる諸點が今も尙我

等の短だ。永久に昔の短が今日の短でありたくないものだ。この點御研究を希ふ我等の短彼等の長、相おきなひて今次こそ見事下關原頭に高く、凱歌を揚げ得られん事を期待して止まず。

敗軍の將兵を語らすまかや。直に三校の部員合して、同道場内にて練習稽古をする。之又火花を散らし、體のあらん限りこの好機を逸せじと稽古をなす。特に當日は諸校の十餘名の先生方には御疲をも願はれず、我等の爲に御熱心にして、御懇到なる掛稽古をして下さる。我が部員全力を盡して之に向ふ。紙上をかりて特に當日の先生方に厚く御禮申し上げます。此の間十一時より十二時まで約一時間の稽古。

終つて、下商主催の歡迎茶話會同道場内にて催さる。四校の柔劍兩部の部員一同一堂に會して、有難く充分の歡待を受けて歸館の途につく。

三回の試合、掛稽古、道場内の稽古の三つは尊い經驗と、多くの學ぶべき點を興へた。而して特に掛稽古と、道場内の稽古と我々が到底試合のみにては得ら

つて行く。敏速な籠手業を武器としてゐる。この成績は我等に如何なる感起さしめたか？ 萩商も強もあなざるべからずと云ふ感は勿論起きたが、我等を内心喜ばしたのである。萩商があつたに青年に勝てば萩中までもあの位に勝てない事はない。さすれば勝負は萩商と萩中の試合にある譯だ。然るに萩商は殆どが保守的に出て勝つてゐるのだ、今我等が日頃の教に従つて猛烈なる攻撃に出たらば必ず萩商を倒し得るにきまつてゐる。よし我等は攻撃一天張りに出て機先を制すのだ。我々の心には少しの餘裕が出来た。見れば岡部先生もこの光景を見て微笑して居られる様であつた。遂に萩商10點青年の點の得點で萩商が勝つた。

次は愈々萩中對萩商の試合であつた。萩商は青年に勝つた勢を以て萩中をも居らんものさ、その意氣やあなざるべからざるものがあつた。先づ我が校のメンバーと戦績を掲げやう。

れぬ或者を與へて、實義あらしめたいと願つた第一回の下關遠征をして益々我等の期待以上の効を得しめた。

最後に、當日は日曜にも拘らずかくも盛大なる舉を我等の爲にお催し下さつた三校、下中、下商、下實踐の先生方及部員諸兄の御盡力を紙上をかりて厚くお禮申します。特に當日試合場たりし下關商業學校の先生及部員の方々の一方ならぬ御盡力を併せ謝します。(堀記)

萩市體育聯盟主催第一回萩中、萩商、萩聯青對抗武道大會

九月十八日、それは我が國民が誰しも回顧せざるを得ない日である。この記念すべき滿洲事變の一週年に當る日萩市體育聯盟主催第一回萩中、萩商、萩聯青對抗武道大會は明倫小學校講堂に於て開催された。

第一回に優勝旗を獲得するに云ふことは名譽であり且それ以後の回に非常に有利な事であるから、我等は萩中の運開きの爲にも今年には必ず優勝しなければならぬ。この大會に優勝旗を獲得し得な

○服部正吾——山村虎雄
○木本靜庵——萬屋吉雄
○齋藤孝正——藤田正藏
○堀政一——有田健助
○田村市——竹田吉治
○山本正夫——倉増忠雄
○堀井茂——池田吉二
○中原正久——樋田富祐
○三浦尙彦——原田榮
○藤田佳照——長岡良一
○室田了——長井勇
○村岡統一——河上忠雄
○松本信義——杉山良介
○先鋒今や兩軍の先鋒はその劍先を交へたのである。靜肅な眞劍は緊張しきつた空氣が室内に充滿してゐる。選手の一進又一進の動作に應援する萩中健兒の熱した眼がついて動く。それは應援者の眼から見る見ゆる線によつて採られてゐるかの様にも思はれた。應援者の心は選手に一致してゐるのだ。その一舉手一投足に「勝つてくれよ」と云ふ應援者の強い、無聲の眼光が力添してゐるのだ。そこには如何なる聲援にも勝るものがある

かつたら縣立萩中學校の名譽にかゝるぞ。お互に勵まし合つて精勵して來た過去十日、殊に九月の新學期が始まつてからは一段の緊張をもつて劍道の二先生及瀧口先輩の熱烈なる指導の下に、手足のまめも、眩からの血も何かわ、毎日の放課後を劍道に全精力を傾注して、準備おさ／＼怠りなき我等だ。

あゝ遂に待望の十八日は來た。萩中の爲に我等の實力を發揮すべき日、積み重ねたる刻苦精勵の總決算を爲すべき時は正に當來せりだ。暇はん哉、時到来。

愈々午後一時より、明倫校庭に於て、萩中應援團は柔劍道の選手を圍んで校歌を合唱した。「こゝまでして戴くからにはどんな事があつても勝たなくては」我等は必勝を各自の膽に銘じた。責任の重い事もつく／＼感じた。校歌終るや直ちに講堂に入つて開會式に參列す。藤田中將のお話、其の他があり、我等は公明正大に闘はん事を誓つて控室に退き、腕を撫して機を待つ。劍道の最初は萩商對萩聯青であつた。青年は萩商より強いだらうとの豫期に反して萩商はぐん／＼勝

萩中 萩商
大將 ○水津清信——小川貞雄
副將 ○武田正典——木川茂副將

「勝負それまで」審判の聲と共に萩中の勝つた時、「ハア」と萩中軍は安心と喜びの太息をする。この一致團結の攻撃に如何なる敵も破れない筈がない。村岡の攻撃は物凄かつた、三浦も軽く面二本で原田を屠つた。中原の拔胴は正にフライングブレイであった。萩中の攻撃は物凄く楊井、山本、田村續いて勝ち萩商すこしあがり氣味。堀、齋藤惜しくも敗る。木本勝ち、服部は非常に元氣よくよく攻撃に出たが惜敗した。武田の横面と面はよく機先を制したもので實に萩中の一同を喜ばすに充分なるものであつて萩商木川君をあきれさせただらう。水津衆望を貢ふて立ちよく頑張つたが惜しくも敗れた。實力は確かに水津にあつたのであつたが實に残念であつた。結果は萩中8點萩商7點で我等に凱歌は擧つた。

萩中 萩聯青

午後一時より、神原小學校講堂に於て我が校、宇部中によりて、戦の幕は切つて下された。

數日前、先生より、「先手を取れば、後の二本は取られてもよい」との事を守り、皆能く奮闘し、先手の數に於ては、引分をこつた、がしかし、此を三本勝負の勝敗から論ずれば八對二にて惨敗して居る。

宇部工士の勝敗は？普通のコンディション出ずしても六對四にて彼等を敗る事を得た。

第三回は第一回のメンバーを變へて宇部中と再度、竹刀を合はせた。結果は、奮闘のかひなく七對三にて再敗した。先手の數から云ふと、全敗であつた。

此等の試合を通覽するに、實力は殆んど相異せず、唯引上げの際、油斷して敗けるのが一番多かつた様に見える。又意氣が少し足りなかつた事も敗因をなして居ると思ふ。

我等は、引あげの際をよく氣をつけて油斷せぬ様に、練習する事が必要だと思ふ。

大將 ○○ 水津清信 — 小田秋彦 ○ 大將副將 武田正典 — 片山榮熊 ○○ 副將 服部正吾 — 堀上三郎 ○○

- ○ 木本靜庵 — 横山留一 ○
- ○ 齋藤考正 — 齋藤岩夫
- ○ 堀 政一 — 増原 泰
- ○ 田村 甫 — 細田義熊
- ○ 山本正夫 — 細川 晃
- ○ 楊井 茂 — 藤村春好
- ○ 中原正久 — 西郷三郎
- ○ 三浦尙彦 — 野原國忠 ○○
- ○ 藤田佳照 — 藤原元明 ○○
- ○ 室田 了 — 小方 鼎
- ○ 村岡統一 — 阿武義輔 ○○

先鋒 ○ ○ 松本信義 — 藤原 晃 ○ 先鋒 堀の横面二本は實に氣持がよかつた。水津は初段小田と白熱戦を演じ、我々は息を殺し手に汗を握つて見護つた。幾分か火花を散らした後遂に水津の見事な籠手は小田のせめめをさした。そして遂に我々は萩中10點萩聯青5點をもつて勝つた。結局合計點萩中18點で優勝次が萩商17點、次が萩聯青で10點と云ふ成績であつた。

今や、我々は、下關、明倫、宇部等の試合をふんで、前の我々より、すうつと試合馴れて、之により秋の縣體の劍道大會に幾分の自信を得たと思ふ。かくして、此の自信をもち續け、益々奮勵努力して萩中の名聲を天下に轟かせん事を期す。

山口縣體育大會

十月十四日。巴城の朝霧を衝いて晴の戦場に馳す我々の狂者、彼等の耳朶に長くかすかに感激の涙を流して残るは、友が熱誠の萬歳の叫だった。

明けて十五日。天高く氣清く。若人の血は湧き心は躍る。

あ、遂に我等はこゝに優勝の榮冠を戴き得たのである。その勝因は選手の闘志満々常に攻撃に出でて敵の機先を制した事及び萩中應援團の熱烈なる精神の應援を受けて遺憾なく日頃の實力を發揮し得た事にある。

優勝旗を眼前に見上げた時、我等は何とも名狀し難い感激にむせぶ事を禁じ得なかつた。第一回を優勝したのであるから今後の優勝旗は皆萩中の獲得するところとなり人事を後編諸君に切望す。

流口先輩は夏休み中より連日に渡り熱心に我々を指導下され我々大いに得るところあり。今度の優勝の一要因をつくりたるものと信じます。この恩謝して餘あり。紙上より厚く御禮申し上げます。

S、K生記

宇部遠征記

十月二日(日曜)我等劍道部選手十名は練習試合の爲め、宇部市に行つた。参加校は我が校、宇部中、宇部工等三校であつた。

此日の組合せを見るに 東之部。柳商、大中、大島商、豊中、山中、柳中、小郡農、周中、高中、徳商、多々良中、防商 西之部。安下庄中、萩中、宇中、萩商、岩中、鴻中、下松工、山師、防中、關中、下商、興中、日置農 見よや西部の強剛を。いづれも先年の覇者防中を一舉に居り木の蓋被都たる武徳殿に凱歌を高らかにあげんと闘志満々。宇中、鴻中、山師、防中、關中、下商は昔に聞けた古剛者。其の間に互して我が選手。健闘また健闘。よく戦へり。戦績を圖示す。

選手名		學校名	
大將	水津清信	安	萩
副將	田村 甫	中	宇
	楊井 茂	中	萩
	中原正久	中	岩
先鋒	山本正夫	中	鴻
補員	室田 了	中	下
	早川正毅	中	山
		中	防
		中	關
		中	下
		中	興
		中	日
			豊
			中
			徳
			商
			多
			々
			良
			中
			防
			商
			西
			之
			部
			安
			下
			庄
			中
			萩
			中
			宇
			中
			萩
			商
			中
			岩
			中
			鴻
			中
			下
			松
			工
			山
			師
			防
			中
			關
			中
			下
			商
			中
			興
			中
			日
			豊
			中
			徳
			商
			多
			々
			良
			中
			防
			商
			西
			之
			部
			安
			下
			庄
			中
			萩
			中
			宇
			中
			萩
			商
			中
			岩
			中
			鴻
			中
			下
			松
			工
			山
			師
			防
			中
			關
			中
			下
			商
			中
			興
			中
			日
			豊
			中
			徳
			商
			多
			々
			良
			中
			防
			商
			西
			之
			部
			安
			下
			庄
			中
			萩
			中
			宇
			中
			萩
			商
			中
			岩
			中
			鴻
			中
			下
			松
			工
			山
			師
			防
			中
			關
			中
			下
			商
			中
			興
			中
			日
			豊
			中
			徳
			商
			多
			々
			良
			中
			防
			商
			西
			之
			部
			安
			下
			庄
			中
			萩
			中
			宇
			中
			萩
			商
			中
			岩
			中
			鴻
			中
			下
			松
			工
			山
			師
			防
			中
			關
			中
			下
			商
			中
			興
			中
			日
			豊
			中
			徳
			商
			多
			々
			良
			中
			防
			商
			西
			之
			部
			安
			下
			庄
			中
			萩
			中
			宇
			中
			萩
			商
			中
			岩
			中
			鴻
			中
			下
			松
			工
			山
			師
			防
			中
			關
			中
			下
			商
			中
			興
			中
			日
			豊
			中
			徳
			商
			多
			々
			良
			中
			防
			商
			西
			之
			部
			安
			下
			庄
			中
			萩
			中
			宇
			中
			萩
			商
			中
			岩
			中
			鴻
			中
			下
			松
			工
			山
			師
			防
			中
			關
			中
			下
			商
			中
			興
			中
			日
			豊
			中
			徳
			商
			多
			々
			良
			中
			防
			商
			西
			之
			部
			安
			下
			庄
			中
			萩
			中
			宇
			中
			萩
			商
			中
			岩
			中
			鴻
			中
			下
			松
			工
			山
			師
			防
			中
			關
			中
			下
			商
			中
			興
			中
			日
			豊
			中
			徳
			商
			多
			々
			良
			中
			防
			商
			西
			之
			部
			安
			下
			庄
			中
			萩
			中
			宇
			中
			萩
			商
			中
			岩
			中
			鴻

我をして五人を許さんか

山本は、強を以て戦ひ、中原は術を以て戦ひ、梶井は智を以て戦ひ、田村水津は體を以て戦ふ。然して各々一層の氣魄あることを冀ふ。

田村此日振はざりしは如何?
まこと「力拔山、氣蓋世時不利」を果して此の謂か。

惟ふに近時いづれの學校もその術殆ど伯仲して、其點數僅の差あるのみ。唯試合の度數多き學校に勝目多く、避阻にあらずは當然の理である。「天の時地地利の努力に時をふれ折につけて試合の度數を重ねる」ことにあると思ふ。最後に岡部先生の御努力と、選手諸君の奮闘を多謝として擲筆す。

大村武一記

辯論部

辯論は平和の武器である。之に措なる者は恰も戰場に臨み精銳なる大砲なきが

如くである。自己の感情を衆人環視の中に發する事は重大なる價値を有する

殊に將來國を預ひて立たんとする者は、此の現時の難局に際して如何にして人心を得るか。又國際聯盟總會、或は議會、選舉演説のとき如何に雄辯の必要なるか。實生活に於ても又然り。雄辯の力に待たればならぬ。時あたかも滿洲事變直後、事務局多事多端、國民精神の覺醒期に我が菽中學校秋季辯論大會は初冬師走朔日を以つて開催された。若き血に燃ゆる辯士の熱烈なる大獅子吼の記録を左に記す。

- 一、開會の辭 委員
- 二、新時代來らんとす奮起せよ 伊藤美一
- 三、文化生活と我等の使命 中川修二
- 四、難局に直面して現代青年の覺悟如何 山田正彦
- 五、兵士の靴底を覗いて 長野征逸
- 六、人生とは何か 横山啓二
- 七、積みよ經驗を 山下誠一
- 八、人間一茶を思ふ 五ノ三 筒井 深

九、獨學自習 貞本 尙

- 十、青年と體育 栗田當雄
- 十一、正義の絶叫 大島康正
- 十二、英雄出でよ 白藤孝亮
- 十三、羊の偽物 伊藤祐亮
- 十四、自己の力を信じて奮闘努力の精神を養へ 今井義雄
- 十五、大衆に叫べん 花田一雄
- 十六、偉大なる新生活 瀧口義世
- 十七、滿洲事變につきて 服部正吾
- 十八、滿洲事變を凝視して日本帝國の使命 齋藤孝正
- 十九、辯舌の力 三久保田忠作
- 二十、若者よ大に奮起せよ 田中邦藏
- 廿一、如何にして希望を達すべきか 清水忠夫
- 廿二、海外發展と我々 西本 實
- 廿三、我も人なり彼も人なり偉くならん 淺原昌佑
- 廿四、英雄を禮讚す 河野希一
- 廿五、滿洲に於ける日本の正當な立場 玉井友世

廿六、感激に満ちたる生活 宮崎 茂

廿七、吾人は何故に國を愛するか 吉賀弘一

廿八、共同生活 石村豊徳

廿九、犠牲的精神 五ノ二 大山慶太郎

三十、時勢に鑑みて青年の覺悟を論ず 田中正樹

卅一、立志 原 融

卅二、宗教とは何ぞや 五ノ二 井上國雄

卅三、閉會の辭 河野先生

討論「遺傳か環境か」
討論は時間の關係上十五分間許りで十分の意を盡くさなかつたのは遺憾とする所であるが相當の意見を聞く事を得た。然し乍らこの討論につき尙ほ幾多の研究修養を要するものがあつた。尙ほ昭和六年度辯論大會入賞者左の如し。

- 一等、淺原昌佑 二等、今井義雄
- 三等、大島康正 四等、山下誠一
- 河野希一、大山慶太郎、井上國雄
- 昭和七年度春季辯論小會
- 五月四日
- 第五學年
- 一、開會之辭 田坂 興道

二、艱難と競争 阿座上 孚

三、モダンボーイとは何ぞや 久保田忠作

四、酒 田邊 良平

五、黄色人種と結束して立て 山田正彦

六、人生の新局面 原 嘉道

七、黒魂を談ず 金子 治平

八、闘争か平和か 清水 忠夫

九、所感 岡本 昇

十、同 佐々木軍治

十一、討論 田園禮讚か都會禮讚か 五月四日

第四學年

- 一、開會之辭 伊東 美一
- 二、調和 小方 司
- 三、東亞時局と國民の覺悟 田中政樹
- 四、ぶるもの 河野 道弘
- 五、目的を定めて勇往邁進せよ 松尾 岩雄
- 六、無題 横山 岳朗
- 七、正義と士道 寺島直太郎
- 八、大宗教育家出でよ 大島 康正
- 九、イングリッシュデイニング 原 信一
- 十、カプトル 横山 圭治

十一、士の精神 伊東 美一

十二、山口競技大會報告 中原 芳美

十三、閉會之辭 大島 康正

討論會 文化の發達は人類に幸福をもたらすや否や 五月五日

第三學年

- 一、開會之辭 委員
- 二、米國論 津座 一二
- 三、滿蒙論 白藤 孝亮
- 四、自ら發憤すべき動機 松尾 美男
- 五、守れ祖國 西本 實
- 六、立志と成功 田中 敏徳
- 七、聯盟の決議を一蹴せよ 宮崎 茂
- 八、延び行く日本 佐伯 貢
- 九、滿、蒙新天地の開發は新青年に候つ 田村 晴雄
- 十、死と永生 永田元三郎
- 十一、道 村岡 統一
- 十二、健康と人生 田邊 實彦
- 十三、熱 山下 誠一
- 十四、英雄を崇拜して而して國難を開け 松浦 二郎
- 十五、宗教 花田 一雄
- 十六、討論 金か力か

